

墓
場
か
ら
の
ス
タ
ー
ト

ヤ
ン
ト
レ

登場人物

（第1話）

三枝健人（48）主人公

パパジ（男34）三枝の部下

メイリ（女30）パパジの妻

アイナ（女8）パパジの娘

アラ（女4）パパジの娘

キカイ（女27）メイリーの妹

ネルソン（男30）警官

テイトボーイ（男34）三枝の部下

（第2話）

アンジェリン（女25）三枝の部下

リム（男57）副市長

タン（男51）病院長

リンロン（女54）リムの妻

マリリン（女33）リムの長男の妻

ドンドン（男31）リムの次男

ヴィルマ（女27）ドンドンの妻

エドナ（女24）看護師

ベル
（女 2 5） ホームレス
ラップ
（男 3 0） ベルの夫

（第 3 話）

デレク
（男 2 4） 三枝の部下

ロメロ
（男 3 0） 三枝の部下

湯野
（男 6 7） 料理長

マイキー
（女 2 8） シングルのマザー

メロディ
（女 3 ） マイキーの娘

（第 4 話）

ジョバイ
（女 1 4） 未成年の母親

ドンナ
（女 4 1） レズビアン

ラニー
（女 3 8） レズビアン

ビリー
（男 3 3） ゲイ

キコ
（男 3 6） ゲイ

イアン
（男 3 0） ロメロの友人

セバスチャン
（男 5 5） 中古車ディーラー

クリス
（女 4 0） 家庭教師

第5話

カミール

（女 2 2）ロメロの彼女

キム

（男 5 2）韓国食材店経営

第6話

マリア

（女 2 5）再婚希望の母親

ビログ

（男 6）墓地に住む少年

リガヤ

（女 3 4）ビログの母親

ミラー

（男 4 6）ドイツ人

シオニ

（女 2 8）ミラーの妻

第7話

コリーナ

（女 3 5）リガヤの友人

ロビン

（男 3 5）ギャング団のボス

ジミー

（男 1 4）ロビンの部下

第8話

ナネット

（女 4 5）未亡人

第一話

○マニラ・マラテ・デルピラル通り（深夜）

100m先にはネオンが煌めき、派手な衣装と濃い化粧の女性たちが賑やかに客を誘っている。一方で、この場所は街灯もなく薄暗く、シャッターは閉まり、人通りも少ない。

三枝健人（48）、とぼとぼ歩いている。細い路地に少年たちが大勢、身を潜めている。角にいた見張り役の合図で一齐に飛び出してくる。あっという間に三枝を取り囲み、バッグ、腕時計、ジャケット、小銭、最後にはTシャツまで奪い去り、少年たちは笑いながら走り去っていく。

三枝、その場に立ち尽くしている。三枝、右ひじを手で押さえながら、よろよろと花壇の縁に座り込んでいる。パパジー（男、34）、暗がりに座り込んでいる三枝を横目で見ながら、通り

過ぎようとしている。三枝だとわかる
と、慌てて駆け寄る。

パパジー「ボス！ シャツは？ どうしたんですか？」

三枝、うつろな表情でパパジーに顔を
向ける。

三枝「ああ、パパジーか！ 少年ギャング団
に襲われた」

パパジー「こんな時間に日本人が一人で歩い
ていたら危険だとわかっているでしょう。

怪我は？」

三枝、右ひじをさすりながら、

三枝「右ひじが痛い、強く引っ張られた」

パパジー「盗られたのは？」

三枝、舌を出して、引きつったような
笑みを浮かべている。

三枝「パスポート、現金、クレジットカード、
腕時計、ジャケットにTシャツか。ズボン
以外全部な。スマホは充電切れで置いてき
たからコンドミニウムにある」

パパジー「笑ってる場合ですか！　警察に行きましよう」

三枝、左手を左右に振って、

三枝「行かない。どうでもいい」

パパジー、怪訝な表情。

パパジー「どうして？」

三枝、左手で行け行けと合図している。

三枝「ポン引き野郎！　俺なんかにかまわないで、さっさと帰れ」

パパジー、真剣な眼差しで、

パパジー「この４年間、ボスにどれだけ世話になったんですか！　ほっとけるわけがない」

パパジー、三枝を立たせようとする。

パパジー「警察に行かないならそれでもいいけど、帰りましよう。タクシー拾いますから」

三枝、右こぶしを左手の掌に叩き、

三枝「そうだ！　拳銃売ってくれないか？」

パパジー「突然、何を言い出すんですか！　拳

銃なんか買って何をするんです？」

三枝、自分のこめかみに右手人差し指をつきつける。

パパジー「強盗にあっただくらいでなぜ自殺なんかするんです？」

三枝「実は、もう金がつきて、日本にも帰れない。コンドミニアムの家賃も払えなくて、もうすぐ追い出される。彼女も出て行ってしまった」

○（回想）東京・オフィスビル・経理部・内
4年前。

大企業。デスクネームプレートには（経理部長・三枝健人）と書かれている。

三枝、下を向きながら座っている。

部下、立ったまま話している。

部下「明後日、監査が入るようです」

三枝、顔を伏せたまま、手を握り締め、絞り出すような声で、

三枝「わかった」

部下、出ていく。

三枝、ゆっくり顔を上げる。大きく伸びをして、意を決した表情。

○（回想）東京・三枝の自宅

閑静な住宅。三枝健人、由紀の表札。三枝、慌てながら鍵を開け、飛び込んていく。押し入れからスーツケースを引っ張り出し、身の回りの物、パスポート、パソコン、大量の現金などを詰め込んでいる。キッチンに行き、引き出しから紙を取り出し、メモを書き、テーブルの上に置く。メモには（由紀、すまない）とだけ書かれている。スーツケースを押し、玄関に置いてあったゴルフバッグを抱えながら、飛び出していく。

（回想終わり）

○マニラ・マラテ・デルピラール通り（深夜）

パパジー、三枝の隣に座っている。

パパジー「大金持ちの日本人だとばかり思っていた」

三枝「俺は犯罪者だ。会社の金を横領してマニラに逃げてきた。妻を捨ててな」

パパジー「うひょー、やるじゃないか！」

三枝、首をかしげている。

パパジー「いくら横領した？」

三枝「一億円くらい、マニラに持ってきたのは8000万かな、4年で全部使い果たした」

パパジー「わはっ、それで死にたいわけ？」

三枝「妻と家のローンのために、20年以上遊びは一切せずに真面目に働き続けてきた。

しかし5年前、その生活に虚しさを感じて真面目に働くことが馬鹿馬鹿しくなった。

会社の金を使い込み、女に貢ぎ、酒を飲み、ギャンブルに溺れた。マニラではパパジーの知っての通り、上流階級と付き合い、仕

事もせず、遊び続けた。大バカ者だわな」
パパジー「4年間、散々遊んでたなあ。近頃、
連絡がこないのてどうしたのかなと思って
いた。そうか、金がつきたんだな」
三枝「8000万あれば永遠に遊べると錯覚
していた」

○（回想）マニラゴルフクラブ・1番ホール
約100人の著名なメンバーが見守っ
ている。三枝もその中にいる。老紳士
が煙の出るボールをドライバーで打つ
と拍手やナイスショットの声が聞こえ
る。

○（回想）パサイ・リゾートカジノ・VIP
ルーム
三枝、友人たち、正装してバカラに興
じている。

○（回想）ニューポートシティ・マリオット

ホテル・パーティー会場

参加者は数百人。オーケストラが演奏している。壇上でシックな装いの年配の女性が話している。

テーブルにはフルコースの料理。足元にはギフトが置かれている。

三枝、正装して食事している。

○（回想）パサイ・ゴーゴバー・VIPル

ーム

三枝、パパジー、中2階からステージを見下ろしながら、飲んでいる。ゴーガールがステージで裸で踊っている。

○（回想）セブ・海上

三枝、友人たちと女性が数名、大型クルーザーのデッキに寝転んでビールを飲んでいる。トロリングの釣り竿が大きくしなり、慌てて釣り上げようと

している。

（回想終わり）

○マニラ・デルピ拉尔通り（深夜）

三枝「さあ、拳銃売ってくれ」

パパジー「自殺はいつでもできる」

三枝、ぶつぶつ呟いている。

三枝「失敗した。少年ギャング団に襲われたとき、抵抗すればよかった。そうすればナイフで刺されて、死ねたな」

13

パパジー「住むところがないのなら俺の家に
行こう。それで落ち着いて考えてみたら？

世話になりっぱなしだったから恩返しする」

三枝「お前の家なんて行ったら迷惑になるだ
けだろ、金もない日本人を助けてもなんの
得にもならない」

パパジー「ごちゃごちゃ言っていないで。コン
ドミニウムに寄ってスマホや服とか持ち出
さないと」

パパジー、三枝を抱え上げる。

三枝、元氣なく立ち上がる。
パパジー、タクシーを止め、三枝を乗せている。

○アセアナシティ・コンドミニウム・玄関（深夜）

高級コンドミニウム。
パパジー、スーツケース、バッグ、ゴルフバッグをタクシーに積み込んでいる。
三枝、タクシーの横に立ち、コンドミニウムを見上げている。

14

○トンド・墓地（深夜）

大きな門をタクシーが通過していく。
パパジー、右、左、直進とドライバーに指示を出す。
お墓が無数に並んでいる。
窓を開けて外を眺めていた三枝、口と鼻を手で押さえている。

三枝「臭うな、ここはどこなんだ」

パパジ「トンドにある墓地だよ」

三枝「なんで墓地なんかに来たんだ」

パパジ「俺の家がある」

三枝「冗談だろ！」

パパジ「俺は生まれたときからここに住んでいる。さあ着いたぞ」。

パパジ「金を払ってから、スーツケース、ゴルフバッグとカバンを後部座席及びトランクから引っ張り出す。

三枝「お墓を見まわしながら立ちすくんでいる。

パパジ「荷物を運んでいる。

三枝「キヨロキヨロしながら、ついていく。

大きなお墓をパパジが指さしている。

パパジ「ここが俺の家だ」

三枝「家って？」

パパジ「もう遅いからみんな寝ている。ボスが住むのは隣の小さいお墓。石棺の上に

マットレスが敷いてあるから、寝心地は悪くない。とにかく今は寝て！」

三枝「トイレに行きたいんだが」

パパジ「指さしている。」

パパジ「そのあたりでしたらいい」

○トンド・墓地・三枝の家（深夜）

三枝、スマホのライトでスイッチを探し、明かりをつける。6畳ほどだが、掃除は行き届いている。中央に石棺があり、その上にマットレス・シート・薄い掛布団と枕が置かれている。小型テレビ、プラスティックの椅子が2脚、小さな折りたたみ机、扇風機、洗濯籠がある。

三枝、荷物を部屋に運び入れ、椅子に腰かける。マットレスをめくり、拳で石棺を軽く叩いてから。頭を抱えて嗚咽を漏らしている。

三枝N「死んだほうがましだ。ここまで落ち

て生きていくことになんの意味がある」

三枝、明かりを消して、ベッドに入り、目を閉じている。しばらくして起き上がり、大声で吠えている。

三枝 N 「ギャギャウギャガー」

何度も吠えて気が晴れたのか、げらげら笑っている。

○ 同 ・ （朝）

ニワトリがあちこちで鳴いている。老人たちの話す声、バイクの音、ドアの開閉音、パンデサル（塩パン）を売る

17

声、子供たちのはしゃぐ声、母親が子供を叱る声が響き渡っている。

三枝、目を開けて、起き上がり、外の様子を見ている。

誰かが P A R A I S O （楽園）を口ずさんでいる。

x

x

x

（フラッシュバック）

スモークーマウンテンのゴミの山で働く子供たち。スモークーマウンテン（フリピンの歌手、グループ）がPARAISIOを歌っている。

x

x

x

三枝 N 「ばかやろう、ごみの山や墓地が楽園かよ。そういえばこの歌、紅白歌合戦で聞いたことがある」

メイリオン（女30）が中を覗いている。

18

三枝が起きているのを見て入ってくる。

三枝、眉をしかめている。

メイリオン「パパジはまだ寝てるけど、朝ごはん食べる？」

三枝「誰？」

メイリオン「メイリオン、パパジの奥さんだよ」

三枝、うなずきながら、

三枝「初めまして三枝です」

メイリーン「タガログ語！　上手だねー、独り言までタガログ語で話すんだ。それだけ喋れたら誰も日本人とは思わない」

三枝「トイレはどこ？」

メイリーン「裏に簡易トイレがある。そこでシャワーもできる」

三枝、外に目をやると女の子が二人、じっと見ている。

三枝「女の子が見てるけど」

メイリーン「うちの娘だわ。大きいほうがア

イナで小さいほうがアラ」

メイリーン、手招きするがアイナもアラも入ってこない。

メイリーン、二人に向かって、

メイリーン「恥ずかしがってるんじゃないよ。こっちに来て挨拶しな！」

アイナ（女8）、体を振らせながら入ってくる。

アラ（女4）、アイナの後ろに隠れてい

る。

アイナ「こんにちは」

三枝、手を振りながら、

三枝「アイナ！ アラ！ こんにちは」

メイリオン、三枝を手招きして、

メイリオン「ボス！ 朝ごはん食べにおいで」

○同・パプジの家（朝）

広さは20畳の立派なお墓。前に長机、
その上に透明の蓋のトレイが10個並

20

べてある。長机の左右にバイクと電動
バイクが置かれている。ハエ取り紙が
ぶら下がり、ハエがびっしりついてい
る。

扇風機がリボンを揺らしながらくるく
る回っている。

後ろには大型冷蔵庫があり、4つのコ
ンロ、プロパンガスのボンベ、10個
のポリタンク。3人が料理を作ってい
る。

その後ろに石棺があり、マットレス・机・棚・ソファがある。

メイリーン、キカイ（女27）、トレイの後ろに立っている。

三枝、トレイを見ている。

キカイ、トレイの蓋を次々に開けていく。

メイリーン、皿・ナイロン袋・カップを持っている。

メイリーン「どれにする？」

三枝、あれこれ見ながら迷っている。

メイリーン「テイクアウトだけやってるの。

このお皿あげるから、次からは食べる時に持ってきて。ボスはいつでもタダだからね」

メイリーン、ナイロン袋を皿に被せている。

メイリーン「このナイロン袋でお皿を包むの。その上から食べ物を置く。食べ終わったら袋を捨てるだけで皿を洗わなくてすむ。

またナイロン袋を手にはめて手掴みで食事すれば手も洗う必要はないでしょう」

三枝、一つのトレイを指さしている。

メイリオン、スプーンで小さなカップに惣菜を入れ、ひっくり返して皿にのせ、ライスを添えて三枝に渡す。

三枝「なんとも不思議な食べ方だなあ」

キカイ、けらけら笑っている。

三枝「これはいくらで売ってるの？」

メイリオン「ライスと惣菜1品で120円」

三枝「安すぎる」

メイリオン「貧乏人しかないからね。それでも高いって言われる」

客がやってきてトレイを指さし、お金を払っている。

キカイ、惣菜をカップに入れ、ナイロン袋に放り込み、口をしぼって渡している。

メイリオン「やっぱりスプーンとフォークはいるよね。スープが飲めないわ」

メイリーン、スプーンとフォークを渡し、スープとコップに入れた水を三枝に渡す。

三枝「ありがとう」

メイリーン、キカイを指さし、

メイリーン「この子はキカイ、私の妹」

三枝「三枝です、よろしく」

キカイ、にっこり笑っている。

アイナ、アラ、キカイの横にいてスマ

ホで遊んでいる。

三枝「アイナ、アラ、バイバイ」

アイナ、アラ、手を振っている。

x

x

x

三枝、再びやってくる。

三枝「おいしかった。パパジはまだ寝てる？」

メイリーン「よく寝るからねー」

三枝「付近を見て回りたいんだけど危なくな
いかな？」

メイリーン「死にたいって言ってる人が怖が
ってどうする？ キカイ！ 迷子になって

も困るから案内してあげて」

キカイ、日傘を掴んでいる。

○同・墓地・内

キカイ、日傘を差しながら歩いている。
お墓が3段4段に積まれてる。道を曲
がると立派なお墓や小さいお墓が延々
と続いている。子供が多い。外に椅子
を出して老人が座っている。手洗いで
洗濯をしている。洗濯物がお墓の入り
口にずらっと干してある。

三枝、首を左右に振りながら珍しそう
に見ている。

よく見ると小さい店がある。看板もな
く、一見したただけでは何の店かわから
ない。

理容店、バイクの修理、歯医者、コー
ヒーショップ、プロパンガス、水、ハ
ンバーガー、雑貨店、薬局、アイスク
リーム、パン、美容院、クリーニング、

古着、果物、肉、野菜、マッサージなど。

広場がある。

キカイ、店を指さして話している。

キカイ「ここはお粥だけ売ってて、安いよ。

こっちは肉煮込みの店、ここはフライドチキン、隣でバーベキュー焼いてる。あの店は密輸たばこ売ってる。正規のたばこの半額だよ。密造酒もある。あの店はパパジー御用達で精巧な偽造IDを作ってくれる」

三枝「なんでもありだな」

25

三枝、ネズミの死骸を踏みそうになり、驚いて飛び跳ねている。

三枝「ははは、危ない危ない。しかしまあ、ここは害虫の宝庫だな」

キカイ「ゴキブリ、ハエ、蚊、ネズミ、ヤモリ、うじゃうじゃいる。カタツムリ、カエル・トカゲもいる。猫や犬にニワトリは放し飼いだからそこら中に糞をするしね」

三枝「不衛生なんてもんじゃない」

キカイ「ここで暮らしていけそう？」

三枝「ため息をついている。」

三枝「うーん、どうかな」

つばめが低空飛行で三枝の脇を猛スピ

ードですり抜けていく。

三枝「ここには何人くらい住んでるの？」

キカイ「5000人くらいじゃないかな」

三枝「驚いている。」

三枝「そんなに？ 犯罪も多いだろうな」

キカイ「ギャングもいる。麻薬中毒者もいる。

喧嘩は時々見る。でもほとんどの人は安い

給料でまじめに働いている」

三枝「拳銃買うのは簡単？」

キカイ「うん、改造銃ならすぐに手に入る。

本物も売ってると思うけど。まだ自殺した

いの？」

三枝「返事に困っている。」

キカイ「それよりパスポート取られたんでし

よ。偽造パスポートや偽造「ID」を買えば？」

三枝「金もない。いない」

三枝、落書きを見て笑っている。

落書きには（ここで盗むな、金持ちから盗め！）と書かれている。

三枝「家賃って払ってるの？」

キカイ「払ってない。どこのお墓も所有者がいてその人の了解をとってる。墓守ってこれと」

三枝「石棺の上に寝るといのはいいの？」

キカイ「亡くなった人が寂しがらなくていいじゃない？」

三枝、苦笑いしている。

ソフトクリーム屋の前で、

キカイ「ソフトクリーム食べよう」

三枝「お金持っていない」

キカイ「それくらい大丈夫」

キカイ、ソフトクリームを2つ受け

取り、椅子に座る。

三枝、隣に座る。

三枝「電気はあるんだ」

キカイ「盗電だよ。よく切られるから、うち

は2か所から引いてる」

三枝、絶句している。

三枝「盗電って！」

三枝、空を見上げている。沈黙の後、話し出す。

三枝「W I F Iはあるの？」

キカイ「うちはないけど、近所のW I F Iパ
スワード、全部教えてあげる」

三枝「ありがたい」

キカイ「ボスのおかげで家族の生活がガラッ
と変わったんだよ。2年前に店を始めて、

28

バイク、大型冷蔵庫、電動バイクもスマホ
も手に入った。私はナボタスでぶらぶらし
てたんだけど、店を始めるときにここに来
たの。利益も出ているのでアイナは学校に
通える。だからボスは一生食べ物は無料！
それくらい感謝している」

三枝「俺の無駄遣いも少しは役に立ったんだ
な」

警官のネルソン（男30）やってくる。

キカイ、小声で、

キカイ「嫌な奴がきた」

ネルソン、三枝を嘗め回すように睨んでいる。

ネルソン「キカイ！　誰？　見かけない奴だけど」

キカイ「三枝さん、日本人だよ」

ネルソン「なんで日本人が墓地にいる？」

キカイ「昨日からここに住んでるの」

ネルソン「よりによってこんな掃き溜めに！」

興味本位か？　それとも金がないのか」

三枝「金がない」

ネルソン、座っていた三枝の胸ぐらをつかみ、引っ張り上げる。

ネルソン「俺は日本人が大嫌いなんだよ。幼い少女を弄んだり、札束でやりたい放題しやがって」

三枝、苦しがつている。

ネルソン「お前もそうだったろうが、金がなくなっ
ていい気味だ」

キカイ、立ち上がり、ネルソンの手を掴んで、引き離す。

キカイ「何も悪いことをしていないのに手荒なことしないで」

キカイ、三枝の顔を覗き込んでいる。

キカイ「大丈夫？」

三枝「あー、大丈夫だ」

ネルソン「金がない日本人がフィリピンにいる意味はない。さっさと日本に帰れ！それとも帰れない理由でもあるのか？」

キカイ「自殺しそうだったからパパジーが連れてきたの」

ネルソン「そりゃまた都合のいい場所に来たもんだな、自殺してそのまま棺にすぐ入れる。土葬だからなんの手間もかからない」

キカイ、三枝の手を掴んで、

キカイ「笑えない！ 帰ろう」

三枝、キカイ、歩き出す。

ネルソン、じっと見ている。

キカイ「ネルソンは賄賂をもらって家を建て、

ベントツを乗り回している。密輸たばこは正規品の3分の1の価格で売れるのに、賄賂を払うため、半額にしなければならない」

三枝、うなずいてる。

三枝「賄賂を払わないとどうなる？」

キカイ「密輸たばこはすべて没収される」

三枝「払うしかないな。俺はもう少し歩いてくる。キカイにいつも付き添ってもらうわけにもいかないだろ」

キカイ「気をつけて」

三枝、ぶらぶら歩きだす。道はぬかるんでいて、糞やゴミがあり、まっすぐ歩けない。

しばらく歩いて、

テイトボーイ（男34）と若者3人が椅子に座ってる。

テイトボーイ、三枝を指さしながら、

料払え！ お前、見ない顔だな」

三枝「金なんか持ってない、調べて見ろ」

若者1、立ち上がり、三枝のポケットを探っている、両腕を前に突き出し、お手上げのポーズ。

テイトボーイ「小銭も時計も携帯も何もないのか、何しに来た？」

三枝「ここに住んでるんだ、昨日からだけど」

テイトボーイ「中国人なのか？」

三枝「日本人だ」

テイトボーイ、目を細めて三枝の顔をじろじろ見ている。

テイトボーイ「どこに住んでる？」

三枝「パパジーの家」

テイトボーイ「ポン引きパパジーか」

三枝「そうだ」

テイトボーイ「あいつも貧乏な日本人なんかをよくもまあ引き受けるものだな、物好きな奴だ。金のないやつに用はない。さっさと行け！ 但し、ここから先は電気も通っていない。トイレもないから穴を掘って用を足している。スクワッター（不法居住者）

しかないし、あそこに見える少年たちはギャングだ。警察は見て見ぬふりだからやりたい放題。麻薬の売人は野放しで、中毒者だらけだ」

三枝、少年たちをじっと見ている。

三枝「帰るとするか」

ティトボーイ「おう、俺はティトボーイ、パパジーによろしくな」

○同・墓地・パパジーの家・前

パパジー、アイナ、アラ、電動バイクに乗っている。

三枝、帰ってくる。

パパジー「ボス、アイナを小学校まで送るけど、一緒に行く？」

三枝「行く」

3人乗りの電動バイクの前の席にパパジー、膝の上にアラ、後部座席に三枝とアイナ。

アイナ、制服を着て、ピンクのバック

バックを膝の上に置いている。

パパジー、電動バイクをスタートさせる。

三枝、アイナに話しかける。

三枝「何年生？」

アイナ「2年だよ」

三枝「学校は楽しい？」

アイナ「うん」

三枝「好きな科目は？」

アイナ「タガログ語と英語は大好き。でも算数は苦手で足し算は10までなら指で数えられるけど、10を超えたら難しい」

三枝「おじさんは算数は大得意、帰ってきたら教えてあげる」

アイナ、にっこり笑って、

アイナ「本当？ 約束だよ」

○同・小学校・前

送り迎えの車、ジプニー、トライシクル、電動バイクで大渋滞している。

アイナ、バックパックを背負って、パ
パジの頬にキスをする。三枝に手を
振りながら学校に向かって歩いていく。

パパジ、三枝に向かって、

パパジ「この小学校は生徒が多いので、午
前と午後の2交代制なんだ。アイナは午後
組。入れ替えの時はとても混雑する」

三枝「午前組は何時から始まる？」

パパジ「6時だったかな」

三枝「おお、それは早い」

パパジ「ところで、一文無しだったよね。」

これ使って！」

パパジ、三枝にお金を渡す。

三枝「いらない。現金はないけど、スマホの
残高には10万くらいある」

パパジ「そのお金は使ってはダメだ」

三枝「なぜ？」

パパジ「なんとなくだけど、いざという時
のためにキープしていたほうがいい」

アラ、駄々をこねている。

パパジー、TWINKLE TWIN

KLEを歌っている。

アラ、一緒に歌っている。

三枝「何かしたいな？ 日銭くらいは稼がないと」

パパジー「時間はあるからゆっくり考えてみて、死んだと思えばなんだってできる」

三枝「そうだよな。ポン引きのくせにいいこと言う」

パパジー、笑っている。

三枝「このお金もらっておくわ」

○同・墓地・三枝の家

翌日。

三枝、スマホを操作している。

パパジーやってくる。

三枝「なんとかWIFIが使える。ぶちぶち切れるけど」

パパジー「ボスは子供はいないんだよな。なぜ作らなかったの？」

三枝「あまり話したくはないんだが・・・」

○（回想）東京・三枝の自宅・寝室

カレンダーには赤丸で排卵日が書かれている。

三枝、由紀、セックスをしている。

三枝、顔をしかめている。

由紀「我慢しなさいよ」

三枝、顔をしかめながら続けるが、とうとう諦める。

由紀「子供がほしいほしいうって言うのにどうしてやめてしまうの？」

三枝「やればやるほどだんだん臭いがきつくなってきたて耐えられなくなる。昔はそうでもなかったのに」

由紀「産婦人科に何度も行ったけど、よくならない。鼻をつまんでできないの？」

三枝「集中できないんだ」

由紀「言い訳ばかりね。浮気でもしてるんじゃないの？」

三枝「馬鹿言うな」

由紀「もうセックスなんて金輪際しない。今日から別々に寝ますから」

（回想終わり）

○トンド・墓地・三枝の家

三枝「それでセックスレスになって、当然子供はできない」

パパジー「耐えられない臭いってあるな、ボスが悪いわけじゃない。今は奥さんはどうしてるの？」

三枝「さあな、まったくわからない。恐らく家を売って実家に帰ったとは思う。貯金は残したものの、妻は俺が横領してたことを知らなかったから、きつとひどい目にあっただろう。謝罪のメモだけ残して姿を消したから、殺したいほど恨んでるに違いない。二度と会うことはない」

パパジー「笑いながら、
パパジー「そうか、日本には帰れない、家もない、妻もいない、子供もいない、パスポ

トもない、金もない！　ないないづくし」

三枝、大きく口を開けている。

三枝「ぐへ！」

○トンド・ウグボマーケット（早朝）

翌日。

メイリーン、キカイ、三枝、野菜・肉・
魚を仕入れている。

三枝、珍しそうに見ている。

メイリーン「このお店で売残って、廃棄寸
前のものを買うの。毎日よ。値段は半額以
下」

キカイ「そうしないとあの値段では売れない
からね」

三枝「納得。なぜ八百屋も魚屋も米屋も玉子
屋も、同じような大きさの店ばかりある
の？　品揃えも同じだし」

メイリーン「初期投資が少なくてすむからじ
ゃない？」

キカイ「競争より共存だと学校で教えてもら

ったけど」

三枝「なるほどー」

○同・墓地・三枝の家

2日後。

アイナ、折り畳みの机の上でノートを開いて考えている。

三枝、紙に問題を書きながら教えている。

アラ、退屈そうにしている。

メイリーン、じっと見ている。

メイリーン「教え方、うまいじゃない」

三枝、メイリーンに向かって、

三枝「アイナもアラもいい子だな！」

アイナ「イエーイ」

アイナ、アラ、飛び跳ねている。

メイリーン「喜んでないで勉強、勉強」

○同・教会

2日後。

アイナ、席に座り、友達と話している。

三枝とキカイ、アイナの後ろの席で話している。

三枝「ここで日銭を稼ぐ方法はある？」

キカイ「ボスが働くの？」

三枝「もちろん」

キカイ「簡単なのは物売りだけど」

キカイ、しばらく考えて、

キカイ「そうだ、お墓の掃除なんてどう？ 入

り口で待っていて、墓参りに来た人の後を

ついていく。お墓に着いたら、掃除をしま

しょうかと提案する。たいていはOKして

くれる。100円くらいはくれるよ」

三枝「やる」

○同・墓地・入り口

入り口横にはろうそくの店、花屋がある。

三枝、ベンチに座り、チリ取りとほうきを横に置き、入口を見ている。

パパジー、心配そうに三枝を見ている。

パパジー「本当にやるんだ」

三枝「やるよ、少しでも稼がないとな」

パパジー、伸びをして、

パパジー「墓参りの人は来ないなあ」

三枝、スマホを見ている。

パパジー、話しかける。

パパジー「金持ちのゴルフ仲間がたくさんい

たよね。ヴァレンズエラの副市長で、サン

ダル工場を経営している中国人のリムさん

42

x

x

x

（フラッシュバック）

リム、市議会で議長を務めている。

x

x

x

x

x

x

（フラッシュバック）

リム、サンダル工場で伝票を確認して

いる。

パパジー「大手中古車ディーラーでフィリピ
 ン人のセバスチャンさん」

x
 x
 x

（フラッシュバック）

セバスチャン、ずらっと並んだ中古車
 を部下を引き連れ、見回っている。

x
 x
 x

パパジー「マカテイの病院長で上院議員の選
 挙参謀をしている中国人のタンさん」

x
 x
 x

（フラッシュバック）

タン、病院内を歩いている。
 医者、看護婦は姿勢を正し、制服を整
 えて、軽く会釈している。

x
 x
 x

X

X

X

(フラッシュバック)

タン、上院議員の事務所で打ち合わせをしている。

X

X

X

パパジ「大型韓国食材店をいくつも経営している韓国人のキムさん」

X

X

X

(フラッシュバック)

キム、韓国食材店で在庫状況を部下と共に調べている。

X

X

X

パ
パ
ジ
ー
「五
つ
星
ホ
テ
ル
の
料
理
長
の
湯
野
さ
ん」

X

X

X

（フラッシュバック）

湯野、レストランの厨房で部下が作った料理を厳しい表情で味見している。

x

x

x

パパジー「彼らとはもうつきあわないの？」

三枝「会いたいけど・・・メールも電話も無

視している。ゴルフなんて行ける身分じゃ

ない」

パパジー、三枝の膝を軽く叩いてる。

パパジー「お客さんだよ」

45

ろうそくと花を買っている4人の墓参り客がいる。

買い物が終わり、ゆっくり歩いている。

三枝、チリ取りとほうきを持ち、4人の後ろ20mほど離れてついていく。

積み上げられたお墓に着くと、三枝が

近寄り、話しかける。

三枝「よかったらそのお墓のまわりの枯葉や

ゴミを掃除しましょうか？」

お客1「頼む」

三枝、掃除している。ポケットからゴミ袋を取り出し、枯葉やごみを入れていく。

4人、見ている。

x x x

お客1「丁寧に掃除してくれてありがとう」

お客1、三枝に200円手渡す。

○同・パパジの家

三枝、アイスクリームをアイナとアラに渡している。

アイナ、アラ、おいしそうに食べている。

メイリオン、怪訝な顔。

三枝「お墓の掃除で500円稼いだから」

メイリオン「あらまあ」

○同・墓地・内

数日後。

三枝、手押し車でベルをチリンチリンと鳴らしながら、アイスクリームを売り歩いている。

近所のおばあさん、家の前の椅子に座って外を眺めている。

おばあさん「おやおや、日本人がアイスクリームを売っている。墓掃除はやめた？」

三枝「待っている時間が長すぎる。こっちのほうがいい」

おばあさん「2つ頂戴」

三枝、アイスクリームをスクープで3回すくい、コーンに白黄紫の3色アイスを盛り付けて渡している。

○同・パパジの家・前

ネルソン、トレイを開けて指さしている。

メイリーン、ナイロン袋に惣菜を入れている。

三枝、手押し車を押しながら帰っていく

る。

三枝、ネルソンを見て顔をしかめている。

ネルソン、三枝を見て、

ネルソン「お前、まだいたのか！　なんだよ

それ！　アイスクリームなんて売ってるん

じゃねえよ。日本人はもっと賢いのかと思

ってたけどお前はマヌケだな。貧乏なフィ

リピン人の仕事を奪ってるだけじゃないか。

少しは俺が感心するような仕事をしろよ！

メイリー「アイスクリーム売ってたっていい

じゃない」

ネルソン、金を払い、ナイロン袋に入

った惣菜とライスを受け取っている。

ネルソン「おい！　日本人！　仕事は終わり

なんだろ。メイリーがうるさいから歩き

ながら話そう」

メイリー「行かなくていいよ。ろくな目に

合わない」

○同・墓地・内

三枝、躊躇してるが、歩き出す。

ネルソン「名前は？」

三枝「三枝健人」

ネルソン、ナイロン袋を持ちながら、
スマホに入力している。

ネルソン「犯罪者だな？」

三枝、たじろいでいる。

ネルソン「日本から逃げてきたんだろう。不

法滞在もあるな」

三枝「ああそうだ。パスポートも盗まれて、

IDすらない」

ネルソン、スマホを見ながら、

ネルソン「いいこと教えてやろう。お前が日

本で何をやったか知らないが国際指名手配
はされていない。名前が本当ならな。フィ

リピンと日本の間には犯罪者引き渡し条約
があるから、指名手配されていれば捕まえ
られるんだが、運がよかったな」

三枝、にやりと笑う。

三枝「本当か！　不法滞在はどうなんだ？」

ネルソン「金もない貧乏な日本人はオーバーステイでも入管に収容されない」

ネルソン、パン屋で皿、スプーンとフオークを借り、ナイロン袋を逆さまにしてごはんと惣菜を皿に移し、椅子に腰かけて食べている。

三枝、横に座っている。

ネルソン「メイリーンはな、口は悪いが料理はいける」

三枝「たしかに料理はうまい」

ネルソン「密輸たばこ売ってるだろう。なぜ捕まえないかというと、あいつら貧乏人にはなくてはならないものを売っているからな。1箱450円もする正規のたばこなんて誰も買えない」

三枝「わかるけど」

ネルソン「それなら見逃して、少し賄賂をもらってるほうがみんなのためだろう」

三枝「一理はあるが、150円で売れるのに

220円になってる」

ネルソン「まあな、俺が全部取ってるわけじゃない。上司や同僚に配らないといけないからな」

三枝「キカイやティトボーイが言うには、ネルソンは賄賂を受け取って、高級車や家を買っている。警官としての職務を怠っているから、ギャングはやりたい放題。麻薬密売人は野放しで、中毒者が増えている」

ネルソン「ほう、ずけずけと耳の痛いことを言うじゃないか！ まあ何とでも言ってく

れ！俺が一番許せないのは近所の子供を集めて盗みや恐喝、物乞いをさせたりするやつらだ。金は巻き上げ、食事やおやつだけ与え、学校には行かさない。結果、子供は将来ギャングになるしかない。入り口近くにNPOがあるだろう。彼らも子供たちを助けようとがんばってるがほとんど効果がない。俺も少年ギャング団を束ねているボスを捕まえたいが、自ら手を下さない奴

を捕まえるのは難しい」

三枝「少年ギャング団を見た。なんとかしろよ」

ネルソン、食べ終わり、皿、スプーン
フォークをパン屋に返している。

ネルソン「またな、物売りなんかやめて、日
本人にしかできないことを考えろ！ 少し
はスラムの役に立つようなことをな」

第2話

○ トンド・墓地・パパジの家・前

アイナ・アラ、女友達2人とビニール

プールに入り、歓声をあげている。

キカイ、椅子に座って監視している。

三枝、やってくる。

三枝「環境は良くないのにアイナもアラも素

直ない子たちだ」

キカイ「メイリーンがしっかりしているから

ね」

アイナ「ボス、一緒に泳ごう、プールに入っ

て！」

三枝「そのプールは小さすぎる」

アイナ「それじゃあ、息止めて潜るから、何

秒か数えて？」

三枝「ようし、30秒我慢出来たらコーラを

買ってやる」

アラ、友達、キカイ、アイナを応援し

ている。

アイナ、潜る。

三枝「1、2、3、4・・・30」

アラ、友達、キカイ、大喜び。

アイナ、ガッツポーズ。

三枝、にこにこしながらコーラを買いに行く。

○同・NPO事務所

古い建物。壊れかけたNPO OFF

ICEの看板がある。

三枝、中を覗いている。

スタッフ2名、仕事をしている。

アンジェリン（女25）気が付いてド

アを開ける。

アンジェリン「为什么呢？」

三枝「どんな活動しているのかと思って覗い

てみただけです」

アンジェリン「韓国人ですか？」

三枝「日本人です」

アンジェリン「英語上手ですね。日本人が来たのは初めてです。お入りください」

三枝、入っていく。

アンジェリン、三枝、ソファに座っている。

アンジェリン「私たちの活動は虐待から子供を守る、働かされている子供を保護する、家庭内暴力、性的虐待などから子供を守るなどが主です」

三枝「成果は上がっていますか？」

アンジェリン「少しずつです。ここには15

00人ほど子供がいますので」

三枝「そんなにいるんですか？」

アンジェリン「はい、でも資金が足りないものですから、どうしても限界があります」

三枝「ボランティアは足りていますか？」

アンジェリン「ボランティアは足りています。

日本人ならお金持ちですよ。いくらかでも支援していただければ助かります」

三枝「金はありません。ここに住んでるくらいですから」

アンジェリン、呆気にとられて、

アンジェリン「フィリピンでも最下層の地区です。こんなところに住む日本人なんてどうかしてますよ。危険だし、不衛生だからさっさと出て行った方がいいですよ」

三枝「お邪魔しました。お役に立てなくて申し訳ありません」

三枝、出ていく。

○ヴァレンズエラ・リムの家・居間

豪邸。民兵が2名、ライフルを持ち、玄関で見張っている。

リム（男57）、タン（男51）、中国茶を飲み、月餅を食べながら話している。

メイド、ティーポットを持ちながら、立っている。

リム「三枝にメールしても電話してもまったく返事がない。ラインを送っても既読にならない。タンさん、なにか知ってるか？」

タン「いや、俺も3度ほど電話したけど、返

事がない」

リム「ゴルフ練習場で出会い、何十回も共にプレイした良きライバルだったが、日本に帰ったのかな。俺に挨拶もなしにいなくなるなんて信じられない。事故にでもあったんだろうか。ゴルフに行くたびにあいつのことを思い出す」

タン「タガログ語も英語もネイティブ並みに話せる。あんな日本人には会ったことがない。仕事もせず遊んでばかりなのに、どうして金が続いてるのか不思議だったよ」

リム「三枝の手下でポン引きのパパジーっていただろう」

タン「真面目なやつだったな。ゴルフと一緒に行き、プレイ中はずっと待っていて、夕方、俺たちは食事と酒で楽しんだが、彼は一切飲まずに酔っ払った俺たちをアセアナ、マカティ、オルティガス、ケソン、最後にヴァレンズエラまで送り届けてくれた。その後、深夜にトライシクル、ジプニー、バ

スを乗り継いで帰宅したはずだ。丸一日つきあわせたんだ、チップを奮発したよ」

リム「俺もけっこう払った。払いたくなるわな」

タン「何度も付き合わせたからいい稼ぎになったはずだ。セバスチャンは自分の好みに合った最高の女性を紹介してもらったって言ってたな、パパジ―はセバスチャンの女性の好みがわかるようで、いつも間違いない。気に入る女性を連れて来るらしい。セバスチャン曰く、ポン引きは彼が一番だと」

リム「パパジ―に電話したいのだが番号を知らない。これまでは三枝を通して連絡していたから」

タン「そうだったか」

リム「1年前かな、俺のサンダル工場で働く中国人がフィリピンのIロが欲しいって言うから、試しにパパジ―に頼んだら3日で精巧な偽造IDを持ってきて驚いた」

タン「そのID見たいな」

リム「今度見せてやるよ。別の中国人もIDを欲しがっているが、三枝に連絡取れないから困ってる。もし何かわかったらすぐに知らせてくれ」

タン「パパジーはトンドに住んでいると言っていた」

リム「スラムだろうな、パパジーとしかわかってないんじゃない」

タン「ポン引きだから夜のマビニ界限、マカ

テイのブルゴス、ケソン通りにいるかな」

リム「どこも夜は人通りが多いし、危険だな。」

探しにはいけない」

○トンド・墓地・三枝の家

1週間後。

家の前にはアイスクリームの手押し車。
アンジェリン、やってくる。

三枝、寝転がっている。

アイナ、アラ、三枝の横でポテトチップスを食べている。

アンジェリン「あーいたいた。やっと見つけたー。おばあさんが日本人ならここだって教えてくれた」

三枝、起き上がる。

アイナ、アラ、振り向く。

三枝「N P Oの人だったよね」

アンジェリン「娘さん？」

三枝「遊びに来ているだけ、隣の子供たちです」

アンジェリン「この前はここに住むのを止めた方がいいなんて失礼なことを。すみませんでした。私はアンジェリンといいます。今日はお願いがあってやってきました。知り合いが日本語教師を探してるの。やってみませんか？」

三枝、戸惑っている。

三枝「いきなり言われても・・・うーん！教え方がわからない」

アイナ、アンジェリンの横に来て、

アイナ「教えるの上手だよ。私の算数の先生

なんだ」

アンジェリン「あらまあ、そうなの、だってあれだけ英語、タガログ語を話せたら、教えられると思うよ。アイスクリーム売りよりいいと思うけど」

三枝「うーん、場所は？」

アンジェリン「チャイナタウン、週3回、各

2時間、給料は安いけど」

三枝「一度、見させてくれる？」

アンジェリン「明日、どう？」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、妻のリンロン（54）、話している。

リンロン「明日の夜、みんな集まるでしょう。

長男夫婦が子供を3人連れて、ドンドン夫婦、長女も来る」

リム、うなずいている。

リンロン「長男夫婦が子供を連れてきて賑やかにするのはいいのだけど、ドンドンに

は子供がいなくてしょ。話題が長男一家に偏ってしまう。あんなに子供を欲しがって、いたのに、奥さんの子宮に問題があって、もう子供は難しいようね」

リム「それで夫婦関係もギスギスしてるようだな」

リンロン「それが心配、犬を飼って見たものの、効果ないみたい」

リム「結婚して7年になるか、代理母に産んでもらうなんてどうかな？」

リンロン「あてはあるの？」

リム「長男の嫁のマリリンに頼めないか？」

リンロン「無茶言わないでよ」

リム「どうしても欲しいんだったらなんとかしないとな」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、寝転がっている。

パパジー、やってくる。

パパジー「アイナが会いたがってる」

三枝「なんだろう、後で行くわ」

パパジ「ボスは元気そう。まだ死にたい気持ちはある？」

三枝「元気なのはアイナとアラがなついてくれるからかなあ。金はないのに以前より楽しい」

パパジ「おうおう、それでなくちゃ、連れてきた甲斐があった」

三枝、スマホを見ながら、

三枝「またリムさん、タンさんからメールがきている。これ以上無視するのはあまりにも失礼なので、あとで電話してみるわ」

パパジ「墓地に住んでは絶対言ってはダメだよ」

三枝「言わない。連絡しなかったのは日本に帰っていたと言えば納得してくれるだろう」

○同・パパジの家

三枝、皿を持っている。

メイリ「ン、客と話している。」

アイナ、ノートを持って駆け寄って、
三枝にしがみつき、ノートを見せる。

アイナ「ボス、見て見て、算数で90点だった」

三枝、ノートをチェックしている。

三枝「アイナ！ やったなあ、でもな、算数は100点じゃなきゃだめなんだ。EXCEL E N Tを目指せ」

アイナ、不満な顔。

三枝、アイナの頭に手を置いて、
三枝「もう少しだ！ がんばれ、ご飯食べた
らまた教えてあげる」

アイナ、にっこり笑って、

アイナ「うん」

メイリオン、微笑みながら、
メイリオン「今日は何食べる？」

○同・三枝の家・（夜）

三枝、電話している。

三枝「リムさん、すみません、何度も連絡も

らっていたのに、日本に急用ができて帰っていました。ようやく落ち着いたので戻ってきました」

三枝、聞いている。

三枝「はい、はい、わかりました。偽造 I D の件ですね」

○チャイナタウン・日本語教室

ビルの一室。机と椅子とホワイトボードだけのシンプルな部屋。

三枝、アンジェリン、後ろで見ている。

先生はフィリピン人女性。採血の時の会話を日本語で教えている。

生徒は若い女性 8 人。机の上には教材が開かれている。熱心に聞いている。

先生「こんにちは、今日は採血ですね。少しチクっと思いますが、すぐに終わります」

アンジェリン、三枝の耳元で小声で話す。

アンジェリン「日本に看護師として働きたい

女性ばかり」

三枝「みんな真面目に勉強してるな」

アンジェリン「当たり前でしょ。試験は難しいし、生活がかかってるからね。この先生は悪くはない。ただ生徒たちは日本人の先生に教わりたいという希望が強い」

三枝、しばらく授業を見ている。

三枝、アンジェリンに耳打ちする。

三枝「やってみる。評判が悪かったらすぐクビにしてしてもらってかまわない」

アンジェリン「決まりね。教材を取りに行こう。事前に勉強してね」

○ヴァレンズエラ・リムの家・居間

リム、パパジ、中国人男性、話している。

リム、中国人男性を指さして、封筒から書類と写真を取り出している。

リム「遠いところをすまなかった。これがこの男の写真とデータ、前と同じようにして

くれたらいい」

パパジ「わかりました。お預かりします」

リム「三枝は元気なのか？」

パパジ「右ひじを痛めてゴルフができない

ようです。それ以外は大丈夫です」

リム「飯でも食べに行こうと伝えてくれ」

パパジ「はい」

リム「わざわざ来てもらったのは相談がある
からなんだ」

リム、中国人男性を見て、

リム「お前は帰っていいぞ、IDは任せてお
け」

中国人男性、にっこり笑い、パパジ
に握手して出ていく。

リム、再びパパジに向かって、

リム「代理母って知ってるか？」

パパジ「はい」

リム「うちの次男夫婦は奥さんに問題があっ
て、子供ができない。それで代理母になっ
てくれる人を探したいのだが」

パパジー「お金を払うつもりですよね？」

リム「そのつもりだ」

パパジー、目をつぶり、顎を引いて左手で顔を覆っている。少したって、左手を下ろし、目を開けて、リムを見て、

パパジー「代理母を探すことは可能ですが、申し訳けないのですが、関わりたくありません」

リム「どうして？」

パパジー「報酬を払って代理母に出産させるのは違法ですよね」

リム「それはわかっている」

パパジー「そうですね。リムさんが知らないはずはない。わかってて頼みたい・・・」

リム「その通り」

パパジー「敢えてやったとして、・・・出産までに1年かかるのは長すぎます。その間に様々なトラブルが起こるのが目に見えています。私が間に立ってそのトラブルに対処するのは正直辛い。リムさんが直接頼むな

ら別ですが……。いやあ、やはりお金を払う代理母はやめたほうがいいと思います」

リム「そうか、パパジーでもダメか」

パパジー「お金のやり取りがない、善意の代理母はどうですか？ 親族で誰かいないのですか？」

リム「長男の嫁がいいと思ってるんだが……」

パパジー「お嫁さんが了解してくれるなら……」

リム、天を仰いでいる。

リム「ゆっくり考えるわ、偽造IDはよろしくな」

69

パパジー「3日後にはお届けします」

○トンド・三枝の家

三枝、教材を読んでいる。表紙に（介護の日本語）と書かれている。横には

2冊教材が置かれている

パパジー、やってくる。

パパジー「おっ、勉強してるな！ 邪魔してすまない」

三枝、教材を閉じて、顔を上げる。

パパジ―「偽造IDは引き受けました。けっ
こうな儲けになります」

三枝「大金持ちだからな、いくらでも儲けた
らいい」

パパジ―「代理母を探してくれないかと言わ
れました。断りましたけど」

三枝「たしか息子さん夫婦が子供がいな
いて言っていた。代理母を探すなんて切実な
状況だな。俺も子供ができなかったの
でその気持ちはよくわかる」

パパジ―「飯を食べに行こうって
言っていましたよ。行ってきたら？」

三枝「金がない」

パパジ―「奢ってもらえるでしょう」

三枝「いや、ルールがあつて、
今までのすべて割り勘。それが
対等の関係を保つためだ
つた」

パパジ―「じゃあ偽造IDで
儲けた金を使つて」

○ トンド・墓地・内

ネルソン、警官3人、歩いてくる。

三枝、パンを買っている。

ネルソン、三枝を見て、

ネルソン「アイスクリーム屋はやめたのか？」

三枝「やめた。チャイナタウンで日本語の先生をやる」

ネルソン「無難だな。まあアイスクリーム売りよりましだけど、おもしろくねー」

三枝「ネルソンがほーっていう仕事ってなんだよ？」

ネルソン「知るか！ 自分で考えろや」

○ 同・テイトボーイの家・前

テイトボーイ、若者とチェスを指している。

三枝、覗き込んでいる。

テイトボーイ、三枝に気が付いて、

テイトボーイ「どうした、日本人」

三枝「代理母ってどう思う？」

テイトボーイ「なんだ、いきなり」

三枝「代理母になりたい女性っているだろう？」

テイトボーイ「いくらでもいるけど、俺はやらない」

三枝「ほう？」

テイトボーイ「金を払って出産させること自体が許せない。それより麻薬の密売をやるのか？　パパジーに聞いたぞ、金持ちの知り合いが多いんだってな。上流階級になら高く売れるぞ」

三枝、笑っている。

三枝「代理母は許せないなんてまともなことを言うなと思ったが、麻薬は許せるのか。俺みたいなのやわな人間には向いていない」

テイトボーイ「腎臓はどうだ、儲かるぞ！」

三枝「おいおい、臓器売買は代理母よりひどい」

○ヴァレンズエラ・リムの家・ダイニングル

ーム・（夜）

リム、リンロン、長男、長男の妻マリ
リン（女33）、長男の子供3人、長女、
次男ドンドン（男31）、ドンドンの妻
ヴィルマ（女27）、食事をしている。
メイド2名、飲み物を持って立ってい
る。

リム、改まった表情でマリリンに話し
かける。

リム「マリリン！ 真剣に聞いてほしいのだ
が？ 知ったのとおり、ドンドン夫婦は子
供ができない、彼らのために代理母をやっ
てくれないか？」

リンロン、青ざめる。

長男、怒りに震えている。

マリリン、ナプキンを机の上に叩きつ
け、立ち上がる。

マリリン「私をメス豚と思っているのです
か？ 出産することがどれほど大変か、お
父さんは何もわかっていない。もう食事は

けっこうです。帰ります」

マリリン、震えながら出ていく。

リム、大きく目を開いている。

ドンドン、頭を掻きむしって、

ドンドン「俺は何も知らない。お父さんが勝手に言い出した」

ヴィルマ、涙を浮かべて、

ヴィルマ「子供は欲しいけど、お姉さんに代理母を頼むなんて・・・」

リム、頭を抱え込んで、突っ伏している。

○チャイナタウン・日本語教室

生徒8名、椅子に座って、三枝を見ている。

三枝、教材を横に置き、生徒を見回して、英語で話す。

三枝「今日から講師を務める三枝です。日本人です。まずはどれくらい日本語を話せるか、実力を知りたい。日本語で自己紹介で

きるか？」

エドナ（24）、手を上げて、

エドナ「私はエドナです。24歳、ビヌンドに住んでいます。独身です。日本で看護師になりたいです」

三枝、感心している。

三枝「おう、勉強しているな、よし！ 次！」

○同・入り口

授業を終えて三枝、出てくる。

エドナ、入口で立って待っている。

エドナ「先生、時間ありますか？ コーヒーでもどう？」

三枝、足を止めて、

三枝「なぜ？」

エドナ「もっと日本語で話したい。日本人に会うのは初めてだから」

三枝「個人授業ってこと？」

エドナ「お金はないのでそれは……。彼女はいらんですか？ いなければ彼女になっ

てもいいけど」

三枝、むっとして、

三枝「断る！　彼女になってもいいって、その言い方が気に入らない」

エドナ「冷たいですね」

三枝「会ったばかりじゃないか！　冷たくもなる」

エドナ「先生はどこに住んでいますか？」

三枝、少し躊躇して、

三枝「トンド墓地」

エドナ、眉をしかめて、

エドナ「墓地に住んでいるなんて最低」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、首をかしげている。

リンロン、話している。

リンロン「いきなりあんなこと言ったら、誰だって怒るでしょう」

リム「失敗した」

リンロン「私が謝っておくけど、当分、誰も

遊びに来ないだろうね」

リム「俺も謝りに行くか」

リンロン「行かなくていい。ほとぼりが冷めるまでおとなしくしていなさい」

リム「代理母は諦めた。他に方法はないか？」

リンロン「副市長なんだからなんとかしなさいよ」

リム「ううう」

リンロン「ドンドンが愛人を囲い、子供を産ませて引き取るなんてどう？」

リム「？？？」

リンロン「子供を誘拐してきたら」

リム「刑務所行きだな」

リンロン「じゃあ養子をもらったら」

リム「養子しかないか」

リンロン「正式な養子縁組は時間がかかるみたい、大学の友人は5年待ってようやく認められた」

リム「考えてみるわ」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パソコンを操作している。

アラ、三枝の横でスライムをこねている。

アイナ、紙を振りまわして入ってくる。

アイナ「ボス、見てー」

アイナ、答案用紙を見せる。

アイナ「100点取ったー。EXCELEN

Tだよ」

三枝、答案用紙に見入る。

三枝「おおおーやったなー！ アイナ、お

めどう」

三枝、アイナを抱え上げ、頭上高く持

ち上げる。

アイナ、両手を高く上げ、回している。

アラ、一緒に喜んでいる。

○ ロックウェル・イタリアレストラン

高層ビルに囲まれていて、周囲は木に覆われて目立たない。高級店。

三枝、リム、料理を食べながら、話している。

リム「肘はどう？」

三枝「当分、ゴルフはできそうにありません」

リム「三枝とは実力が拮抗して、いいライバルだっただけに残念」

三枝「治ればまた勝負しましょう」

リム「パパジィから何か聞いてるか？」

三枝「息子さんが子供を欲しがっていて、代理母を頼まれたことですか？」

リム「代理母は諦めた。不用意に長男の嫁に代理母になつてくれとお願いして、家族全員に激怒された」

三枝「リムさんらしくもない」

リム「それで相談なんだが、養子を貰いたいと考えている」

三枝「養子ですか？　フィリピンなら簡単でしょう」

リム「それが簡単ではない、養子縁組法って知ってるか？」

三枝「すみません、勉強不足でまったく知識がありません」

リム「養子縁組には家庭裁判所の審判が必要で、仮に認められたとしても手続きに5年ほどかかるかもしれない。さらに審判だから、必ずしも認められるとは限らない」

三枝「日本の方が簡単だったような」

リム「そうなのか。それでだな、煩雑な手続きなんか省いて養子を貰いたい」

三枝「はあ？」

リム「謝礼を払って子供をくれということだ」

80

三枝、俯いて右の拳で左の手の平を叩き、頬も2度叩いている。

リム「どうかしたか？」

三枝、真剣な顔で、

三枝「それは人身売買でしょう？」

リム「そうだな」

三枝「リムさんは副市長で会社も経営している。発覚したら社会的信用を失いかねない」
リム「それは気にするな」

三枝「わかりますけど、そんなに簡単には？」
リム「できれば生まれてすぐとか、1歳2歳の
子供がほしい」

三枝「考える時間をください」
リム「売り手と直接やり取りするのは避けた
い。信頼できる仲介者といえど・・・、パ
パジーが最適だと思う。謝礼ははずむ」

○ トンド・墓地・三枝の家・（深夜）

三枝、考え込みながらパソコンを操作
している。

○ 同・パパジーの家（朝）

三枝、パパジーを叩き起こしている。

三枝「俺の家に来てくれ、相談したい」

パパジー、さっと起き上がり、ついて
いく。

○ 同・三枝の家・（朝）

三枝、パパジー、椅子に座り、膝を突

き合わせて話している。

三枝、目が輝いている。

三枝「まずは礼を言わなくちやな。金を出してくれたおかげで有意義な話が聞けた」

パパジ「昨日、リムさんに会ったんだ」

三枝「ようやくやりたいことが見つかった」

パパジ「身構えて、前のめりになっている。
ている。」

三枝「養子斡旋をしたい。貧乏人の子供を金持ちの家に売る。一緒にやらないか？」

パパジ「真面目な顔して単刀直入に言うもんだ」

三枝「これは犯罪だ！ 罪状は人身売買」

パパジ「刑務所に行くことになるということか」

三枝「覚悟を決めた。死のうと思ったんだから刑務所に行くくらいなんてことはない」
パパジ「なぜやりたいと思った？」

三枝「お互いにウインウインだからだ。金持ちも貧乏人もどちらも喜ぶ。それだけだ」

パパジー、大きくため息をつく。

パパジー「ふー」

三枝「いろいろ調べてみると、法律は子供のことを第一に考えている。それは俺も同じだ。この人たちなら子供を預けられる。きちんと育ててくれると判断したらやる」

パパジー「ふむふむ」

三枝「たまたま俺は上流階級の人々と関りがある。それなのに最下層の墓地に住んでいる。ということは上流階級と下流階級の橋渡しができる」

パパジー「それはそうだ」

三枝「といっても下流階級の知り合いは少ない。パパジーと組めばやれそうに思う」

パパジー「俺に刑務所に行けといってるんだな」

三枝「そうだ。でも行かせない」

パパジー「どうやって？」

三枝、両肩を持ち上げて笑っている。

三枝「さあな？」

パパジー、嘔き出している。

パパジー「わかってないんだ」

三枝「ゆっくり考えるさ」

パパジー「どれくらい儲かる？」

三枝「まだわからない」

パパジー「俺が聞いた話ではたしか3万円くらいだったかな」

三枝「実際にあったんだな！ そんな安い金額で売る気はない。それでは上流階級だけが喜び、下流階級は喜べない。ウインウインの関係にはならず、俺たちにも利益がない」

パパジー「そうだな」

三枝「どうだ！ やってみるか」

パパジー「ポン引きも飽きてきたし、ボスやる気になったんだ。やるよ」

三枝「あと何人か仲間がほしい、誰がいい？」

パパジー、頬をつまんでいる。

パパジー「タイトボーイかな」

三枝「ほう、ヤクザな兄さんだな。NPOの

アンジェリンは役に立つかもな？　もう一人、ネルソンはどうだ」

パパジー、あからさまに嫌な顔。

パパジー「クー、ネルソンはどうかと思う。

いずれは必要になるかもしれないけど」

○トンド・路上

ベル（女25）、歩道の上で段ボールを敷き、大きいお腹を上にして寝転がっている。

ラップ（男30）心配そうに見ている。

前には缶が無造作に置かれている。その横に紙が貼られていて（子供が生まれます。助けて）と書いてある。

ラップ「お腹が大きくなってきたな」

ベル「子供を産みたくない。避妊すると言っていたのに、守らなかったお前のせいだ。

病院にも行けないし、辛い」

ラップ「ここで物乞いしてもいくらにもならない。なんとかしなきゃ、外で稼いでく

る」

○同・バス乗り場

ラップ、小さな紙に（子供が生まれま
す、お金がありません、助けてくださ
い）と何枚も書いている。横には封筒
の束が置かれている。

バスがやってくる。

ラップ、バスに乗りこみ、紙と封筒を
乗客に次々と渡していく。最後尾まで
配り終え、少し待ってから紙と封筒を
回収していく。

封筒に10円、20円、中には100
円を入れる人もいるが、ほとんどの人
は空の封筒を返している。

ラップ、封筒を集め終わったら、あり
がとうと言ってバスから降りていく。

○同・路上

ベル、寝転がっている。缶には少しだ

け小銭が入っている。

ラップ、帰ってくる。手にはライス、シューマイ、水、枕とクッションを持っている。

ラップ「10回以上バスに乗りこんだら700円くらい集まった」

ベル、起き上がってライスとシューマイを皿に入れ、醤油とカラマンシーを絞って食べ始める。

ベル「枕とクッションはありがとう。お腹ペコペコ」

ラップ「頑張っても病院に行くお金は集まりそうにない」

ベル「わかってる。生まれそうになったらあそこの草むらの中で産むわ」

ベル、草むらを指さしている。
ラップ、顔を草むらに向けて、

ラップ「草むらって、野糞するみたいに言うなよ」

○ トンド・三枝の家

三枝、パパジー、話している。

パパジー「ティトボーイと話した。あいつは悪いことも平気でするけど、仲間が多く、口が達者。そして喧嘩が滅法強い。刑務所に入ったこともある。役に立ちそうなのだが、ボスのことを信用していないのが問題」

三枝「そうか」

パパジー「それでもあいつを引き入れる」

三枝「まかせた」

パパジー「アンジェリンも躊躇している。N

88

P Oを解雇されるだろうし、刑務所はもつと嫌だと」

三枝「そうだろうな」

パパジー「ところが、いきなり情報をくれた。トンドの路上に夫婦のホームレスがいて、お腹が相当大きいらしい。話して来たらと言われた」

三枝、△サイン。

三枝「アンジェリンは脈ありだな。手始めに

そのホームレス夫婦に会ってこい！ できればテイトボーイと二人で。但しだ！ 子供を買うとはまだ言うな」

パパジー「なぜ？」

三枝「こちらはまだ何も決めていないからだ。ホームレス夫婦の年齢とか、どんな暮らしだとか、どこで産むのか、健康状態はどうか、子供を産んだ後どうする気なのか、それから夫婦の写真がほしい。まずは情報を集めてくれ」

パパジー「わかった。明日、テイトボーイと行く」

○ トンド・路上

翌日。

ベル、段ボールの上で枕に頭を乗せ、クッションを腰にあて、横になっている。

ラップ、そばにいる。

パパジー、テイトボーイ、歩いてきて、

いきなり話しかける。

テイトボーイ「NPOなんだが、話を聞かせてもらえないか？」

ラップ「なんだよ？」

テイトボーイ「若いのになぜホームレスなんだ？」

ラップ「ミンダナオから来たんだけど、仕事に向いてなくて」

テイトボーイ、ベルを見て、

テイトボーイ「何歳？」

ベル「25歳」

テイトボーイ「出産が近いんじゃないか？」

ベル、だるそうに、

ベル「そうだよ、見ての通り」

テイトボーイ「病院には？」

ベル「そんなお金ない」

パパジー、隙をみて二人の写真をスマホで何枚か撮っている。

テイトボーイ「生まれそうになったら行くのか？」

ベル「行かない、ここで産む」

テイトボーイ「なにかあったらどうする？」

ベル「そんなのわからないでしょ」

テイトボーイ「産んだことあるのか？」

ベル「初めてだよ。産みたくないよ、流産してくれないかと神様をお願いしたけど叶えてくれなかった」

テイトボーイ「産んだらどうする？」

ベル「捨てるわけにもいかないし、教会にでもそっと置いておこうかな。教会ならなんとかしてくれるでしょう」

テイトボーイ「赤ちゃん欲しくないのになぜ？」

ベル、ラップを指さし、

ベル「こいつが嘘つきだから」

テイトボーイ、にやつと笑って、

テイトボーイ「そうなのか、お前らは1日中ここにいるのか？」

ラップ「いるけど、雨が降ったらここにはいない。空き家の前にいる。そこなら雨に当

たらない」

ラップ、空き家を指さしている。

テイトボーイ「話を聞かせてくれてありがとう。これで栄養のあるものでも食べて」

テイトボーイ、500円を缶の中にいれていく。

ラップ、驚いている。

ラップ「いいのか、ありがとう」

ベル、不思議そうにテイトボーイを見ている。

○同・路上の近く

テイトボーイ、パパジー、歩きながら話している。

テイトボーイ「日本人は本気なのか？ 貧乏

だし、頼りなさそうだし、パパジーのボスだろうが、どうも信用できない」

パパジー「やるだけやってみれば？ うまく

いけば儲けものだろう？」

テイトボーイ「それはそうなんだが・・・」

自殺したがってるんだろ？」

パパジー「多分、もう死なないと思う。顔つきが変わってきた」

テイトボーイ「日本人は信用しきれないけど、パパジーとは長い付き合いだからな。まあお前を信じて手伝うわ」

パパジー「おう、それはそうとあのホームレスと話してどう思った？」

テイトボーイ「あれなら100%喜んで子供を売るな」

パパジー「だな」

テイトボーイ「病院に行かせないと、いつ産気づくかわからない、入院費用を日本人は用意できるのか」

パパジー「そうだな。それは相談する。お前、この仕事向いてるんじゃないか、完璧だった。いきなりNPOって言ったのにはびっくりしたけどな」

テイトボーイ「あんなやつらと話したくないが、詳しく聞きださないと」

パパジー「ははは」

パパジー、テイトボーイの肩に手を乗せている。

テイトボーイ「あの500円、日本人は払ってくれるかな。可哀そうで思わずお金を出してしまった」

パパジー「俺が払ってやる」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

三枝、リム、リンロン、ドンドン、ヴァイルマ、ドウファアとタピオカミルク
ティを前に、話している。

三枝「私が養子幹旋をやります」

リム「ほう、三枝がやるのか！ 腹を括ったんだな」

三枝「私が仲介役をします。売り手と買い手は直接顔を会わせることはありません」

リンロン「そうしてもらえとうまくいきそう」

三枝「売り手はリムさんが買ったことを知る

ことはないの、発覚する心配はありません。ただし、リムさん側の誰かが漏らす可能性がかりです」

リンロン「あなた！ 長男には話します？」

リム「話さないわけにはいかないだろう。使用人が不審に思わないような説明が必要だな」

ドンドン「それは俺たちが考えます」

リム、一呼吸置いて、

リム「三枝よ、実はまったく心配はしていない。俺は副市長だ。たとえ発覚しても、警察なんてどうとでもなる」

三枝、納得している。

三枝「あーあー、確かに！ ここはフィリピンでしたね」

リム「子供は見つかりそうか？」

三枝「必ず見つけます。それで謝礼の金額は500万が妥当と考えているのですが、どうですか？」

ドンドン、顔をしかめている。

ドンドン「500万！　高いじゃないですか？」

リム、うなずいている。

リム「俺は法外な金額ではないと思う。子供をもらうんだぞ、俺が払ってやる」

ドンドン「そこまで言うなら・・・」

ヴィルマ「赤ちゃんの写真とかデータは見せてもらえますか？」

三枝「もちろんです」

○ トンド・墓地・三枝の家・前

三枝、アイナ、アラ、キャッチボールをしている。

パパジー、タイトボーイ、やってくる。

三枝、キャッチボールをやめて部屋に入る。

パパジー、ホームレスのデータと写真を見せている。

パパジー「あいつら汚いから体裁よくみせるために写真を加工したら？」

三枝「やめておこう。ありのままがいい」

ティトボーイ「日本人！　本当にまとめられるんだろうな」

パパジー「おいおい、ボスに向かってそれはないだろ、口の利き方に気をつけろ！」

ティトボーイ「まだ信用できない」

三枝「今は信用しなくていいが、頼みがある。

複数の赤ちゃんを用意して買い手に選ばせたい。他のスラムの知り合いはいないか？

何人か仲間に引き入れて、探してくれ」

パパジー「そうだな」

ティトボーイ、不満そうな表情で、

ティトボーイ「やるけどな」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、リンロン、ドンドン、ヴィルマ、
集まっている。

リム、パソコンを見ている。

リム「写真とデータが来たぞ、ミンダナオ出身のホームレス夫婦、ええっー　まだ生ま

れてない。お腹が大きい、出産がもうすぐだ」

リム、パソコンの画面をを全員に見せている。

リンロン「うわっ、薄汚れた夫婦じゃない、男は頼りなさそうだし、女は若いのになぜホームレスなの？ 最悪！ どうせ売春とかして、性病にかかってるわよ」

リム「待て待て、そんなの検査すればわかるだろう。もうちょっとまともなことを言うてくれ！ それにお前が育てるわけじゃない。ドンドンたちの意見が聞きたい」

リンロン「私は絶対嫌だからね」

リム「もういい、喋るな、お前たちどう思う？」
ドンドン「現実はなんか生々しい。果たして子供を愛せるのかどうか、自分でもわからない」

ヴィルマ「お母さんは反対なんですネ。ホームレスなんて聞かなければ良かった。生まれたばかりの赤ちゃんを育てられるのは最

高だと思し、子供は育て方次第でどうに
でもなるものでしょう？」

リム「お前たちが決めたらいい。うちが引き
取らなかったら教会に預けてしまいうらしい」
ヴィルマ「お父さん、主人と真剣に考えます。

返事はもう少し待ってください」

○ トンド・墓地・内

パパジー、三枝、テイトボーイ、歩い
ている。

三枝「ホームレスの赤ちゃん、買い手が迷っ
ている」

テイトボーイ「それをなんとかするのが日本
人の仕事だろう」

パパジー「迷わない方がおかしい」

三枝「パパジー、使うなと止められていたス
マホにある10万円を使いたい。いいか？」

パパジー「いいよ。無駄遣いしなくて良かつ
たな」

第3話

○ケソン・パヤタス・ゴミ集積場のスラム・デレクの家

ゴミの巨大な山が見えている。猛烈な臭い。家はバラックで山から離れた場所にある。狭いスペースに小さいテレビ、古い冷蔵庫などがあり。ぼろぼろのソファにテイトボーイ、デレク（24）。座っている。

デレク「子供なんてここにはたくさんいるよ。隣の子なんかどう？ いつも母親がおまえなんか産むんじゃない。帰ってくるなって怒鳴っている」

テイトボーイ「それは子供に言ってるだけだろ、本気じゃない」

デレク「そうなのか、いやーあれは本気だな」
テイトボーイ「デレク、以前、警察に捕まっただろ。あの時なぜゲロしなかった？ 喋ってたら刑務所に行くことはなかったのに」
デレク「俺はバカだけど、口は堅い。喋らな

いと決めたら殴られようが拷問されようが
絶対に話さない」

テイトボーイ「刑務所にまた入ることになつたらどうする？」

デレク「面倒見てくれるんだろう。喜んで行くよ。金があれば刑務所も天国さ」

テイトボーイ「ほんと、バカだよな」

デレク、両手を強く叩いている。

デレク「おっ！　思い出した。子供を売りたいって言った女がカビテにいた。あとで連絡するよ」

101

○サンタメサ・線路脇のスラム

線路上を少年2人がトロッコを操り、客を運んでいる。電車が走ってくるので、客を降ろし、トロッコを抱え上げて線路脇に運ぶ。電車が通り過ぎると、再びトロッコを線路に乗せ、客と共に走り出す。

パパジー、ロメロ（男30）、線路脇

のベンチで話している。

パパジー「ロメロ！　こんなにうるさくて危険な場所によくもまあ住み続けられるものだな」

ロメロ「墓地に住んでるやつに言われたくないね」

パパジー「墓地は静かだぞ」

ロメロ「気持ち悪い。死者への冒瀆だ。たたられる」

パパジー「あいかわらず何人も彼女がいるのだろうな」

ロメロ「あたりまえだろ」

パパジー「ところでな、女のけつばかり追いかけてないで仕事手伝わないか？」

○トンド・墓地・NPO・前

パパジー、NPO事務所前を通り過ぎようとしている。

アンジェリン、パパジーに気がつき、事務所から出て、メモと写真を渡す。

パパジー、歩きながら、写真を見て、
メモを読んでいる。
メモには（3歳の女子、母親はシング
ルマザーで名前はマイキー、カナダで
働きたいのだが、子供の面倒を見てく
れる人がいないので行くことができな
い。大切に育ててくれるなら譲っても
いい。条件がひとつある。買い手に直
接会わせてほしい。いい人かどうか確
かめたい）

パパジーN「買い手に会うのは無理だな。ま
あボスには伝えるけど」

○チャイナタウン・日本語教室

三枝、教材を閉じている。生徒は8
人。

三枝「はい、今日はここまで」

生徒7人帰っていく。エドナ、待つて
いる。

三枝「なんか用か？」

エドナ、頭を下げている。

エドナ「先日は失礼しました」

三枝「あー」

エドナ「日本人は謝るときに頭を下げると聞いたので」

三枝「フィリピン人は謝らないからなあ」

エドナ「先生が墓地に住んでるって聞いて、驚きと嫌悪感でついつい。そのお詫びとして、ご馳走しますのでマクドに行きませんか？」

三枝「個人授業する気になったのか？」

エドナ「ただのお詫びです。タガログ語で話してかまいません」

三枝「何か食べたいと思ってたので、つきあうわ」

○チャイナタウン・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

エドナ「墓地に住んでるって言わない方がいいですよ」

三枝「人間性を疑われるってことだよな」

エドナ「悩んでいることがあるので、話を聞いてくれます？」

三枝「はいはい」

エドナ「私の姉はドバイで働いて5年になります。フィリピンで家を買うために、毎月両親に送金していました」

○（回想）ビヌンド・エドナの家

姉、通帳を見ている。

姉「残高ゼロってどういうことなの！」

両親、俯いている。

両親「カジノで・・・」

エドナ、頭を抱えている。

姉、号泣しながら、

姉「5年間、一生懸命働いたのが、すべて無駄になった。もう金輪際、送金しない・・・」

（回想終わり）

○チャイナタウン・マクドナルド・内

エドナ「ところが両親はそのお金を全てカジノで使い果たしていたのです。姉は昨年、一時帰国した際にその事実を知り、激怒。それ以来、両親への送金を一切やめました。姉と両親は絶縁状態です。ただ私にだけは送金してくれたので、看護師学校を無事に卒業することができました」

三枝「いいお姉さんじゃないか、あなたの両親は最低だけど」

エドナ「姉には本当に感謝しています。私は今、BGCの病院で働いていて、給料の半分以上を両親に渡しています。しかし両親は懲りた様子もなく、カジノ通いを続けています。口を開くと給料のいい日本で働きなさい。送金してくれたら、今度こそ家を買うために貯金すると」

三枝「またカジノに行って使い果たすだろうな」

エドナ「そうですよね。日本に行けば私も両親と縁を切ることになりそうで、何のため

に日本に行くのかわからなくなっています」

三枝「日本に行っても送金しないほうがいい」

三枝、そう言って、おやつという表情。

三枝「話がそれるが、B G Cの病院で何科に
いるの？」

エドナ「産婦人科です」

三枝、食べるのをやめて、身を乗り出
す。

三枝「B G Cなら患者はお金持ちばかりだろ」

エドナ「お金持ちしか来ないですよ。設備は
最高だから、医療費も恐ろしく高い。なぜ
そんなことを聞くんです？」

三枝、一瞬躊躇したが、話し出す。

x

x

x

エドナ「はあ、それで子供を欲しがっている
患者の情報を教えてほしいってことです
か？」

三枝「そういうことだ。もちろんお礼はする。
君から情報を得たというのは誰にも話さな
い」

エドナ、考え込んでいる。

エドナ「それくらい簡単にできるけど……」

○ トンド・パパジの家

三枝、皿を渡し、トレイを指さしている。

メイリーン、ナイロン袋を被せた皿に惣菜を入れている。

アイナ、アラ、奥から飛び出してくる。

アラ、三枝に抱っこしてくれとせがむ。

三枝、アラを抱えている。

アイナ「お帰り。イカゲームしよう」

三枝「なに？」

アイナ「知らないの？　ここまこしーにあさ

んだだよ」

メイリーン「ドラマで有名になったでしょ、

韓国語だよ」

アイナ、身振り手振りで教えている。

三枝「あー日本にもある。だるまさんが転んだだ。よし、ご飯食べたらやろう」

メイリーン、笑っている。

三枝、お金を払う。

三枝「日本語学校で今日、給料が出た。今までありがとう。今日から払う」

メイリーン「知らないよ」

三枝「払わなかったらまずい時にまずいって言えないじゃないか」

メイリーン「まずい時あった？」

三枝「ううん、いつもおいしい」

メイリーン「なーんだ、よかった。じゃあもらっとくかな。クビになったら、またタダでいいからね」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、リンロン、ドンドン、ヴェルマ
集まっている。

リム、パソコンを見ている。

リム「三枝からだ。まずは3歳の女子、シン
グルマザー、母親がカナダで働きたいのだ
が、子供の面倒を見てくれる人がいないの

で行くことができない、大切に育ててくれるなら譲ってもいいとな。うーん、ただ問題がある。買い手に直接会わせてほしい。

いい人かどうか自分の目で確かめたい」

リム、写真をみんなに見せている。

ヴィルマ「かわいい女の子ね。でも直接会うのはどうかなあ」

リム「後で揉めるのは願い下げだ」

リンロン「3歳くらいからが育てて楽しいわよ。私はホームレスよりこちらのほうがいい」

リム「もうひとり、4歳の男の子、カビテの海沿いのスラムに住んでいるんだが、問題を抱えている。体が弱くて成長が遅れている。病院に行くお金がない」

ドンドン「かわいそうだと思うが・・・」

リンロン「お金があれば子供を本当は譲りたくないのでは？　そうね、この子はやめましょう」

ヴィルマ、頭を掻きむしっている。

○ トンド・墓地・三枝の家

パパジー、三枝、テイトボーイ、話している。

テイトボーイ「おい、日本人、うまくいったら俺たちはいくらもらえるんだ。どうしても聞きたい」

三枝「一度目はそんなに払えない。なぜかという俺たちが自由に使える金がまったくない。まず運転資金を作りたい。わかるか？」

テイトボーイ「それはわかる」

パパジー「それでもいくらかはもらえるのだろう？」

三枝「10ゝ20万くらいだろうな」

テイトボーイ「それを山分けするのか、少ないな」

三枝「一人の取り分だ」

テイトボーイ、目を大きく見開く。

テイトボーイ「本当か！　いったい売り手が払う金額はいくらなんだ」

三枝「500万」

パパジー、テイトボーイ、のけぞって
いる。

パパジー「ワオー、そりやすげー、もし刑務
所に入っても金があるならメイリオンも喜
ぶ」

三枝「メイリオンはパパジーより金が好き
か？」

パパジー「聞いたことはないけど、多分ね」

○ トンド・墓地・テイトボーイの家・前

ネルソン、歩いてくる。

パパジー、テイトボーイ、ネルソンに
気づく。パパジー、小声で、

パパジー「ボスがネルソンを仲間にどうだと
言ってたんだが、俺は願ひ下げだ」

テイトボーイ「俺も大嫌いだ」

テイトボーイ、ネルソンを見て唾を吐
く。

ネルソン「おい！ テイトボーイ、パパジー
と何をこそこそ話してるんだよ、お前らな

んかしようとしてるんじゃないか、あの日
本人ともつるんでるみたいだし」

テイトボーイ「つるんでりゃ悪いのかよ」

ネルソン「儲け話だったら俺にもかませろや」

テイトボーイ「警官と組んでいいことなんか
あるかよ。権力振り回して賄賂を巻き上げ
ているだけじゃないか、さっさと消えてく
れ、ギャングでも捕まえて来い」

ネルソン「そうか、まあなんかあったら頼っ
てこい」

113

○チャイナタウン・中華料理店・個室

リム、三枝、回転テーブルを回しながら
中華料理を食べている。

リム「先に伝言がある。ホテル料理長の湯野
さんになぜ連絡しない！ 冷たい冷たいっ
て怒ってたぞ、電話してやれ」

三枝、しまったという表情。

三枝「あー、後で必ず電話します」

リム「今日は俺に奢らせてくれ。虫のいいお

願いにきた」

三枝「話を聞きましょう」

リム「ホームレス夫婦なんだが、出産費用を出させてもらえないか？」

三枝、口をすぼめている。

三枝「ありがたい提案です」

リム「無事に生まれて、赤ちゃんの健康状態を見て、それから譲り受けるかどうか決めるというのはダメか？」

三枝、宙を見上げて、

三枝「いいですよ」

リム「後の2件は残念ながら却下された」

三枝「条件はそれだけですか？」

リム「もうひとつある。入院するのはマカテイのタンさんの病院にお願いしたい」

三枝「タンさん！、フィリピンでNO1の病院じゃないですか」

リム「あそこなら信用できる」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、タイトボーイ、デレク、男の子、ロメロ、話している。

タイトボーイ、三枝を紹介している。

タイトボーイ「この人がボスだ。日本人だぞ、こいつはパヤタスに住んでるデレク。だめだったみたいだけど、カビテの4歳の男の子はデレクが見つけてきた」

デレク、微笑んでいる。

三枝、驚いている。

三枝「パヤタスかあ。ゴミが大崩落して何百人も亡くなったスラムじゃないか。まだあるんだな」

デレク「あるよ」

三枝「カビテの子は幹旋できそうにない。健康に問題があるのは厳しい」

デレク「わかる」

タイトボーイ「こいつ馬鹿だけど、刑務所に行くことなど、少しも気にしていない」

三枝、首をかしげている。

三枝「ほー」

デレク、男の子の手を取り、

デレク「もう一人どうかな？ 隣の子供連れ
てきた。売れないかな？」

テイトボーイ「ダメだって言ったのに聞きや
しない。お前、それは誘拐だぞ、親の承諾
なくて勝手に売り飛ばせるかよ」

パパジーげらげら笑っている。

三枝、呆れている。

パパジー「一生、刑務所にいることになるぞ」

デレク「一生は嫌だな、じゃあ返すわ」

テイトボーイ「ちゃんと連れて帰れよ」

パパジー、ロメロを指さして、

パパジー「彼はロメロ、サンタメサの線路沿
いのスラムに住んでいる。あちこちのスラ
ムに知り合いがいて、特に女性に人気があ
るから仲間に引き入れた」

三枝「よろしくな」

ロメロ「さっき、パパジーと話していたらマ
イキーの写真を持っていてびっくりした。

子供を売って、カナダに行きたいんだって。

いいお母さんだよ」

三枝「ほう」

ロメロ「すごい金額で売ろうとしてるみたいだけどうまくやれるの？」

三枝「まかせろと言いたいが・・・」

ティトボーイ「俺もまだ半信半疑だ」

○マカテイ・レガスピビレッジ・湯野のマンション・キッチン

3ベッドルーム。大型テレビなど高級家具、電気製品がある。キッチンは広く様々な調理器具がある。

湯野（67）、料理を作っている。

三枝、ドアを開けて入ってくる。

湯野、料理を作るのをやめて、出迎えている。

三枝「お邪魔します、長い間、電話しなかったこと謝ります」

湯野「なんかあったのか？」

三枝「あまり話したくないのですが、金の問

題です。以前のように遊ぶことはできなくなりました」

湯野「仕事はあるのか？」

三枝「日本語学校で教えています」

湯野「まあ生きていけたらいいけど。日本人の友達は三枝しかないからな」

三枝「俺もそうですよ。湯野さんしかない。久しぶりに日本語を話してるんです」

湯野「テレビでも見てくれ、もうすぐ出来上がる」

湯野、キッチンに戻る。

三枝、リビングでテレビを見ながら、

三枝「料理長自ら作ってくれるなんてありがたいことです」

メイド、卵を持って帰ってくる。

湯野「卵を切らしててな、これができる」

メイド、手伝っている。

三枝、テレビを見ている。

x x x

湯野「さあこっちに来てくれ、食べよう」

三枝「日本料理かあ、久しぶりです」

湯野、三枝、食べ始める。

メイド、飲み物を用意している。

湯野「彼女は元気か？」

三枝「金が無くなった途端、逃げられました」

湯野「なんだ、ひとりぼっちじゃないか。ま

あ俺もそうだけど、わざわざフィリピンにきて一人暮らしとはさみしいな」

三枝「パパジーご存じですよ、彼の隣に住んでるのですが、子供がなついてくれて、彼女と二人で住んでた時より楽しいんですよ」

湯野「おう！　パパジーは元気なんだ。たしかトンドだったよな」

三枝「そうですよ、俺もスラムの一員です」

湯野「スラムに住めるとはいい根性しているな。まあ楽しかったらいい」

湯野、立ち上がり、引き出しからお菓子を取り出す。

湯野「パパジーの子供にあげてくれ」

三枝、お菓子を手に取り、

三枝「おっ、ねるねるじゃないですか、きつと大喜びです。湯野さんこそどうして彼女を作らないんですか？ 以前はいましたよね」

湯野「俺はもう彼女はいらない。でもな、子供はほしい」

三枝「まだ子供を作れるでしょう」

湯野「おいおい、67歳だぜ。そんな元気はない」

三枝「メイドには子供はいないのでですか？」

湯野「あれも独身。人生でやり残したことは、子供を育てたことがないということだ。メイドもいるし、ベビーシッターもすぐに雇える。誰か子供を預からせてくれないかな」

三枝、頬を膨らませて、目を大きく開いて、頷いて、

三枝「足長おじさんかな。少し違うか、里親ですね。心当たりがあります。期待しないで待っていてください」

湯野「本当か？」

○トンド・墓地内

三枝、キカイ、アイナとアラを連れて歩いている。

アイナ、アラ、ねるねるを楽しそうに練っている。

通路にテントが張られ、10人が飲み食いしている。

三枝「ここで毎日パーティしている。それも朝から深夜まで」

キカイ、小声で、

キカイ「お葬式だよ。お通夜か、1週間は続くね」

三枝「ええっ、1週間も！」

テントの下で飲み食いしてたネルソン、出てくる。

ネルソン「おい、日本人、こっちに來て飲め！」

キカイ、呆れている。

キカイ「ネルソンはただで飲み食いできるな

ら、必ず現れる」

三枝、顔をしかめて手を振っている。

三枝「いやいや、俺は亡くなった人を知らない。
いくらなんでも失礼だろう」

ネルソン「賑やかだったのが好きなやつだった。
故人を偲んだらいい、さあ飲もう」

三枝「いや、故人を知らないのにどうやって
思い出を語る？」

ネルソン「マージャンできるか？ 奥でやってるぞ」

三枝「日本とルールが違う！」

ネルソン「嫌がってないで来いって、飲むぞ
ー」

ネルソン、無理矢理三枝を引っ張って
いく。

三枝、キカイに向かって、両手を広げ
て手前に引いている。

キカイ、笑いながら手を振っている。

○ トンド・路上

パパジー、テイトボーイ、やってくる。

ラップ、ベルをいたわっている。

ベル、段ボールの上で横になっている。

ラップ、立ち上がる。

ラップ「この前はありがとう。おかげでおい

しいもの食べてベルが少し元気になった」

テイトボーイ「あれから考えたんだがな。こ

こで産むのはどうかと思う。いつも横にな

って辛そうだしな」

ラップ「おれだって病院で産ませてやりたい

よ」

テイトボーイ「それでな、入院費用出すから、

病院に行こう」

ベル、起き上がる。

ベル「どうして？ 意味がわからない。NP

Oってそこまでしてくれるの？」

テイトボーイ「実はな、まだ決めてないけど、

本当に子供を教会に預けてしまうなら、俺

が育ててもいいかなって」

ベル「ふーん、貧乏そうに見えるけど、出産

費用出せるんだ」

ティトボーイ「貧乏そうで悪かったな」

ベル「ふーん、よくわからないけど、お金出

してくるなら入院してもいい」

ラップ「俺も行ってもいいのか？ 食事は俺

の分もあるのか？」

ティトボーイ「付き添いだな、ああいいぜ」

ラップ、飛び跳ねている。

ティトボーイ「お前ら、二人とも汚すぎる。

病院も不潔なホームレスなんて嫌がる。3

000円やるから古着、サンダル、下着を

何枚か買え！、それでシャワーして、爪切

って、散髪してこい。明日迎えに来るから」

ラップ、札を握り締めて喜んでいる。

○ トンド・墓地・三枝の家

アイナ、立って、右手を力強く振って

フィリピン国歌を歌っている。

アイナ「BAYANNG MAGILIP

ERLANGNNGPUSO・・・」

三枝、アイナの社会の教科書を見ている。

ホセ・リサールが載っている。

三枝「あー俺もホセ・リサールは知っている。
リサール公園に銅像が建っているぞ」
アイナ「フィリピンの英雄だって、ハンサム
でかっこいい」

アラ、三枝の膝の上に座り、スマホを
スクロールしている。

パパジーやってくる。

三枝「おう、聞きたいことがある。カナダに
行きたがっているシングルマザー、名前
は？ 誰からの情報？」

パパジー「マイキー、NPOのアンジェリン
からで、ロメロも知っている」

三枝「会った？」

パパジー「いや、会ってない。買い手に直接
会いたって書いてあったから、これは無
理だと思った」

三枝「金にはならないと思うけど、料理長の

湯野さん、知ってるだろ。彼が子供を預かって育てたいと言ってきた」

パパジー「湯野さんが！まさか、爺さんだし、仕事してるし、たしか一人暮らしだったよね。育てられるのかな」

三枝「住み込みのメイドはいるし、ベビーシッターも当てがあるらしい」

パパジー「それならなんとかなるな。よし、ホームレス夫婦を入院させた後に会いに行ってくる」

126

○マカテイ・タンの病院・受付

豪華な病院。

テイトボーイ、パパジー、周囲を気にしてひそひそ話している。

テイトボーイ「すげーな」

パパジー「貧乏人が来るような病院じゃない」

テイトボーイ、恐る恐る受付に行く。

パパジー、ついていく。

ラップ、ベル、体裁は整えている。荷

物はナイロン袋に入れた衣類だけ。キ
ヨロキヨロしながら、椅子に座ってい
る。

ラップ「ここって大金持ち専用の病院だよな、
つまみだされそう」

ベル「テイトボーイって何者？」

ラップ「よくわからないけど、この病院には
慣れていないような」

スタッフ2名、テイトボーイ、パパジ
ー、ベルとラップのそばに、

スタッフ1「部屋に御案内します。荷物はそ
れだけですか？ 部屋はVIPルームで広
いですよ」

スタッフ2名、歩き出す。

ラップ、ベル、恐る恐る歩きだす。

テイトボーイ、パパジー、続いている。

○同・ベルの個室

VIPルーム。広い、ベッドは2台、
ソファ、ダイニングテーブル、大型テ

レビ、コーヒーマーカー、冷蔵庫。
パパジー、ティトボーイ、ラップ、ベル、スタッフ2名、部屋に入る。

ラップ、ベル、立ちすくんでいる。

スタッフ1「私たちがお世話します。なんなりとお申し付けください。後ほど担当医が参ります。それまでにこの用紙に住所などすべて記入してください」

スタッフ2、用紙とボールペンをテーブルに置いている。

スタッフ1「お名前を教えてください」

ベル「アアア、アナベルです。ベルと呼んでください」

ラップ「ラファエルです。夫です。ラップでいいです」

スタッフ1「ラップさんもここに宿泊されますか？」

ラップ「はい」

スタッフ2、ベルに冊子を渡している。

スタッフ1「わかりました。食事は2名分用

意思します。冊子にルールが書いてあります。
よくお読みください。お聞きになりたいこ
とがありますか？」

ラップ「今はいいです」

スタッフ1「それでは無事に赤ちゃんが生ま
れるまでいい滞在でありますように」

スタッフ2名、出ていく。

○同・通路

スタッフ2名、歩きながら、

スタッフ2「院長の特患って聞いていたから

129

誰が来るのかと緊張していたけれど、貧乏
くさいやつばかりで拍子抜けした」

スタッフ1「確かに、でも見かけで判断し
たらダメだ。院長との関係は聞いてないが、
特患なんだぞ。丁重に対応しろ！」

○同・ベルの個室

ラップ、冷蔵庫の中を見て、テレビを
つけている。

ベル、へなへなとベッドに倒れこむ。

テイトボーイ、「どうした、気分が悪いのか？」

ベル「緊張したー」

ラップ、ベッドのスプリングを確かめている。

ラップ、ベルに向かって、

ラップ「すぐに産むなよ！　ずっと食事にあ
りつけるし、ベッドも最高」

ベル「無茶言わない！」

テイトボーイ「お前ら、くれぐれもホームレ
スだなんて言うなよな。背筋を伸ばし、堂々
としろ、わかったか！」

ラップ「言わない」

テイトボーイ「用紙は俺が書いてやる。医者
の言うことをよく聞くんぞ、また来るか
らな」

○トンド・墓地・パジーの家

猛烈な雨が降っている。

アイナ、アラ、キャツキャツ叫びなが

ら、雨の中を駆け回っている。

パパジー、三枝、外を見ている。

パパジー「アンジェリンとロメロとマイキーに会う約束をしてるんだけど、この雨じゃどうしようもない」

家の前が濁流になっている。

三枝「こりゃ、だめだ」

パパジー、スマホを見ている。

パパジー「テキストが来た。マイキーも立ち往生してて家に戻れないらしい。おっもう一つテキストが、アイナ、明日は学校が大

雨のため休みだって」

アイナ、喜んでいる。

○マカティ・タンの病院・ベルの個室

医師、4ロエコーでベルの胎児を見て
いる。

ラップ、横から覗き込んでいる。

スタッフ1、立っている。

医師「順調ですね。動きも活発で元気です」

ベル、だるそうにしている。

ベル「いつ頃生まれそうですか？」

医師「10日後くらいかな」

ベル「痛いですか？」

医師「計画無痛分娩しましょうか？」

ベル「痛くないってこと？」

医師「痛くありません」

ベル「やりたいけど、相談しなきゃ」

医師「わかりました。今日と明日はベルさん

の健康診断です。スタッフが案内します」

ベル、服を整えている。

スタッフ1、バインダーを持って近寄

ってくる。

ベル「2日間もやるの？」

スタッフ1、バインダーを広げて、

スタッフ「50項目以上あります。まずは身

長、体重からですね」

ベル、ふーっとため息。

○ヴァレンズエラ。リムの家・リビング

リム、リンロン、ヴィルマ、中国茶を
飲み、ゴマ団子を食べている。

リム「ホームレス夫婦が入院したって」

リンロン「ヴィルマとそーっと見に行ってきた
ます。あの写真だけじゃよくわからないし、
タンさんに会って検査結果も聞きたいし」

ヴィルマ、頷いている。

リム「反対するのをやめたのか？」

リンロン「気にいらないけど、赤ちゃんを見
てから」

リム「行ってもいいけど、絶対に買い手だと
ばれないようにしろよ」

ヴィルマ「掃除のおばさんに変装していけば
わからないでしょう」

リム「今日には行かないほうがいい。大雨にな
るらしい」

○マカティ・タンの病院・ベルの個室

ラップ、ベル、ぼーっとテレビを見て
いる。

配膳係が食事を運んでくる。

ラップ「待ってました」

ベル、呆れている。

配膳係、テーブルに食事を並べ、立ち去る。

ベル「あんたって本当に怠けものね。どこにも行かず、一日中テレビを見て、よく飽きないね」

ラップ「天国だぞー」

ベル「テイトボーイ来ないかな？ 相談した
いことがある」

134

ラップ「雨が降り続いてるから来れないんだ」
ベル「痛くない出産があるんだって？」

ラップ「ふーん」

ベル「適当な返事ね。私のことなんか心配してないんだ。あんたのせいでこうなったんだから。あー気分悪い。お前とは2度とセックスしない」

ラップ「こんな豪華な病院で産めて、痛くないなんてラッキーじゃないか」

ベル「お前がラッキーなだけ。欲しくもない
子供産むのは私なんだからね」

○パンダカン・マイキーのアパート・前

プラスティックの椅子にパパジー、ロ
メロ、アンジェリン、マイキー（28
女）、メロディ（3女）、座っている。

マイキー「こんなところでごめんなさいね。

部屋にはたくさん人がいるし、私は居候だ
から肩身が狭くて」

パパジー「いいですよ」

ロメロ「マイキーさん、久しぶり。一段と綺
麗になったね。アンジェリンさんは笑顔が
とってもかわいいな」

パパジー「おいおい、ナンパしにきたんじゃ
ない」

マイキー、アンジェリン、お互いを見
て微笑んでいる。

アンジェリン「この人がパパジー、メロディ
のことで話があるって」

パパジー、メロディを見て、
パパジー「かわいい女の子ですね。マイキー
さんに是非会っていただきたい人がいます。
五つ星のレストランの料理長で名前は湯野
さん。おじいさんですが、里親になりたい
そうです。明日、ニューポートシティのホ
テルのレストランでランチをいかがです
か？メロディも一緒にね」

マイキー、メロディの肩をポンポンし
ている。

マイキー「はい」

アンジェリン「私も行ってもいいの？」

パパジー「もちろん」

アンジェリン、両手でガッツポーズ。

アンジェリン「わー感激」

ロメロ「おおお俺は？」

パパジー「うーん？おとなしくしてろよ」

ロメロ「わー」

○同・路上

パパジー、ロメロ、帰っていく。

マイキー、アンジェリン、見送っている。

マイキー「あの人、悪い人には見えないけれど、墓地に住んでいるのでしょうか。大丈夫かな？」

アンジェリン「心配しないで、明日は日本人のボスも来るはず。あのホテルは五つ星だよ。そこでご馳走してもらえるだけで幸せ」

○タンの病院・ベルの個室・内

リンロン、ウイルスマ、清掃人のユニフォームを着て、掃除をしながらラップとベルをちらちら見ている。

ラップ、テレビを見ている。

ベル、いらいらしている。

ベル、ラップに向かって、

ベル「ドラマはやめて！ 音楽番組ないの？」

ラップ、チャンネルを替えている。

ウイルスマ「もうすぐですね、順調ですか？」

ベル「よくわからない。あなたたち、いつも
の人じゃないよね」

ヴィルマ「急用ができたみたいで、かわりに
掃除させてもらっています。男の子です
か？」

ベル、だるそうに、

ベル「知らない」

テイトボーイ、入ってくる。

ベル、にっこり笑う。

ベル「待ってたよ」

テイトボーイ「ごめん、雨がひどくて来れな
かった」

ベル「相談したいことがあるの。痛くない出
産があるんだって？」

テイトボーイ「何？ それ」

ベル「知らないの？」

リンロン、ためらいがちに口を挟む。

リンロン「計画無痛分娩のことね。楽ですよ」

ベル「そうそう、それそれ、してもいい？」

テイトボーイ「少し待って！ 聞いてみるわ」

○ニューポートシティ・五つ星のホテル・日本料理店・前

三枝、パパジー、アンジェリン、ロメロ、マイキー、メロディ、店を見ている。

湯野、出てくる。

湯野「湯野です。お越しいただきありがとうございます。席は用意していますので、好きなものをどうぞ。今日は私の働く様子を見ていただき、後日、自宅でゆっくりお話ししましょう」

マイキー、メロディを抱き上げて、ドナ「初めまして、マイキーです。この子がメロディ、3歳です。お招きありがとうございます」

湯野、目を細めて、

湯野「可愛い女の子ですね。パパジー！ 久しぶり」

パパジー、右手を挙げて、
パパジー「湯野さんも元気そう」

湯野、三枝に向かつて、

湯野「三枝！ 本当に連れてくるとはな。ありがとう。マイキーさんは日本料理好きかな？」

三枝「食べられそうなものを選ぶ」

湯野「おう！ それじゃあ厨房に戻る」

○同・中

落ち着いた格調高い店。

店内は客が半分ほど。

三枝、パパジー、アンジェリン、ロメロ、マイキー、メロディ、席に座っている。

ウェイター、三枝の横に立ち、注文を待っている。

三枝、メニューを見ながら注文している。

アンジェリン、頬を膨らませている。

アンジェリン「どうして全部決めちゃうのよ」

三枝「君たちにまかせたら、食べきれないほ

ど注文して、余った料理を持ち帰ろうとするのが目に見えている。それに日本料理はわからないよな？」

アンジェリン「どうしていけないの？　好きなものを注文していいって言ってたじゃない。日本料理は初めてだけど、写真を見ればなんとなくわかる」

ロメロ「彼女に食べさせてやりたいから、メイクアウトしたいなあ」

パパジー「大量に持って帰るなんてことしたら、湯野さんが恥ずかしいだろ」

アンジェリン「少しくらいいいじゃない。こんな高級店、2度と来れないんだから」

三枝「わかったわかった。少しだけ追加していい」

アンジェリン「やったー」

ロメロ「うほっ」

アンジェリン、メニューを見ながら、ウェイターと話している。

三枝、マイキーに向かって、

三枝「マイキーさん、湯野さんはどうですか？」
マイキー「紳士ですよ。立派な仕事をされている。ただ、日本人って少女にみだらな行為をしたりするじゃないですか？ その点は大丈夫ですか？」

パパジー、マイキーに向かって、人差し指を口に当て、小声で、
パパジー「ここでそんなこと聞かないでくれ！」

三枝「他のお客さんに聞こえる。後日聞いてあげるから」

x x x

料理が次々に運ばれてくる。

全員、食べ始める。

アンジェリン、マイキー、ロメロ、感激している。

x x x

食べ終わって、

ウェイター、余った料理を4つの紙袋に入れて持ってくる。

アンジェリン、ロメロ、どうやって分けるか相談している。

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、リンロン、ヴィルマ、話している。

ヴィルマ「見てきましたけど本当に子供はいらないようでしたね」

リンロン「夫婦はあの写真よりはましだったわ」

リム「いつごろ生まれそう？」

ヴィルマ「お腹はパンパンでいつ生まれてもおかしくない」

リム「三枝が計画無痛分娩してもいいかと聞いてきた。問題ないだろ？」

リンロン「私たちがいるときに話していた。問題ないわ」

ヴィルマ「あの夫は怠け者ですね。女性も何を考えてるのかよくわからない。どんな子供が生まれてくるのか想像できなかった」

リム、リンロンに向かって、
リム「ドンドン夫婦が決めたらしい。俺は口
をはさまない、お前もな」

リンロン「はい」

ヴィルマ「子供の顔を見て、検査結果を見て、
主人と相談して決めます」

第4話

○ トンド・墓地・広場（夜）

カラオケを大音量で歌っている。テーブルには酒、ジュース、食べ物が置かれていて。30人ほどが椅子に座って紙コップ、紙皿を持ちながら飲み食いしている。

三枝、キカイ、後ろの方で見ている。

キカイ「私も歌いたいな」

三枝「おっ！　うまいのか？」

輪の中に座っていたテイトボーイ、三枝を見つけて大声で、

テイトボーイ「おい！　日本人！　こっちに来いよ。一曲歌え、一緒に食べよう」

その声に観客が一斉に振り向く。

観客1「日本人がいるのか？」

観客2「あいつ、ここに住んでるぜ」

観客3「歌え！」

三枝、手を大きく左右に振っている。テイトボーイ、さらに大声で、両手を

下から上に振り上げながら煽っている。

テイトボーイ「みんな聞け！ 貧乏な日本人が墓地に住んでる！ こんな掃き溜めによ
うこそだろ！ 歌を聞きたくないか？」

あちこちから歌え歌えの大合唱。

三枝、困り果ててキカイを見ている。

キカイ「歌っちゃえば？ 有名になれるし、
住みやすくなるわよ。チャンスじゃない」

三枝、キカイに背中を押され、テイト

ボーイに引っ張られて、観念している。

146

三枝、最前列に行き、歌のリストを見
ている。曲を伝えて、マイクを握り締
めて観客を見渡す。

観客1「日本人は金持ちなのになぜ墓地に住
んでる？」

三枝、苦笑いしながら、

三枝「三枝です。日本人がなぜ墓地に住んで
るかというと！ お金がない！」

観客2「よ！ 貧乏人！」

観客、笑っている。

三枝、静まるのを待って、

三枝「墓地に住むのはさすがに抵抗があったけど、楽しいこともあるし、みんな陽気だし、そんなに悪くない」

観客2「そうだろそうだろ」

三枝「ただハエや蚊、ゴキブリ、ネズミが多すぎます。病気になるいためにもっと清潔にしてほしい」

観客3「わかったわかった」

三枝「では、日本の歌ですが、知っている人が多いようなので、この歌を贈ります。K

147

I R O R O の未来へ（P A T U N G O S
A K I N A B U K A S A N ）」

三枝、タガログ語と日本語を混ぜて歌います。

三枝「ほら、足元を見てごらん、これがあなたの生きる道、ほら、前を見てごらん、これがあなたの未来……」

何人かが一緒に歌います。

何人かが立ち上がって踊っている。

歌い終わると、やんやの拍手、ヒュー
ヒューの指笛、日本人、いいぞ、の掛
け声、

観客1「アンコール、アンコール」

観客たち「アンコール、アンコール」

テイトボーイに肩を叩かれ、三枝、手
を振りながら、キカイの横へ。

キカイ「遊びまくっていただけのことはある。

みんな大喜びだったじゃない。私も歌いた
かったけど、あの後じゃ無理だわ。わはは
はは」

148

○同・三枝の家

アラ、アイナ、三枝のベッドで気持ち
よさそうに寝ている。

三枝、パパジー、話している。

パパジー「娘たちが勝手にベッドを占領して
申し訳ない」

三枝「かまわない。寝顔を見ているだけで俺
は癒されている」

パパジー「うちは人が多いからゆっくり昼寝
ができない」

三枝「ベッドがもうひとつあってもいいな」

パパジー「ボス！ 昨日、カラオケやんやの
喝采だったんだって」

三枝「テイトボーイに煽られた」

○マカテイ・レガスピビレッジ・湯野のマン
ション・リビング

三枝、湯野、マイキー、メロディ、ア
ンジェリン、パパジー、ロメロ、メイ
ド、ベビーシッター、話している。

マイキー「先日はごちそうさまでした。見た
目も味も最高の料理でしたね。とてもおい
しかったです」

湯野「喜んでもらえてよかった」

湯野、かがんでメロディのそばへ、

湯野「こんにちは」

メロディ、びっくりして、大泣きして
いる。

湯野、慌てて立ち上がる。

湯野「怖がらせてごめんごめん。頭も真っ白だし、じいさんだもんな」

マイキー「すみません」

湯野「ベビーシッターなら泣かないのかな」

ベビーシッター、メロディを優しく抱き上げる。

メロディ、泣き止んでいる。

メイド、飲み物とケーキ、クッキー、フルーツを並べている。

湯野「さすが、ベビーシッターはすごいな」

三枝「湯野さん、聞きにくいことなんです、マイキーさんが日本人は少女を性的虐待、性的暴力をすると心配しています」

湯野、左手でこめかみを押さえている。

湯野「俺は違うと言ってても信じてもらえないだろうな。メイドに直接聞いてみたら？

もう10年一緒に住んでるから」

マイキー「すみません。失礼なことをお聞きして、でも心配なものですから」

マイキー、立ち上がり、メイドと話している。

三枝「少女を弄ぶ日本人もいるからなあ」

湯野「疑いが晴ればいいけど。マイキーさんは親戚の家に居候しているんだろ」

パパジ「肩身はせまいらしいです」

湯野「そうか、それなら提案なんだが、ここに親子一緒に住んでみたかどうか？ 部屋が一つ空いているからね。マイキーさんには手を出さないで安心して」

三枝「聞いてみます」

マイキー、席に戻ってくる。

アンジェリン、メロディ、ジュースを飲みながら、ケーキをじっと見ている。

マイキー「メイドさんが湯野さんはそんな人じゃないと断言してくれました。以前は彼女がいたそうですね」

湯野「疑いが晴れてよかった」

三枝「マイキーさん、よければ親子共々、ここに住んでみたかどうか？ 湯野さん

に里子として預けるかどうか今すぐ決めなくても、一緒に住んでいればいろいろとわかるでしょう。嫌なら出ていけばいいだけのことだし」

マイキー「本当？　本当ですか？」

三枝「あーそれとマイキーさんには手は出さないそうです」

マイキー、口元を押さえて、少し微笑んで、

マイキー「あらまあ」

アンジェリン「賛成。きつとおいしいものをいっぱい食べさせてもらえるだろうな。もしマイキーがここに住むなら遊びにこよう」と

三枝「アンジェリンは食べ物に執着してるな」

マイキー「本当にいいのですか？　ありがとうございます。すぐにも住みたいです」

湯野「よかった。話は決まりだな。さあケーキでも食べて、メロディ、ケーキは好き？」

メロディ、うなずいて少しずつ湯野に

近寄ってくる。

ベビーシッター、ケーキを切り分けて
いる。

湯野「このケーキはうちのレストランで焼いたものなんだけど、甘さが控えめなんで大丈夫かな。子供に人気のある甘いケーキの
ほうが良かったかも」

メロディ、食べている。

湯野「おいしい？」

メロディ、にっこり笑って、

メロディ「うん」

湯野、大喜びしている。

アンジェリン、おいしそうに食べてい
る。

全員、食べている。

湯野「三枝、俺の部屋に来てくれるか？」

三枝、怪訝な顔で、

三枝「はい」

湯野、三枝、部屋に入っていく。

湯野、ドアを閉めて、

湯野「三枝、本当にありがとう、夢が叶うかもしれない。それでな、お礼といってはなんだが、お前、金でトラブったんだろ。この金を受け取ってもらえないか？　少しは役に立つだろう。」

三枝、驚いている。

三枝「お礼なんていいですよ、レストランで食べさせてもらっただけで十分です」

湯野「まあそういうな。だまって受け取ってくれ。そしてこれからよろしく頼む。ゴルフも行こうぜ。おまえしか日本人の友達はいないんだからな」

三枝、しばらく考えて、

三枝「ゴルフは右ひじが痛くて、まだ先になりそうです。実は養子斡旋の仕事のパパジーたちと始めようとしているのですが、資金が不足していたのでこのお金は本当に足りがたい。投資していただいたと思うことにします」

○ トンド・墓地・三枝の家

アラ、アイナの髪を引っ張っている。
アイナ、お菓子をぐっと握り締めてアラに渡そうとしない。

三枝、パパジー、テイトボーイ、アンジェリン、集まっている。

三枝「アンジェリンが紹介してくれたマイキーさんの件がうまくいった。配分するぞー、俺、パパジー、アンジェリン、テイトボーイが10万。デレク、ロメロ5万。残りの50万は運転資金としてプールしておく。納得してくれるか？」

テイトボーイ「納得するとかの問題じゃない。俺はこの件では何もしていない。本当にもらっていいのか？」

パパジー「デレクもなにもしていないぜ」
アンジェリン「私の毎月の給料は5万なんですよ。紹介しただけで2ヶ月分もらえるなんて」

三枝「受け取ってくれ」

テイトボーイ「喜んで」

三枝「ホームレスの出産がもうすぐだ。あれもなんとかあると思っている」

テイトボーイ「ボスって呼んでもいいですか？ 参りました。これからは態度を改め

ボスの指示には素直に従います」

パパジー「もう日本人って呼ぶなよな」

テイトボーイ「おう、決して呼ばない。呼んだ奴はぶん殴ってやる」

アンジェリン「私も、NPOをクビになったってこれで食べていける」

三枝「おいおい！ やめるなよ。情報が入らなくなってしまう」

アンジェリン「やめなですよ。吹っ切れました。これからがんがん協力します」

○同・墓地・内

三枝、歩いている。少しふらふらしている。

おばさんが声をかける。

おばさん「元気かい、日本人。また歌ってーな」

三枝、立ち止まって、つらそうに、

三枝「機会があればね」

おばさん「FOR YOUっていう日本の歌が大好き、今度、お願いね」

三枝「????」

○同・パパジの家・前

三枝、手でおでこを触っている。

キカイ、三枝を見ている。

メイリーン、大鍋から料理をトレイに入れていいる。

キカイ「どうしたの？」

三枝「なんか熱っぽい。頭が痛いし、ふらふらする」

キカイ、三枝の首に手を当てている。

キカイ「熱、あるね。けっこう高い。休んだ方がいい」

メイリーン「食欲はあるの？」

三枝「食べたくない」

メイリーン「チキン粥作ってあげる。あとで
持っていくから寝てて」

○同・三枝の家（夜）

三枝、寝ている。

キカイ、チキン粥とバナナを持って、
アイナ、水、氷、タオルを持って、
アラ、熱さまシートを持っている。

キカイ「大丈夫？」

三枝「疲れただけだろう。寝れば治ると思う」

アイナ、三枝の首に手を当てて驚いて
いる。

アイナ「熱いよ！ 早く元気になって遊ぼう
よ！ かくれんぼしたい」

キカイ「無理言わない」

キカイ、体温計を三枝の腋に挟んでい
る。

体温計を取り出して見ている。

キカイ「39度ある。これはやばい、病院へ

いったほうがいい」

三枝「解熱剤を買ってきてくれないか？」

キカイ「病院に行くのは嫌なの？」

三枝「病院に行くと金がかかる」

キカイ、熱さまシートを張り、

キカイ「じゃあバイオジェシツク買ってくる。

明日になってまだ熱が高かったら病院に行くからね」

○同・三枝の家（早朝）

パパジ、キカイ、やってくる。

三枝、ハアハア喘いでいる。

チキン粥、バナナが手つかずで置いてある。バイオジェシツクの箱が開けられてい

る。パパジ「何も食べていない」

キカイ、体温計を三枝の腋に挟んでいる。

キカイ「熱、測るね。苦しそうだわ」

キカイ、体温計を見て、目を大きく開

けている。

キカイ「ダメだ、40度ある。病院へ行くわよ」

三枝、絞り出すような声で、

三枝「安い病院にしてくれ」

○同・病院・エマージェンシールーム

パパジ、三枝を抱えて、ベッドに寝かせている。

看護婦、手伝っている。

キカイ、付き添っている。

医者、奥から出てくる。

医者「どうしました？」

パパジ「熱が40度ある」

医者、診察している。

医者「血液検査をしましょう。後ほどウイルス検査もします」

看護婦、注射している。

医者「おそらくデング熱ですね。夕方には検査結果がわかりますが、まずは入院してく

ださい。デング熱は特效薬がないので点滴で熱を下げます。絶対安静ですよ」

キカイ「あちゃー、蚊が多いから」

医者「話せますか？　今までにデング熱にかかったことはありますか？」

三枝「ありません」

医者「それはよかった。2度目で高熱だと重症化する可能性が高い。入院の手続きをします。ここで休んでいてください」

三枝、パパジーに、か細い声で、

三枝「大部屋でいいぞ。入院費は先払いだよ
な」

パパジー「そうだ。お金の心配はしなくていい」

○同・大部屋

患者が10人以上いる。

三枝、点滴をぶら下げながら目を閉じている。

キカイ、パパジー、見守っている。

テイトボーイ、アンジェリン、部屋に入ってくる。

テイトボーイ「デング熱かよー、大丈夫なのか？」

パパジー「まだわからない、熱が下がってくれないことには」

テイトボーイ「ボス、死ぬなよ。今死なれたらみんな困る」

アンジェリン「ばか！　なんてこと言うのよ」

三枝、目を開けて、小さい声で、

三枝「テイトボーイ、見舞いなんてしてないでタンさんの病院に行ってくれ。それでホームレスにまだ産むな、俺が治るまで待ってくれと」

テイトボーイ「やばい！　いつ生まれるのだったかな！　赤ちゃんが出られないようにタンポンを詰めてくる」

パパジー「やさしいなあ、赤ちゃんを傷つけないように気配りしてる」

アンジェリン「馬鹿同士の会話ね」

キカイ、笑っている。

テイトボーイ、出ていく。

○同・（朝）

翌日。

三枝、点滴が落ちるのをぼーっと見て
いる。

看護婦、体温計を口の中に入れている。

医者、検査結果と体温計を見ている。

医者「やはりデング熱でしたね。まだ熱が下
がらないな」

三枝、寝返りをうって、

三枝「食べたものをすべて嘔吐してしまう」

医者「発疹もでてますね。安静にしてください。
い。食べなくてもいいように点滴で栄養補
給もします」

○同・（朝）

2日後

メイリーン、アイナ、アラ、ベッドの

横にいる。

三枝、上半身を起こしている。

メイリーン「ようやく熱が下がったね。もう

大丈夫」

三枝「アイナとアラの顔を見たら元気になった」

アイナ「じゃあかくれんぼしよう」

アラ、他の患者のベッドの下に隠れている。

メイリーン「ダメだよ、ここは病院だからおとなしくしてなさい。はしやぐと看護婦さんに注射されるわよ」

アイナ、顔が引きつっている。

アイナ「注射はいや！」

アラ、メイリーンに抱きつきながら泣いている。

アラ「注射は怖い」

メイリーン「静かにしてれば大丈夫」

三枝「もう退院できるかな」

メイリーン「聞いてくるわ。あーそうそう、

テイトボーイから伝言頼まれた。ホームレスはまだ出産していないから心配しないでって」

三枝「よかった」

メイリオン、出ていく。

アイナ、アラ、三枝の点滴をじっと見ている。

アイナ「お水がぶら下がってる」

三枝「お水じゃなくて薬だよ、少しずつ体の中に入れていく」

アイナ、点滴の先が注射張りだと気が付いて、

アイナ「痛そう」

三枝「刺すときにチクつとするだけであとは痛くないよ」

アイナ「ふーん」

メイリオン、帰ってくる。

メイリオン「明日の朝に平熱なら退院していいって」

アイナ、アラ、喜んでる。

○ トンド・墓地・三枝の家

翌日。

三枝、パパジ、ロメロ、話している。

ロメロ「ボス、退院おめでとうございます。

見舞いに行かなくてごめんなさい。パパジ

ーが教えてくれなくて。それから5万円も

らいました。ありがとうございます」

三枝「それで話って？」

ロメロ「近所に住んでる人が、赤ちゃんを預

かっているのです。母親のお父さんが殺し

かねないんで」

三枝「物騒な話だな」

x

x

x

(フラッシュバック)

夜、制服を着たジョバイ(女14)が

歩いている。

3人の男、正面から歩いてくる。

すれ違いざまに男1が口を押え、男2

がジョバイを抱え上げ、あっという間

に暗がり引きずり込んでいる。男3
は周囲を見張っている。

x

x

x

ロメロ「その母親というのが14歳、中学生、
3人の男にかわるがわるレイプされ、生ま
れてきたのがその赤ちゃんというわけなん
です」

三枝「それはきつい。お父さんは赤ちゃんを
見ているだけで腹が立つんだろうな」

パパジー「もしアイナとアラがそんなことに
なったら俺だってなにをするかわからない」

三枝「レイプ犯は捕まったのか？」

ロメロ「いえ、夜だったらしく顔がまったく
わからなかったらしい」

パパジー、怒っている。

パパジー「お前、よくもまあ淡々と話せるな」

三枝「パパジー！それは八つ当たりだ！」

パパジー「なんか無性に腹が立って」

三枝「アンジェリンに相談してみる。彼女な

ら経験があると思う」

○マカティ・タンの病院・ベルの部屋

ティトボーイ、駆け込んでくる。

ラップ、一人でテレビを見ている。

ティトボーイ「ラップ！生まれたのか？」

ラップ「まだだよ。1時間前にLDRに入っ

たまま」

ティトボーイ「立ち会わないのか？」

ラップ「ベルが来ると言うから」

ティトボーイ「待つしかないか」

ティトボーイ、部屋を出て三枝に電話

している。

ティトボーイ「ボス！生まれたらすぐに連

絡します」

ティトボーイ、部屋に戻ってくる。

ラップ、テレビを見ている。

ティトボーイ、ソファに寝そべってい

る。

x

x

x

看護婦、ドアを開ける。

ティトボーイ、ラップ、振り向く。

看護婦「生まれました。おめでとうございま

す。ラップさん、女の子です。母子ともに

健康です。LDRに行きますか？」

ティトボーイ、ラップ「はい！」

ティトボーイ、ラップ、走っていく。

○同・LDR

ティトボーイ、ラップ、入ってくる。

ベル、寝ている。

看護婦、赤ちゃんを抱いている。

ラップ「大丈夫か？」

ベル「うん、痛くなかった。でも腰のあたり

の感覚がない」

看護婦「腰に麻酔を注射したので、時間が経

てば治ります」

ティトボーイ、赤ちゃんを見ている。

スマホを取り出し、外に出る。

看護婦「赤ちゃんは新生児室に移動します。

よろしいですか？」

ベル「はい、どうぞ」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、スマホに話している。

三枝「リムさん！ 女の子が先ほど、生まれました。赤ちゃんの検査結果は明後日にはわかります。結果はタンさんから直接お聞きください。そして女の子を引き取るか、諦めるか決めていただけますか？ 連絡お待ちしています」

170

○ オルティガス・コンドミニウム・ドンナと
ラニーの部屋・リビング

部屋は2ベッドルーム。

ドンナ（41）、ラニー（38）、ビル（33）、キコ（36）、ダイニング
テーブルに置かれたポップコーンを食べながら、言い争っている。

ドンナ、顔を真っ赤にして怒っている。

ドンナ「どうしてお前らみたいなへなへなと
したおかま野郎の子供を私たちが産まなき
やならない！　今まで仲良くやってきたの
に突然、くだらない提案しやがって」

ビリー「話は最後まで聞いてくれ！　産んで
くれたら1000万づつ払う。二人が同時
に産んで一人ずつ分けたらいいだろう」

ドンナ「ばかやろう、たった1000万ぽっ
ちでやってられるか。1億もらっても絶対
やらない。夜鷹にでも頼みやがれ。それに、
もし2人産んで、それから分けるなんて簡
単に言うけど、私とラニーでどちらを育て
るか揉めるだろうが。喧嘩させたいのか？」

ラニー「私が何度も人工授精や体外受精に挑
戦しているのは知っているでしょう？　も
っと早く産めばよかったんだけど。あまり
時間が残されていないの？　マッチョで頭
がいい人の精子をもらい続けるわ。あんた
らの精子なんていらない」

キコ「冷静になって考えろって！　1000

万だぜ。マツチヨ野郎の精子ならお前らが金を払うんだよ」

ドンナ「いい加減にしろ！ お前らは金を払うだけ。こちらは10ヶ月の間、仕事もできず、酒も飲めず、つわりに耐えて、遊ぶこともままならない。不公平だろうが！ あー頭がおかしくなる。キコなんて親の会社の取締役になってるけど、肩書だけで何もしない。それで何千万も報酬を受け取っている。典型的なバカ息子じゃないか」

ビリー「ボロクソに言いやがって、ここまでわからずやだとはな。もういいや、レズビアン夫婦には頼まない。他を考えようぜ？」

キコ「あーそうしよう、帰ろう！」

ドンナ「あーさっさと帰れ！ おかま野郎」

○マカティ・タンの病院・新生児室・前

ドンドン、ヴィルマ、タン、赤ちゃんをガラス越しに見ながら話している。

タン「健康診断はすべて良好だった。明日に

は退院できる」

ドンドン「引き取ることに決めました。ありがとうございます」

タン、ドンドンの肩に手を置きながら、
タン「困ったことがあればいつでも相談に乗るからな」

○同・院長室

重厚な部屋。

タン、リム、三枝、ソファに座り、話
している。

リム「世話になったな」

タン「無事に生まれて良かった」

リム「三枝が斡旋してくれた」

タン「そうだったのか」

タン、出生証明書をリムに渡している。

タン「父親はドンドン、母親はヴィルマ、医者
のサインは俺がした。間違いがないか確認
してくれ」

リム、じっと見ている。

リム「ありがとう。問題ない、すぐに市役所に持って行く」

三枝「もし何かあってもタンさんには一切迷惑はかけませんので」

タン「法律的には問題があっても、みんなが喜んでいるなら俺は賛成だ」

リム「ほう、お前がそういうとは思わなかった」

タン「建て前ではなく本音を語ると、子供が幸せに育ってくれるなら、法律を無視した養子縁組もいいじゃないか！法律を無視するといえ、死を待っただけで苦しんでいる患者が望むなら安楽死を手助けしたいが、立場上それはできない。三枝のように失うものがないからできることもあり、少し羨ましいけどな」

○ トンド・墓地・三枝の家

アイナ、アラ、バトバトピックと言いつつながら、じゃんけんをしている。

パパジー、三枝、テイトボーイ、話している。

三枝「ホームレスの赤ちゃんを引き取ると連絡があった。明日は忙しい」

パパジー、テイトボーイ、両手でガッツポーズをしている。

テイトボーイ「さすが！　ボス！」

パパジー「最後まで気を抜かずにやらなきゃな」

三枝「テイトボーイ、ずっと病院に詰めて大変だったな。あと少しだ、まかせたぞ」

テイトボーイ「おーっす」

○マカテイ・タンの病院・ベルの部屋

翌日。

テイトボーイ、パパジー、ベル、ラップ、スタッフに挨拶している。

テイトボーイ、赤ちゃんを抱いている。
ラップ、名残惜しそうに部屋を見ている。

全員、部屋を出ていく。

○トンド・路上

テイトボーイ、赤ちゃんを抱いている。
パuzzi、カバンを持ち、立っている。
ラップ、ベル、段ボールの上に座って
いる。

パuzziカバンから封筒を出している。

テイトボーイ「いいんだな！ それじゃあ謝

礼を10万渡すぜ。それと夕方まではここ
を動かないでくれ！ もう一度戻ってくる

から」

ベル「こんなにもらっているの？」

テイトボーイ「あー大事に育てるからな。そ

れじゃあ、夕方にな！」

○チャイナタウン・中華料理の店・内

古くてごちゃごちゃした店。

三枝、食事している。

テイトボーイ、赤ちゃんを抱きながら、

パパジー、カバンを抱えながら店内に入ってくる。

三枝「お疲れ、なんでも注文したらいい」

テイトボーイ、パパジー、メニューを見てオーダーしている。

三枝、赤ちゃんをテイトボーイから受け取る。

三枝「ホームレス夫婦はどうしてる？」

テイトボーイ「あっけらかんとしたもんで、

10万で満足している。300万なんて払う必要ないと思うけど」

三枝「俺の言う通りにやってみろ。いずれわかる」

パパジー「きっちり払ってくる」

三枝、抱き方が決まらず悩んでいる。

三枝「生まれたての赤ちゃんは首が座っていないから怖い」

パパジー、見かねて、抱き方を教えている。何度かやってみて、ようやくさまになっている。

パパジー、カバンから哺乳瓶に入った
ミルクを赤ちゃんに飲ませている。

料理が運ばれてくる。

テイトボーイ、パパジー、食べている。

テイトボーイ「パンパースはさっき代えてお
いた」

パパジー「泣かないでくれよな」

三枝、スマホをチェックしている。

三枝「タクシーが来た。それじゃあテイトボ

ーイ、俺たちは行ってくる。ゆっくり食べ
てていい。夕方もう一度会おう」

パパジー、一気に食べている。

三枝、カバンを持ち、会計を済ませて
いる。

パパジー、口いっぱい頬張りながら、
赤ちゃんを抱いて出ていく。

○ヴァレンズエラ・リムの家・前

三枝、赤ちゃんとカバンを抱えタクシ
ーから降りている。

パパジー、タクシーを待たせたまま、
民兵2名と話している。

○同・リビング

三枝、赤ちゃんを慎重に抱き、カバン
を持って、部屋に入ってくる。

ヴィルマ、笑いながら赤ちゃんを受け
取る。ドンドン、リム、リンロン、ヴ
イルマを取り囲んでいる。

ドンドン「俺にも抱かせてくれ？」

ヴィルマ、赤ちゃんをドンドンに渡す。

°179

リム、三枝の肩を軽く叩きながら、
リム「ありがとう、大切に育てるからな」

リム、足元に置いてあるカバンを三枝
に渡す。

リム「500万ある」

三枝、カバンを開け、確認している。

三枝「確かに、受け取りました。また遊びに
窥います。赤ちゃんが元気に育っている様
子を見たいので」

リム「いつでも来てくれ。それとセバスチャ
ンから伝言がある。娘さんがマニラカテド
ラルで来月に結婚式をあげる。三枝にもぜ
ひ来てほしいと」

三枝「わかりました。必ず伺います」

○トンド・路上（夕方）

テイトボーイ、パパジーやってくる。
ベル、ラップ、段ボールの上で寝てい
る。横にはジョリビの紙袋がある。

テイトボーイ、紙袋を覗いて、

テイトボーイ「おお、旨そう。待たせたな」

パパジー、ベルにカバンを渡す。

ベル、起き上がり、カバンの中を見て、

驚いている。

ベル「あのあの！ お金じゃない？ いった
い、いくら入ってるの？」

テイトボーイ「290万だな。さっき渡した
10万を足せば全部で300万」

ラップ、起き上がって走り回っている。

ベル、大事そうにカバンを抱えている。

ベル「こんなところにいたら盗まれる。家を探さなくちゃ」

テイトボーイ「一言いいか、子供を売るのは犯罪だ。売ったベルも買った俺も刑務所に行くことになる。誰にも話すなよ。俺たちだけの秘密だ！　いいな！」

ラップ「誰にも話さない。刑務所には行きたくない」

ベル「もうひとつ聞いていい？」

テイトボーイ「何？」

ベル「また産んだら次も買ってくれるの？」

テイトボーイ「ははは、また産むのか？　多分大丈夫だ」

ベル、にっこり笑って、

ベル「ラップ、セックスしよう！　また産む

わ」

ラップ「2度としないって言ってたのに！」

ベル「わははは、毎日、やりまくるよ」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、テイトボーイ、アンジェリン、話している。

三枝「分け前だ。それぞれ20万ずつ。あとロメロとデレクに10万ずつ渡してやれ、残った100万はプールしておく。いいか？」

パパジー、テイトボーイ、アンジェリン、スマホから音楽を流して踊りだす。

アイナ、アラ、入ってきて踊っている。

アンジェリン「NPOの給料の6か月分をこの2週間で貰ってしまった」

テイトボーイ「ホームレスがまた産むから、買ってってくれって」

三枝「やっぱりな。300万もらうとそう思うだろ。まずはうまくいったな。これからもよろしく頼む」

テイトボーイ、パパジー、アンジェリン「はい！　ボス！」

○チャイナタウン・日本語教室

三枝、授業を終えて帰ろうとしている。

エドナ、待っている。

三枝「マクドか？　今日は俺が払う」

○同・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

エドナ「ゲイカップルが子供を欲しがっている。なんとかなる？」

三枝「養子？」

エドナ「代理母が望みたいよ。1000万払ってもいいって聞いた」

三枝「代理母はやらない。リスクが多すぎるからな。1000万は魅力的だけど」

エドナ「一度会ってみない？　人工授精を何度も試みているレズビアンから聞いた話なの」

三枝「レズビアンも子供を欲しがっているのか？　会う価値はあるな。いつでもいいから会えるようセッティングしてくれ」

エドナ「わかった。次、いつ病院に来るかわからないけど、来たら話してみる」

○ トンド・パンケーキハウス

三枝、キカイ、食事している。

キカイ「仕事もうまくいってるみたいね」

三枝「ようやくね。やっとこのような店に来れるようになった」

アイナ、アラ、チョコが乗ったパンケ

ーキ、バナナスピリットとミルクシェ

イクを夢中になって食べている。

三枝「アイナとアラに自転車をプレゼントしたいのだからいいかな？」

アイナ、アラ、食べるのをやめ、お互いをつつきあっている。

キカイ「いいけど、もっと自分のためにお金を使ったら？」

三枝「使う気にならないんだ」

キカイ「ふーん、遊ぶのはやめたの？」

三枝「4年間遊びまくって、遊び疲れた。い

つかゴルフはしたいけど、他の遊びは興味がなくなった」

三枝、窓から外を見ている。

三枝「マニラの電線はぐちゃぐちゃだなあ、危なくない？」

キカイ「スパゲティワイアリングって呼ばれてて名物なんだけど、垂れ下がっているから下手すると感電する。停電も多いし、見た目も悪いし、最悪！」

三枝「電力会社が直さないの？」

キカイ「大統領も怒ってるよ、でもいつになることやら」

○ トンド・墓地・NPOオフィス

三枝、アンジェリン、話している。

三枝「未成年が産んだ子供を引き取ったことはある？」

アンジェリン「何度かある」

三枝「やっぱりな」

アンジェリン「といってもたいていは家族が

育ててるけどね、政府や支援団体が現金給付する制度もあるから」

三枝「未成年がレイプされて出産したんだ。

その父親が赤ちゃんを殺しかねない」

アンジェリン「最悪だよ！　それは！　預か

ってもいいけど、ボスならなんとかできる

んじゃない？　ダメなら私たちにまかせて」

三枝「そうか、考えてみるわ」

○トンド・墓地・パパジーの家

パパジー、ロメロ、イアン（男30）、

話している。

ロメロ「俺が余計なことをしゃべってしまい、

こいつがややこしいこと言ってきた」

パパジー「誰？」

イアン「ロメロの友達だ。ロメロはなぜ金が

もらえるんだ？」

パパジー「はー、こいつなに言ってるんだ」

イアン「俺にもくれて話なんだよ」

パパジー「ロメロ！　お前、何喋ってるんだ

よ」

ロメロ「すみません、お金がもらえたので自慢したくて、イアンは昔からのダチなんだけど」

パパジ「イアンとやら！、どこがダチなんだよ！ お前に渡す金なんか1円もない。帰れ！」

イアン「そんなこと言っているのか、警察に話すぞ」

パパジ「何を言っているのかわけがわからな
い。勝手に警察に垂れ込んだらいいだろうが！ 帰れ帰れ！」

イアン「覚悟しとけよ」

○ 同

翌日。

アイナ、神妙な顔つきで椅子に座っている。綺麗なドレスを着て、花冠を被り、ネックレス、ブレスレット、イヤリングを着けている。

メイリーン、アイナに化粧している。
キカイ、アイナにマニキュアを塗っている。

アラ、口紅で遊んでいる。

三枝、やってきて、目を見張っている。

三枝「どうした、何事？」

アイナ、ピースサインをしている。

メイリーン「サンタクルーズアんだよ、アイ

ナはサガラでパレードに参加するの」

三枝「サンタクルーズアンって何？」

キカイ「聖なる十字架の発見を祝うの」

三枝「ふーん、宗教行事なんだな。化粧が濃

くないか？ 何もしない方がかわいいの

に！」

メイリーン、アイナの化粧を終えて、

自分も化粧している。

パパジー、やってきて、

パパジー「おーい、お前も化粧？」

メイリーン「私だってたまには化粧したいわ

よ。働いてばかりだからね」

アイナ、笑いながら、三枝に手招きしている。

三枝、近寄る。

アイナ、三枝の頬にキスをする。赤い口紅がべつとり。

アイナ、メイリーン、キカイ、パパジ
ー、笑い転げている。

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、話している。

パパジー「ロメロのダチのイアンが警察に垂
れ込むとか、金をくれとか言ってきた。追
い返したけどまた来るだろうな。この件は
俺に任せてくれ」

三枝「一人で抱えきれなくなったら言ってく
れ、知らないふりはできないからな」

パパジー「ありがとう」

三枝「ところでな、未成年がレイプされて出
産した子供なんだが、未成年の母親の名前
は？」

パパジー、スマホを見ている。
パパジー「ジョバイ。年齢は14歳」
三枝「ジョバイと父親にそれとなく、養子に出してもいいか打診してくれないか？」
パパジー「一度、話してくる。うーん・・・」
ロメロが持ってきた話なので、イアンのこともあるし、ややこしくなるかもしれないな」

○同・大通り

女性たちがきらびやかなロングドレスを着て、行進している。
花束や十字架、聖母像を持っている。
アイナ、きりつとした表情で歩いている。

三枝、パパジー、メイリオン、キカイ、アラ、歩道から見ている。
三枝、スマホで撮影している。
アイナ、手を振っている。

第5話

○ トンド・パパジーの家

パパジー、ロメロ、イアン、警官2名、
話している。

警官1「お前か、子供を売ったというのは本当か？」

パパジー、平然としながら、

パパジー「何の話かさっぱりわからないけど」

警官1「マイキーという女性の子供を売った
んだろうが」

パパジー、下を向き、にやりと笑って
いる。

パパジー「何を勘違いしたのかようやくわかりました。マイキーねー。料理長に紹介しただけですよ。今は子供とマイキーと料理長とベビーシッターと一緒に住んでいますよ」

警官1、イアンを睨んでいる。

警官1「イアン、話が違うじゃないか」

イアン「子供を売って謝礼をもらったって聞いたんですよ。ロメロから」

ロメロ、顔をしかめて小声で呟く。

ロメロ「話を面白くしようとしただけ」

パパジ「女性を紹介したお礼をもらったただ

けですよ。俺の職業はポン引きなんでね」

イアン「マイキーに会いに行きましょうよ。

こいつらしい加減なことを言ってる。俺、

マイキーも子供も知ってるので」

警官1「そうだな。但し、マイキーと子供が

一緒にいたらお前、ただじゃすまないから

な」

イアン「こいつら電話するかもしれない」

警官1、パパジを指さして、

警官1「そりゃそうだ。お前！ スマホに触

るなよ」

パパジ「いいですよ。行きましょう。疑い

はすぐ晴れますよ」

○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン
ション・リビング

パパジ、ロメロ、イアン、警官2名、

ドアのそばに立っている。

マイキー、メロディ、メイド、ベビー
シッター、ひそひそと話している。

パパジー「マイキーさん、突然訪ねてきて、
ごめんなさい。イアンと警官が、マイキー
さんが子供を売ったと疑っています。事実
はそうではないことを証明するために連れ
てきました」

マイキー「売ったって？ ばかなことを！

同居しているだけですよ」

警官1「おい！ イアン、こういうことだ、親

子と一緒に暮らしているじゃないか！」

イアン「たしかにこの子はマイキーの子供で
す。ちくしょう！ ロメロがそんなふうに
言ったんですよ」

ロメロ「だから！ オーバーに言っただけだ
って」

マイキー、呆れている。

マイキー「イアンって嘘つきでいい加減。こ
んな奴の言うことを信じるなんてどうかし

てますよ」

パパジー、マイキーに向かって右手を軽く上げている。

警官1、ベビーシッターに向かって、

警官1「今の話、間違いはないか？同居しているだけなんだな」

ベビーシッター「はい、一緒に暮らしています。私が子供の面倒をみています」

警官1、イアンの顔を思い切り殴る。

イアン、頬を押さえながらへたり込んで
でいる。

194

警官1、「いい加減なこといいやがって、この馬鹿野郎。己の目で見て確認してから垂れ込んで来い！あーあ、時間の無駄だったな。俺たちは帰る」

警官2、帰り際にイアンを思い切り蹴っている。

警官2名、出ていく。

パパジー「マイキーさん、本当にすみません。

俺たちも帰ります。仲良く暮らしているん

ですね」

マイキー「湯野さんはお店では厳しいのに、メロデイにメロメロで、可愛がってくれています」

パパジー「それはよかった。おい！　ロメロ、帰るぞ」

ロメロ、ほっとした表情。

イアン、手で顔と腰を押さえながら、よろよろと出ていく。

○ L R T ・ 内

パパジー、ロメロ、座席に座り、話している。

イアン、離れたところに座り、じっとパパジーを見ている。

パパジー「ダチつてのは同じレベルでいるとずっと仲良くできるが、どっちかが抜け出すともう片方が妬む。今回はまさにそれだ」

ロメロ「迷惑かけてすみませんでした」

パパジー「イアンには気をつけろ！　ロメ

ロ！　またバカなことをしたら、お前とは縁を切るぞ」

ロメロ「もう誰にも何も話しません。凝りしました。イアンとも距離を置きます」

パパジー「それでな、話は変わるが、未成年が出産した件なんだが、ジョバイとその親父さんに会えないだろうか？」

ロメロ「まかせて」

○ トンド・墓地・内

三枝、歩いている。

セバスチャンからスマホに着信。

三枝、話している。

三枝「ご無沙汰しています、リムさんから聞きました。お嬢さんが結婚するそうですね。おめでとうございます。えっ？　今からですか？　1時間後には行けます。では後ほど」

○ トンド・三枝の家

ネルソン、中を覗いているが誰もいないので、パパジの家へ。

○同・パパジの家・前

アイナ、新しい自転車に乗っている。
アラ、補助輪のついた自転車に乗っているが、ふらふらしている。

ネルソン、惣菜を見ている。

メイリーン、客から金を受け取っている。

ネルソン「俺にも同じものをくれ、ライスも」

メイリーン「はいよ！」

ネルソン「新しい自転車が2台。おまえの家、
どんどん物が増えてるよな。100円で売
ってそんなに儲かるわけないだろう？ 日
本人やティトボーイとなんかやってるの
か？」

メイリーン「私に聞くな。パパジに聞け！」

ネルソン「日本人もパパジもいない。不思議なのは日本人の部屋を覗いたら貧乏なま

まだし、パパジだけが儲けてる。そうそう
テイトボーイも羽振りがいい」

メイリオン「お金でも拾ったんじゃない」

ネルソン「おかしいおかしい、みんな秘密に
しやがって」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス
チャンの家・リビング

豪邸。ガレージには14台の車。

セバスチャン（男55）、三枝、マスカ
ットを食べ、アイステイを飲みながら
話している。

セバスチャン、立っているメイドたち
に出ていくように促す。

メイドたち、出ていく。

三枝「ゴルフは相変わらず毎日ですか？」

セバスチャン「そうだよ。早朝に行き、昼に
は帰って事務所に出勤。何軒か中古車販売
店を回って帰る」

三枝「あいかわらず慌ただしい生活を送って

いますね」

セバスチャン「ははは、ゴルフを一人で回ると18ホールを1時間かからない。スピードゴルフが俺には合ってる」

三枝「あれは少しずるいですよ。だってパットを5m以内は入ったことにして打たないんだから」

三枝、小指を立てている。

三枝「女遊びのほうも？」

セバスチャン「もちろん。またパパジーに紹介してもらわなくては」

三枝「パパジーはポン引きをやめて、私の仕事に携わっています」

セバスチャン「ありゃー、それは残念。ところでな、今日来てもらったのは・・・リムさんから聞いたぞ。三枝は日本語の先生をやりながら、違法な養子の斡旋をしているのだな」

三枝「おっしゃる通り」

セバスチャン「わははは、堂々としてるな。」

それを聞いて頼みたいと考えた。我が家の家庭教師に養子をプレゼントしたい」

三枝「何歳ですか？ 女性？ 独身？ 国籍は？」

セバスチャン「確か40歳くらい、女性、独身でフィリピン人だ」

三枝「信用できる人ですか？ なぜ養子がほしいのですか？」

セバスチャン「信用できる。元教師で俺が引き抜いた。10年以上うちの子供や孫たちを見てもらっている。養子がほしいというのに理由なんてないだろう？」

三枝「確かに！」

セバスチャン「彼女の名前はクリス。小さいときに養子として養父母に引き取られた。今の仕事ができるのも養父母のおかげで、その恩返しがしたいらしい」

三枝「そういうことならお役に立てるかもしれません」

セバスチャン「ここにはベビーシッター、メ

イド、運転手もいるし、仕事中には子供の世話も心配ない」

三枝「問題はないと思いますが、万が一、虐待や育児放棄があればすぐに子供を引き取ります。子供が不幸になることは絶対に許せません。一度、クリスマスさんに会いたいのですが」

セバスチャン「よし！　また連絡する」

○ トンド・墓地・三枝の家

テイトボーイ、三枝、デレク、話している。

テイトボーイ「デレクがようやく話を持ってきた」

三枝「ほう」

デレク「何もしていなかったのにお金だけもらうのはさすがに気が引けた」

テイトボーイ「へー、お前でもそう思うのか」

デレク「子供は2歳の男の子で、お母さんはマリア」

x

x

x

（フラッシュバック）

マリア（女25）、彼氏と散歩している。

彼氏「お腹がだいぶ目立つようになってきたな。そろそろ結婚しようか」

マリア「はい、私でいいの？」

彼氏「お前もお腹の赤ちゃんも幸せにするよ」

マリア、顔が少し、曇っている。

マリアN「理想の彼氏だし、子供がいるなんて口が裂けても言えない」。

x

x

x

デレク「マリアは今の彼と結婚したいが、子供がいることを隠している。今更話せば破談になるから彼の子を妊娠したのを機に、この子を誰かに譲りたいと考えている。愛情をもって育てくれるなら、お金は必要ないということです」

テイトボーイ「子供を産んだら妊娠線が残るだろう」

デレク「残らない体質だったらいい。それで
余計に言い出せなかった」

三枝「ただで引き取るのはウインウインじゃない。うちとしてはお金を払いたい」

テイトボーイ「どうして？　ただで引き取って売れば丸儲けじゃないか」

三枝「そうかもしれないが、ただほど怖いものはない。これは俺の直観だけ」

テイトボーイ「ふーん、日本人らしい考え方だな。俺なら大喜びで甘えるけどな」

三枝「適正な利益があればそれでいい」

テイトボーイ「わかった」

三枝「売り先の見込みはあるから、写真と詳しい情報がほしい、金額は未定だけど、買うということと話を進めてもらえないか」
テイトボーイ「わかった。デレク！　俺も一緒に行くぜ」

○デイベソリア・ショッピングモール

三枝、キカイ、アイナ、アラ、モール

内を歩いている。

三枝、コーヒーショップの前で立ち止まる。

三枝「今日はキカイの誕生日だ。いつも世話になってるから、これで服とか買った方がいい。アイナ、アラにも何か選んでやってくれ。俺は買い物苦手なんで、コーヒーショップで待っている。いいか？」

三枝、キカイにお金を渡す。

キカイ、にっこり笑っている。

アイナ、アラ、大喜びして三枝に抱きついてる。

キカイ「うーん、いい誕生日。買い物に時間かかるけどいい？ 迷うし、このモールはフリーピンで一番安いと評判だし、なにせ広いから」

三枝「何時間でもいいよ。スマホで遊んでいるから、帰りにケーキとピザをかうよ」
キカイ「やったー」

アイナ、アラ、キカイの手を引っ張り

走っていく。

三枝、コーヒーを飲みながらスマホでゲームをしている。

スマホにエドナからの着信。

三枝「どうした？ 明日か？ レズビアンカップルとゲイカップルに一緒に会えるんだな。よし」

○ トンド・墓地・パパジの家（夜）

ケーキ、ピザ、コーラ、スパゲティ、ブランデー、フルーツが置かれている。

205

壁には K I K A Y H A P P Y B I

R T H D A Y ! の文字。

キカイ、アイナ、アラ、新しい服を着て、ポーズを取り、スマホで撮影している。

三枝、パパジ、テイトボーイ、デレク、ロメロ、奥で話している。

ロメロ、写真を見せている。

ロメロ「レイプされた未成年の母親の名前は

ジョバイ。男の子で生後6か月、体重は8kg、身長は70cm。活発でよく動き、寝返りもできる。子供を譲る気はないかと聞いたら、お父さんは大喜び。金額は5万とか10万の話ではないとだけ伝えたよ」

パパジー「父親はひどいアル中。子供を殺しかねないし、子供を売ったことをペラペラしゃべりそうなのが気になる」

三枝「こちらの身元はできるだけ隠して慎重に。といってもロメロは顔がばれてるんだな」

パパジー「うまくやらないと」

デレク、スマホの写真を見せている。

デレク「こちらは2歳の男の子で、母親はマリア。これが写真です。お金はいらないと言ったけど、支払うというと、まんざらでもなさそう」

テイトボーイ「早く話を決めてほしいと言われた。結婚相手に子供がいることが、ばれやしないかと冷や冷やしている。子供はお

腹をしよっちゅうこわすけれど、健康には
問題なし」

三枝「よし、まかせてくれ」

○同・モール・コーヒーショップ

翌日。

パパジー、テイトボーイ、アンジェリ
ン、デレク、ロメロ、コーヒー、フル
ーツソーダ、抹茶アイステイを飲みな
がら話している。

テイトボーイ「俺たちの代わりはいくらでも
いる。でもボスの代わりはいない。だから
ボスを絶対に守らなければならない。ボス
を刑務所に行かせたりしたら、このチーム
は即解散だろう」

パパジー「お前の言う通り。ボスがいないと
金が入ってこなくなる」

デレク「馬鹿な俺でもわかる。ボスを刑務所
に行かせないし、危ない目にあわせない。
俺が盾になる」

テイトボーイ「いい心構えだ」

アンジェリン「守るってどうするの？ 墓地に住む必要あるの？ お金も少しできたから、もっと安全な場所に引っ越してもらって、それからボディガードを雇うとかだわね」

デレク「俺がボディガードやってやる」

テイトボーイ「お前じゃ頼りにならない」

パパジー「ボスはここが気に入ってるんだ。

楽しいらしい、うちの娘たちと話してる
と癒されるとね。墓地から出て、一人暮らしは嫌がると思う」

ロメロ「俺が女性を紹介しようか？」

テイトボーイ「そういう話じゃない」

パパジー「一度ボスと話してみる」

○オルティガス・コンドミニウム・ドンナと
ラニーの部屋・リビング

ドンナ、ラニー、ビリー、キコ、座つて、ピーナッツを食べている。

三枝、やってくる。

三枝「初めまして、三枝です。子供のことでお伺いしました」

ラニー「ラニーです。彼女はドンナ。私のパートナーです。前にいるのがビリーとキコのゲイカップルです」

ビリー、ドンナに向かって、

ビリー「大喧嘩したのに、話を聞きに来いてのはどういう風の吹き回しだ」

ドンナ「あんな無茶なことをもう言わないと約束するなら今まで通り仲良くしたい」

ビリー「約束するわ。もう言わない」

三枝「なぜ喧嘩したのですか？」

ラニー「私たち二人に精子を提供して、出産させて子供を二人作り、分けようなんて言うから喧嘩になったんです。その代償が1000万」

キコ「わかったわかった。もうそれ以上喋るな。ずっとムカムカしてたんだから」

三枝「女性の気持ちを考えないで」

ドンナ「そうそう、わかってるな」

三枝「今日、お伺いしたのは代理母ではなく、養子なら斡旋できますということを伝えに来ました」

ラニー「養子ですか？」

三枝「そうです」

ドンナ「斡旋できる子供の写真とがありますか？」

三枝、スマホのデータを見せている。

ビリー、ドンナ、ラニー、キコ、スマホを次々に見ている。

三枝「2歳の男の子、この子は早く決めてほしいとせかされている。もう一人は6ヶ月の男の子、未成年がレイプされて出産してしまった子供です」

ビリー「レイプされて未成年が出産？ ひどい話だな！」

キコ「引き取る方も覚悟がいるな。こんなの決められない」

三枝「わかります。いつか養子を欲しくなっ

た時に私のことを思い出してくれればそれでかまいません」

ラニー「料金は？」

三枝「500万。売り手に会うことはありません」

ラニー「実績は？」

三枝「副市長に女の子を。五つ星のホテルの料理長にも女の子とかですね」

ラニー「お金持ちに売ってるんですね。信頼できそう。私は何度も人工授精、体外受精をしてるけどダメで、もう疲れちゃった。お金もたくさん使ったし」

ビリー「俺たちは自分の子供がほしい。だから養子は最後の手段だな」

三枝「フィリピンではゲイカップルやレズビアンカップルが正式に養子を引き受けることは法的に可能ですか？」

ドンナ「多分ダメ」

ビリー「俺もそう聞いた。だから誰かに俺の子供を産んでほしいのだ」

三枝「将来、子供が学校に通った時にお前のお母さんレズビアンだぞ！　どうやって子供を産んだ！　といじめられたりしないのですか？」

ラニー「いじめられるかもしれないけど、正直に話すしかないよね」

三枝「お金は大丈夫そうですね」

キコ「俺は大企業の取締役だし、ドンナはアメリカの企業との橋渡しをするBPOマネージャー。ビリーもラニーもそれなりに稼いでいる」

ドンナ「あんたはいいご身分だわ」

三枝「カップルになって何年ですか？」

ドンナ「15年かな」

三枝「それは素晴らしい」

ビリー「うちは8年だな」

三枝「仲は良さそうですね」

ラニー「たまに喧嘩するけどね」

ビリー「うちは喧嘩すらいふことがない」

ドンナ「それともどうかと思うわ？　どちらか

が我慢してるんじゃない」

キコ「俺が我慢している」

ビリー「嘘つけ！」

キコ「へへえ」

三枝「子供が将来ゲイになってもいい？」

ドンナ「嫌だね。男なら男らしい子に育てた

い。なよなよしたのは気持ち悪い」

キコ「やかましいわい！」

○ トンド・プール

三枝、キカイ、パパジー、メイリーン、

プールサイドで監視している。

アイナ、アラ、子供用プールで浮き輪

を使い、楽しそうに泳いでいる。

三枝「5月は暑い」

メイリーン「泳ぐのは今が一番」

パパジー「ボス！ みんなが心配しているん

だけど、ずっと墓地に住むつもり？ 病気

が怖いし、危ないやつもいるから安全なと

ころに引っ越しては？」

三枝「墓地がいい。アイナとアラを見ているだけで楽しいし、力が湧いてくる」

パパジ「そう言うと思ったけど、真面目に考えてみて！　ボスに何かあったら本当に困る。ボディーガードを雇うのはどうかな？」

三枝「必要ないだろう、誰も俺が金を持ってるとは思わない」

パパジ「そうだな、金はあるのにまったく使おうとしない。墓地に来てから自分の部屋に買ったものといえば、マットレスが一つ増えたぐらい」

三枝「それもアイナとアラが昼寝するためだからな」

パパジ「確かにそうだけど・・・」

三枝「大きいプールで泳いでくる。パパジも行こう」

三枝、パパジ、プールで泳ぎだす。

○オルティガス・キコの家・リビング

豪邸だが、乱雑でサンミゲールの空き
瓶やスナック菓子が散らばっている。

キコ、ビリー、ソファにもたれている。

キコの父親やってくる。

父親「おいおい、昼間からだらしやがっ
て、少しは部屋を片付けろ」

キコ、だるそうに立ち上がり、片付けてい
る。

父親「子供を欲しいんだって？」

キコ「あー聞いたのか？」

父親「やめとけやめとけ！ 母親がいないと

いうのは子供にとって不完全だし、子供が
いじめられて社会的に孤立するのが目に見
えている。教会もゲイカップルによる養育
は自然ではないと見なしている。それでも
育てる覚悟があるのか？」

ビリー「覚悟しています。ベビーシッター
も雇います」

キコ「ゲイでもきっちり子供を育てられると
証明したい」

父親「育児放棄とか、いい加減なことをして
いたら取締役を解任する！ この家からも
出て行ってもらうからな」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス
チャンの家・リビング

メイド、紅茶を注ぎ、クッキーを銀の
皿に盛っている。

セバスチャン、クリス（女40）、三枝、
話している。

クリス「初めまして。こちらで家庭教師をし
ているクリスです。突然社長が養子をくだ
さるとおっしゃったときは驚きました」

三枝、頷いている。

クリス「本当にありがたいです。精一杯育て
ます」

セバスチャン「三枝よ、斡旋してくれたら、
クリス先生はずっと家庭教師を続けてくれ
る。俺にとってもありがたいので、すぐに
まとめてくれ」

三枝「いつもはクリスマスさんがどういう人か詳しくお聞きするのですが、セバスチヤンの紹介ですし、真面目そうな方ですね」

○ トンド・墓地・NPO事務所・前（朝）

アンジェリン、バッグから鍵を取り出して、いる。ドアの横にエコバックが置かれて、いるのに気付く。かがんでバックの中を覗いてみると、赤ちゃんがタオルケットにくるまれている、すやすやと寝ている。メモが添えられている。

217

慌ててバックを抱えて中に入り、メモを読んでいる。メモには（T O N P O、I A P P R E C I A T E Y O U R H E L P）とだけ書かれている。タオルケットから赤ちゃんを取り出し、性別や健康状態を確認して、バッグの隅々まで調べている。赤ちゃんを抱きながら、しばらく考えている。意を決して、赤ちゃんをエコバックに

入れて飛び出していく。

○ トンド・墓地・パパジーの家・前

アイナ、アラ、フラフープをお腹に沿わせて回している。ふーふーと息を吐きながら、腰を一生懸命動かしている。アンジェリン、エコバックを抱えて家の中を覗いている。

パパジー、気が付いて、

パパジー「どうしたの？」

アンジェリン、手招きをしている。

パパジー、外に出る。

アンジェリン、バッグの中をパパジーに見せて、

アンジェリン「ボスがいないのでこちらに来た。事務所に赤ちゃんが置かれていた。生後1か月くらいじゃないかな？ 男の子だよ」

パパジー「えっ」

パパジー、バックの中を覗いている。

パパジー「どうする？」

アンジェリン「誰も見ていなかったからここに連れてきた。ばれたらクビだわ」

パパジー、顔を両手で覆っている。

パパジー「アンジェリンは大胆だなあ」

アンジェリン「うちの施設に持っていくより

こっちの方がいいもんね」

パパジー、苦笑いしながら、

パパジー「わかった。ひとまず預かる」

○サンタメサ・線路脇のスラム・ロメロの家・219

内

バラック、8畳ほどの広さ。ラタンのソファ、椅子がある。洗濯機、小さい冷蔵庫がある。

パパジー、赤ちゃんを抱いている。

ロメロ、ロメロの彼女カミール（女、

22）覗き込んでいる。

パパジー「この赤ちゃんを1か月預かってくれ！ 5万円置いておく」

ロメロ「どうしたの？」

パパジー「アンジェリンの事務所に放置されていた」

カミール「よっぽどの事情があっただね。

わーい、かわいい男の子じゃない」

ロメロ「預かるけど・・・」

パパジー、カミールを見て、

パパジー「彼女か？」

ロメロ「うん。同棲している。名前はカミール」

カミール、にこにこしている。

パパジー「夜、寝られなくなるぞ。2時間おきにミルクをやらないと泣きだす」

カミール「首は座ってる？」

パパジー「もうちょっとだな。目もまだぼんやりとしか見えていないはず」

ロメロ「病気になったら？」

パパジー「すぐに病院に行け、金は用意する」

イアン、そっとやってきてじっと見て
いる。

パパジー、イアンに向かって、中指を立てている。

パパジー「おい！　イアン！　目障りだ」

イアン「また金が貰えるのか！　その赤ちゃんは売るんだろう」

ロメロ「育てるんだよ」

パパジー「帰れ！　ぶん殴るぞ」

イアン、慌てて逃げ出す。

ロメロ「あいつ、いつもうろついてるから」

パパジー「余計なことはしゃべるなよ。カミ

ールさんもな」

カミール「はい、ミルクにパンパース、衣

類、おもちゃを買わなければ？」

パパジー「5万あれば足りるだろう。大変だ

ろうが1か月頼む。謝礼は渡すからな」

カミール「やったー、がんばる」

○ トンド・墓地・三枝の家・前

家の前でアイナ、アラ、友達、サンダ
ルを投げて道の上に置かれている缶缶

に当てている。

パパジ―、三枝、話している。

パパジ―「ボスがいなかったので、アンジェリンの事務所に放置されていた赤ちゃんをロメロのところへ1カ月間という条件で預けてきた。1カ月たって母親が名乗り出てこなければ、それからどうするか考えたらいいかと思って」

三枝「いい考えだ。ただロメロは世話できるのかな？」

パパジ―「カミールという彼女と同棲しているからなんとかなると思う」

三枝「カミールはやる気があるのか？」

パパジ―「やる気満々」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバスチャンの家・リビング

三枝、スマホの写真とデータを見せている。

クリス、セバスチャン、真剣に見てい

る。

三枝「一人目は生後6か月の男の子、この子はNPOに放置されていた。親が名乗り出てくる可能性があるので1か月は様子を見たい。二人目は2歳の男の子。母親が再婚したいので邪魔になっている。早く決めてほしいと急かされている。三人目は生後6か月の男の子で未成年の母親がレイプされて生まれた。3人とも健康状態は良好です」

セバスチャン、クリスに向かって、

セバスチャン「どうだい？」

クリス「3人共ほしい」

セバスチャン「一人にしてくれ」

クリス、スマホを何度も見ている。

クリス「未成年が出産した赤ちゃんを育てたい。最悪でしょう。生まれたときから不幸を背負っている」

セバスチャン「予想外だな」

クリス「この子を幸せにする」

三枝「健康には問題ないと聞いていますが、

念のためタンさんの病院で検査しましょうか？」

セバスチャン「どうするかな」

クリス「引き取ったあとで私が連れていきます」

セバスチャン「クリスがそういうなら」

三枝「決まったということでもいいのでしょうか、引き渡しについてはまた連絡します」

セバスチャン「決定だ、おう！ 頼む」

クリス、三枝とセバスチャンに背を向けて勝ち誇ったような不敵な笑みを浮かべている。

○トンド・パパジの家

アイナ、アラ、4人の友達。家の前に地面に長方形のコートを書き、パティンテロ（カバティに似ている）という遊びをしている。

メイリーン、キカイ、客の相手をしている。客が帰ったのを見て、パパジ

が話しかける。

パパジ「相談があるのだが、引っ越さないか？」

メイリ「メイリ、両手を前で組んで大きく目を開いている。」

メイリ「えっえっえっ」

パパジ「ボスを守りたい。ここに住み続けるのはやはり危ない。ところがボスは引っ越しを嫌がっている。俺たちも一緒なら、特にアイナとアラが一緒なら、喜んで引っ越ししてくれると思う」

メイリ「ボスのために引っ越しかあ。世話になっっているもんね。たしかに、なにかあったら困るよね」

パパジ「もちろん、引っ越し先でこの商売を続けていいし、もっとまともな店にしたら？　お金は出せる」

キカイ「いいんじゃない！　テイクアウトの店ならどこへ行ってもできるよ」

メイリ「味には自信があるからね。慣れ

親しんだ墓地ともお別れかあ」

○サンタメサ・ロメロの家・中

ロメロ、パパジ、テイトボーイ、話
している。

カミール、赤ちゃんを抱いている。

パパジ「気持ちよさそうに寝ているな。問
題はない？」

ロメロ「ミルクを吐くからびっくりするけど
ね。でも1ヶ月は長いなあ。俺は根をあげ
そうだけど、彼女ががんばっている」

テイトボーイ「カミールはベビーシッターに
なれるな」

パパジ「それでな、レイプされた未成年。
ジョバイだったかな、赤ちゃんの行先が決
まった」

ロメロ「ボスはすごいな。どんどん決めてく
る」

テイトボーイ「ロメロ！　今からジョバイと
父親に会いに行く。案内しろ」

ロメロ、カミールに向かつて、
ロメロ「行ってくる。赤ちゃんを頼む」

○同・ジョバイの家・中

狭い部屋。

パパジー、ロメロ、テイトボーイ、ジョバイ、ジョバイの父親、床に座って、話している。

テイトボーイ「N P O からきた。以前話したが、子供を引き取りたい」

父親、ジンをラッパ飲みしている。

パパジー「酔ってるな、大丈夫か？ 大事な話だから出直すか？」

父親、咳き込んでいる。

父親「ういー、ゲホゲホ」

テイトボーイ、ジョバイに向かつて、

テイトボーイ「お父さんはいつもこの状態か？」

ジョバイ「うん。私が嫌な目にあってから、ひどくなった」

テイトボーイ「君が母親だから、君と直接話してもいいのだが」

パパジー、眉をしかめている。

パパジー「未成年だろ、14歳だったよな。

どうしたのか？」

テイトボーイ「うーん、困ったな？」

ジョバイ「私が聞きます。お父さんはいつも酔っぱらっているから」

テイトボーイ、パパジーに向かって、

テイトボーイ「進めてもいいか？」

パパジー「なにかあれば俺が責任取るわ。や

ろう」

テイトボーイ、ジョバイに向かって、

テイトボーイ「以前確認したと思うが、子供を譲ってくれるか？」

ジョバイ「はい」

テイトボーイ「子供はいまどこに？」

ロメロ、手を挙げている。

ロメロ「俺が知っている」

ジョバイ「もう長い間会っていませんし、未

練もあります。お父さんとも子供の話はないようにしています」

テイトボーイ「では50万払う。それでいいか？」

父親、真顔になって、にじり寄ってくる。

父親「本当か？ 50万くれるんだな。ほほ、殺さなくてよかった。売ったあー」

父親、大笑いしている。

ジョバイ「お父さんもそう言ってるので、はい！」

パパジー、カバンから50万出してジョバイに渡そうとする。父親、あつというまに金を奪い取り、部屋の隅で数えている。

テイトボーイ、父親を憐れむように見ながら、ジョバイの耳元で囁いている。ジョバイ、目をパチクリしている。

テイトボーイ、立ち上がる。

テイトボーイ「じゃー俺たちは赤ちゃんのと

ころに行こう」

ロメロ歩き出す。テイトボーイ、パパジー、ジョバイ、ついていく。

父親、にたにたしながら、何度も何度も金を数えている。

○マラテ・キリノ・スターバックス

三枝、コーヒーを飲んでいる。

テイトボーイ、パパジー、赤ちゃんを抱いて入ってくる。

ロメロ、大きなカバンを持っている。

三枝、手を振っている。

3人、席に座る。

テイトボーイ「父親にはすでに50万支払った。酔っ払いだから心配だけど。まあジョーバイも了解済み。といつても未成年だからなあ」

パパジー「トラブったら俺が責任取る」

三枝「心配はいらないと思う。トラブルにならないように大金を払っている。じゃあ俺

はマカティへ行く」

ティトボーイ、ロメロに向かって、
ティトボーイ「ロメロ！　ついていけ！　ボ
スを守れ」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・ゲート
ロメロ、ゲートの横で、椅子に座り、
ガードマンと話している。

○同・セバスチャンの家・リビング
三枝、赤ちゃんを抱き、大きなカバン
を持っている。
クリス、笑いをかみ殺している。
セバスチャン、三枝から赤ちゃんを受
け取る。

セバスチャン「元気そうだなこの赤ちゃん。
三枝よ！　お前！　やるな、せっかちな俺
が驚くくらい、あつという間に持ってきてや
がった」

三枝「だらだらしていたら、怒鳴るでしょう」

セバスチャン、クリスに赤ちゃんを渡す。

セバスチャン「おい、クリス、プレゼントだ。大事にしろよ。タンさんの病院、予約しておくか？」

クリス、赤ちゃんを抱きながらじっと見ている。

クリス「ありがとうございます、大切に育てます。健康診断は急がなくても良さそうです」

セバスチャン「そうか」

セバスチャン、カバンを三枝に渡している。

セバスチャン「500万ある。ご苦労さん」

三枝、カバンを開けて確認している。クリス、後ろに下がり、三枝とセバスチャンが見ていないのを確認して、赤ちゃんを覗き込み、恐ろしい顔をしている。

○サンタメサ・メトロバンク・内

ジョバイ、銀行員の前で緊張して座っている。

テイトボーイ、パパジー、ロメロ、ジョバイの後ろに立っている。

銀行員「新規ですね。普通預金のお取引には最低1万3000円以上必要です。お持ちですか？ それと一口も見せてください」

ジョバイ、学生証を提示している。

テイトボーイ、カバンから金を取りだし、銀行員の前に置く。

銀行員「えっ」

テイトボーイ「250万あります」

銀行員「全部、普通預金にするのですか？

普通預金口座を作って、定期預金もされたいかがでしょうか。普通預金の利息は年1%未満ですが、定期にすれば年率4%ありますよ」

パパジー「全額定期はできますか？」

銀行員「普通預金がなければ定期預金口座を

作れないのです。普通口座に20万ほど入金して残りは定期というのはどうですか？」

ジョバイ「それでいいですが、通帳やATMカードは必要ありません。デジタル口座でお願いします」

銀行員「わかりました。スマホを貸してください」

ジョバイ、スマホを渡す。

銀行員「15分ほどお待ちいただけますか」

銀行員、スマホを操作し、IDをコピーし、パスワードを設定し、現金を数えている。

テイトボーイ、ジョバイに話している。

テイトボーイ「お父さんにはこのお金のことは内緒にしておくのがいいと思う」

ジョバイ、にこりと笑って、

ジョバイ「だからデジタル口座にしたの。通帳やATMカードを持っていたらすぐにわかってしまう」

ロメロ「おっ！　頭いい」

テイトボーイ「知られると全部酒代に消えて
しまうだろうな」

ジョバイ、頷いている。

テイトボーイ「君次第だが、このお金があればシニアハイスクール、カレッジにも行けるだろうし、行かなくても商売を始められる。辛い思いをして、お金をもらっても慰めにはならないかもしれないけど」

ジョバイ、みるみるうちに目に一杯、

涙を溜めている。

ジョバイ「本当にありがとうございます。ジ

ーザスは私を見捨てなかった」

ロメロ「いいこともあるだろ」

ジョバイ「ロメロ！　ありがとう」

ジョバイ、ロメロに抱きついている。

○L R T・内

パパジー、テイトボーイ、ロメロ、席に座っている。

ロメロ「あんなに感謝されたー、この仕事を

やってよかったー」

パパジ「ボスの言うことは正しいなあ」

テイトボーイ「この仕事が法律違反というのは納得いかないぜ」

パパジ「ところでな。相談なんだが、俺とボスは引っ越しするかもしれない。ボスが一人で引っ越すのを嫌がるから、俺の家族もつきあおうかと考えている」

テイトボーイ「俺も引っ越すかなあ。お金もまたもらえそうだし」

パパジ「テイトボーイは墓地にいてほしい」

テイトボーイ「そうだな、遠くには行かないでくれ！ 近くに引っ越してくれよ」

パパジ「そのつもりだ。ただなあ、ボスには一度断られているから、なんとか説得しない」と

第6話

○マカティ・クリスのアパート

広さは8畳ほど。質素な部屋。段ボールに本がたくさん入っている。大きな机の上にパソコンがある。

クリス、ベビーベッドに寝ている赤ちゃんを見て、けらけら笑っている。

笑い終わると、赤ちゃんの頬を何度もつねっている。赤ちゃん、目を覚まし、

大声で泣いている。

クリス「泣くなよ！　泣くたびにほっぺたつ

237

ねるからね。今はそれぐらいにしておくけど大きくなったらもっとひどいことをしてやる。真面目なふりをし続けた甲斐があった。セバスチャンはまんまと信じてくれた。

お前をいじめると仕事の憂さを晴らせる。けっ！　レイプされて生まれてきてここに来るとはお前はどれだけ不幸なんだ。私の養父母は私をずっと虐待していた。あの辛さを2倍にしてお前に味合わせてやる」

○ トンド・三枝の家・中

アイナ、アラ、三枝の背中に乗り、お馬さんごっこをしている。アイナ、三枝のお尻を叩いている。

スマホにビリーからの着信。

三枝、アイナとアラを降ろして、話している。

三枝「三枝です。あービリーさん、はい、すみません、レイプされて生まれた赤ちゃんは中古車ディーラーの方に先日お譲りしました」

三枝、しばらく聞いている。

三枝「はい、2歳の男の子は行き先がまだ決まっています。もう一人の放置された6ヶ月くらいの男の子の情報を送ります」

アイナ、アラ、マットレスの上でゴロゴロしている。

○ トンド・不動産屋・内

キカイ、座っている。

事務員、話している。

キカイ「メイン道路に面していて、1階でテイクアウトの店を営業できて、2階が住居、そんな物件ありますか？」

事務員「賃貸ですか？」

キカイ「はい」

事務員「2階は3DKぐらいですかね」

キカイ「3部屋か4部屋あれば」

○トンド・三枝の家・中

三枝、お金を配っている。

パパジー、アンジェリン、テイトボー

イ、ロメロ、デレク、踊っている。

三枝のスマホにドンナから着信。

三枝、スマホの画面を確認して、右手を上げ、前後に振る。

三枝「騒がしいのはストップ」

全員踊りをやめる。

三枝、スマホに話す。

三枝「三枝です。あードンナさん、そうです

か、では明日伺います」

三枝、スマホを終えて、全員に話す。

三枝「デレクの見つけてきた男の子が決まるかもしれない。明日、行ってくるわ」

パパジー、テイトボーイ、アンジェリン、デレク、ロメロ、気が狂ったように踊っている。

アイナ、アラも加わってますます派手に踊っている。

三枝、笑いながら、やけくそで踊りに加わっている。

240

○同・墓地・内

テイトボーイ、三枝、歩いている。

麻薬中毒者がうつろな目で近づいてくる。手にナイロン袋をぶら下げている。テイトボーイ、身構えている。

麻薬中毒者、ナイロン袋を突き出す。

麻薬中毒者「おい、日本人、貧乏なんだろ、これ食うか？」

テイトボーイ、麻薬中毒者の前に立ち
塞がっている。

テイトボーイ「そばに来るな、ジャンキー野
郎」

麻薬中毒者「うるせー、お前に話してるんじ
ゃない」

麻薬中毒者、さらに三枝に近づく。
テイトボーイ、麻薬中毒者の後頭部を
掴み、三枝から引き離している。右手
の拳を強く握り締め、

テイトボーイ「殴りたいのか」

麻薬中毒者、ぶつぶつなにか言いなが
ら離れていく。

テイトボーイ「ボス、やっぱり引越した方
がいい。ここにいては何が起こるかわから
ない」

三枝「ジャンキーに貧乏人って認められてい
るくらいだから、大丈夫だろ」

テイトボーイ「せめて、一人で歩くのはやめ
てほしい」

○オルティガス・コンドミニウム・ドンナと
ラニーの部屋・リビング

三枝、ドンナ、ラニー、パイナップル
ジュースを飲みながら、豚の皮の揚げ
物をつまんでいる。

ドンナ「2歳の男の子を引き受けようか迷っ
ています。相談したくて」

ラニー「私はもう少し、体外受精を試みます
が、ドンナをいつまでも待てせるわけには
いかないの」

三枝「体外受精が上手くいくといいですね」

ドンナ「男の子はなにか問題ありますか？」

三枝「母親の身勝手ですね。結婚したいから、
前の彼との子供はいらないという」

ドンナ「そうなんだ」

三枝「お腹はよくこわすそうですが・・・」

ドンナ「たいしたことじゃないですね。子供
ならよくあることでしょ」

三枝「迷っているのは何が原因ですか？」

ドンナ、うつむきながら、

ドンナ「お金です。500万は高い。安くなりませんか？」

三枝「それはできません。買い手も喜ぶ、売り手も喜ぶ養子斡旋をしたいのです。それに違法ですので、私たちは刑務所に行く覚悟でやっています。どうかご理解ください」

ラニー、ドンナをたしなめている。

ラニー「赤ちゃん産んでくれたら1000万払うって言われて、安すぎると怒ってたじゃない！500万で赤ちゃんをもらえるのよ。高いじゃなくて安いわよ」

ドンナ、大笑いしている。

ドンナ「そうよね、ラニーにはまいった」

三枝、鼻の下をこすっている。

三枝「安いなんて、初めて言われた」

ドンナ「それに赤ちゃんを貰うと今の二人だけの生活が大きく変わるでしょう？今まで仲良くやってきてラブラブなのにねー。関係が壊れたらどうしよう？」

ラニー「子供が増えても私のドンナに対する

気持ちは変わらないわよ。ずっとラブラブ」

ドンナ、両手をあげて伸びをし、ラニーを抱きしめる。三枝を見て、

ドンナ「そうですね。納得です」

ドンナ、ラニーの手を握り、

ドンナ「決めてもいい？」

ラニー「ふんざりがついたの？」

ドンナ「いつまでも迷っていても意味ないでしょ。その間にも子供はどんどん大きくなっていく。貰うなら早い方がいいでしょう。買い物と同じかな、衝動買いしちゃうのよね」

ラニー「物じゃないでしょう」

ドンナ「ラニーもがんばって産んで？ それ

で、赤ちゃんを二人育てよう」

ラニー「そうなるといいな」

三枝、カバンからハンディファンを出し、スイッチを入れ、顔に風をあてている。

三枝「思い切りのろけましたね。暑い暑い。

わかりました。2歳の男の子ですね。早速手配します」

○ トンド・墓地・NPO事務所（朝）

アンジェリン、ドアに鍵を差し込んでいる。視線を感じて振り返る。

不安そうな女性、アンジェリンが振り返ったのを見て、慌てて帰ろうとする。

アンジェリン、呼び止める。

アンジェリン「何か御用があったのでは？」

女性、おどおどしている。

女性「いえ、何も」

アンジェリン「もしかして、赤ちゃんをここに置いたお母さんでは？」

女性、後ろに下がろうとする。

アンジェリン「あなたですね。怒りませんか話だけでも？」

女性、体を小刻みに揺らしながら、細かい声で尋ねている。

女性「赤ちゃん！ 無事ですか？」

アンジェリン「もちろん！　元気ですよ。安全なところで預かっています」

女性、ほっとした表情。

女性「よかった。これで思い残すことはありません」

女性、猛スピードで走っていく。

アンジェリン、追いかける。

アンジェリン「待って」

女性、振り返らず、去っていく。

アンジェリン、追うのを諦めて、茫然と見送っている。

246

○イントラムロス・マニラカテドラル

宮殿のような雰囲気。荘厳な結婚式。

大量の花や天井から吊るされたシャンデリア、多数の参列者は伝統的な衣装、豪華な衣装を纏っている。

セバスチャン、新婦をエスコートして中央を歩いている。

リム、三枝、タン、湯野、結婚式に参

列している。

三枝、リムの隣に座り、小声で話している。

三枝「赤ちゃんは元気？」

リム、にこにこしながら、小声で、

リム「元気だ。ヴィルマとドンドンでは寝不足気味だけど、協力して大事に育てている。

子供がいると日々の会話がが増えて、共有する時間が豊かになっていく。夫婦仲が戻った」

三枝「それはよかった」

247

リム「どんな子に育つのか楽しみでしかない」
三枝「ところであのホームレス夫婦がまた産んだら引き取ってくれるかと打診してきた。まだ妊娠はしていないけど、味を占めたようで」

リム、思わず吹き出すが、周りの目を気にして、さらに小声で話す。

リム「おおおお、あんなに産むのを嫌がっていたのに。ははははは、変われば変わるも

のだ。兄弟がいるほうが子供にとってもいいというのはよくわかっている。妊娠したら知らせてくれ。ヴィルマにも聞いておくが、多分喜ぶと思う」

三枝の後ろに座っていた湯野、三枝の肩を叩く。

三枝、振り向く。

湯野「俺にも、もう一人くれ」

三枝「湯野さん、いくらなんでもそれは無理だ。同居しているのだから、マイキーさんが産むしかないでしょう」

湯野「そうだよな、マイキーに産んでくれと

頼んでみるけど・・・」

新郎新婦が体中に紙幣を張り付けられている。

湯野、リム、三枝、立ち上がり、新郎新婦の体に紙幣を張り付けている。

三人、席に戻って、

湯野「いやいや、俺からは話しづらいな。アンジェリンさんにそれとなく頼んでみる。」

女同士なら嫌味がない。三枝よう、子供がいると早く仕事を終えて帰りたいと思う。今、俺はすごい幸せなんだ」

湯野、手を叩く。

湯野「そうだ。パパジーの子供たちを連れて海に行かないか？　今は夏休みだし、暑いし」

リム、振り返る。

リム「俺も行くぞ。孫たちを連れてな。バスをチャーターするから、みんなでスービツクなんかどうだい？」

三枝「アイナもアラも喜ぶ。行こう！」

○同・入り口

セバスチャン、三枝、タン、キム（男55）新婦を見ながら、立ち話している。

三枝「キムさん、おひさしぶり」

キム「おい、三枝、妙な仕事を始めたんだってな。けっこう噂になってるぞ」

三枝「良い噂？」

キム「概ねな。言っとくけど俺は子供はいらない。子供がそばにいるだけで頭が痛くなる。やさしくするとすぐつけあがるし。嫁も子供は諦めて遊び歩いてるわ」

三枝「ははは、あるある。仕事は順調？」

セバスチャン「フィリピンに韓国人が大挙して遊びに来るから、韓国食材のスーパーを次から次に開店させて大儲けしてやがる。ダバオ空港内にも立派な店を作ったんだよな」

キム「おう、日本の食材も置いてるんだ。でもたいして売れないから賞味期限がオーバーしてしまふ。もう日本食材はやめようと思うので、ごそつと送ってやるわ」

三枝「嬉しいような、妙な気分」

セバスチャン、三枝の脇腹をつついて
いる。

セバスチャン「三枝、ちよつと気になることがあるんで暇なときに遊びにきてくれ。ど

うもクリスの様子が変なんだ」

三枝、首をかしげている。

○オルティガス・コンドミニウム・ドンナと
ラニーの部屋・リビング

三枝、男の子をベビーカーに乗せて入
ってくる。

ドンナ、ラニー、目を大きく開け、両
手を広げて、駆け寄る。

三枝、ベビーカーから降りして、ドン
ナに男の子を渡す。

ドンナ、抱きあげる。

ラニー、ドンナの肩を抱き、微笑みな
がら見ている。

三枝、出生証明書を渡している。

三枝「これがこの子の出生証明書です」

ラニー、受け取って、見ている。

ビリー、キコ、入ってくるなり、ドン
ナのそばへ、

ビリー「おおお」

キコ「ドンナ、ラニー、おめでとう」

ドンナ、男の子に頬ずりしている。

ドンナ「ありがとう」

ラニー「歩ける？」

ドンナ、男の子を降ろして立たせている。

男の子、キヨロキヨロしながら歩いている。

ラニー「わー可愛い」

ドンナ「元気に育ってよ。健康ならゲイにな

252

っても許してあげる」

キコ「なんだよ、それ！」

ドンナ「できれば頭のいいマツチヨがいいけ

どね」

ラニー「私も精いっぱい手伝うから」

ドンナ「ラニー、よろしくね」

○パヤタス・デレクの家

テイトボーイ、パパジー、デレク、マ

リア（25）、話している。

机の上に300万置かれている。

マリア、おののいている。

マリア「もらい過ぎだわ。私のわがままなんだから」

ティトボーイ「わがままってわかってるんだ」
デレク「嬉しくないのか？ 貰っとけ、困るものじゃないだろう」

マリア「それはそうだけど、いくらなんでも300万って？ 良くないことが起こりそう」

パパジー「じゃあ教会にでも寄付したら？

君がどう使おうと自由だ」

マリア「そうだよ。考えてみる。ありがとう」

マリア、札束から30万抜き出してデレクに渡している。

マリア「あんたたち、貧乏くさい。どうせ安い給料で働かされているんでしょう。これで何か買ったら？」

デレク、目を見張っている。

デレク「これってチップ？」

マリア「そうだよ。急かしたのに、完璧に仕事をしてくれたから、おかげでようやく彼と結婚できる。せめてものお礼」

デレク、パパジーとテイトボーイをじっと見ている。

パパジー「使い道はあなたの自由。それならもらっとくわ」

デレク、テイトボーイ、にやけながら指を鳴らしている。

デレク「幸せにな！ お腹の子供は売るなよな」

マリア「嫌なこと言わないで」

○チャイナタウン・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

三枝、封筒を渡す。

エドナ、封筒の中を覗いている。

エドナ「何ですか？ このお金？」

三枝「君が紹介してくれたレズビアン夫婦に

赤ちゃんを幹旋した。そのお礼が30万」

エドナ、口も目も大きく開けて、両こぶしを握り締めている。

エドナ「ええっええっえっ、信じられない！ 3

0万って！！！　ワォー超ラッキー」

エドナ、立ち上がり、三枝に抱きついて
いる。

三枝、嫌がっている。

三枝「ちょちょちょ、みんな見ている。恥ずかしい」

エドナ「いいじゃない。喜びは分かち合わなくては。また紹介するよー」

三枝、エドナを押しつけながら、

三枝「よろしく頼む」

○トンド・墓地・三枝の家

三枝、お金を配っている。

パパジー、テイトボーイ、デレク、ロメロ、アンジェリン、踊っている。

パパジー「マリアがチップだと言って10万

づつくれた。もらってよかったのかな？」

三枝「そりゃーついてたな」

デレク「さらにこんなに貰っていいの？」

テイトボーイ「お前がもってきた案件だろ、それくらいもらうとやったって気になる」

アイナ、アラ、走りこんできて、一緒に踊っている。

○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマンション・リビング

湯野、メイド、ベビーシッター、料理を作っている。

アンジェリン、マイキー、話している。メロディ、小さなピアノで遊んでいる。

マイキー「アンジェリンは湯野さんが休みと聞いたら遊びに来るのね」

アンジェリン「だって美味しいんだもん。日本料理ってすごく綺麗。湯野さんのお店で食べたのが初めてだったの。三枝さんはご馳走してくれないし」

キッチンから湯野が振り向いて、
湯野「アンジェリンさん、大歓迎だからいつ
でも私の休みの日に来てください」

アンジェリン、マイキーの肩をパチン
と叩く。

アンジェリン「お世辞でも嬉しい」

アンジェリン「湯野さんがもう一人、子供が
欲しいって？　それであたがもう一人産
んでくれないかなって？」

マイキー「えー、彼氏いないのに産めるわけ
ないじゃん」

アンジェリン「湯野さんとはダメなの？」

マイキー「私にまったく触れようもしない。

魅力ないのかなー」

アンジェリン「そんなことないわよ。あなた
には手を出さないって最初に変な約束した
じゃない。きつとそうよ。それを頑なに守
っているだけ、誘惑しちやえば？」

マイキー体をよじっている。

マイキー「うううー」

アンジェリン「湯野さんのベッドに潜り込んで
だらいいだけじゃない」

マイキー「言うのは簡単！　できなーいー」

アンジェリン「湯野さんは紳士だからね。あ
なたが迫るしかないわ。世話になってるん
でしよう。湯野さんのために子供を産んで
あげて」

マイキー「ふーーー」

アンジェリン「ふふふ、ところでカナダには
行くの？」

258

マイキー「行く気が失ってしまった。カナダ
ってお金のためだけだったから。子供を売
ろうかなんて思ったことをすぐ後悔して
いる。母親として最低だった。湯野さんが
生活費としてポンとお金を渡してくれるし、
今の生活に大満足。もうカナダに行く意味
がまったくなくなった。湯野さんは俺が死
ぬまで、いつまでもここに住んでいていい、
なんて言ってくれているの」

アンジェリン「ありゃー」

○ トンド・墓地・テイトボーイの家・前

テイトボーイ、若者2人、椅子に座っている。

ビログ（男6）、通りかかる。

テイトボーイ、ビログを呼び止める。

テイトボーイ「おい、ビログ！ お前、少年

ギャング団に入ろうとしているな」

ビログ「うん、だってお菓子をくれるし、ごはんも食べさせてもらえるもん」

テイトボーイ「母親はなんと言ってる？」

ビログ「お金を稼いで来いって」

テイトボーイ、ビログの胸を軽く叩き、やりきれない表情。

○ 同・NPO事務所・内

アンジェリン、パソコンを操作している。

スタッフ、男の子（4歳）を連れて来

る。

スタッフ「聞いていると思いますが、この子、
両親が二人とも強盗犯に殺害され、孤児に
なってしまった子供です」

アンジェリン、立ち上がって、

アンジェリン「聞いています。了解しました」

○同・三枝の家

アイナ、アラ、小さな机の上で絵を描
いている。

三枝、じっと見ている。

アンジェリン、男の子を連れてやって
くる。

三枝、顔をあげる。

三枝「どうした？」

アンジェリン「この子、両親が強盗犯に殺害
され、孤児になってしまったの。施設に連
れて行けという命令だったんだけど、なん
となくこっちに来ちゃった」

三枝「胸が痛む。でもこの子が施設に行くこ

とを、みんな知ってるんだろう」

アンジェリン「うん」

三枝「アンジェリン、やりすぎだぞ。大問題になるだろうが、さっさと施設に行け」

アンジェリン「さすがにダメか、残念」

三枝、アンジェリンの背中を押している。
る。

アンジェリン、体を伸ばして踏ん張り、
立ち止まる。

三枝「どうした？」

アンジェリン、親指を口に銜えている。

261

アンジェリン「これってー、私たちがNP
Oを立ち上げたらいいんじゃないの？」

三枝「はあー、なんだよ、突然」

アンジェリン「だってそうでしょ。自分たちのNP
Oがあって、自前の事務所や施設があれば、正規の養子
斡旋も、違法な養子斡旋もできるじゃない？」

三枝「NP
Oを立ち上げるって？ できるのか？ やり方を知らない」

アンジェリン「事務所に資料がある。できると思う」

三枝「誰かに相談した？」

アンジェリン「ううん？　今、思いついたの。絶対仕事しやすくなると思わない？」

三枝、頭を振っている。

三枝「わかるけど・・・」

アンジェリン「パパジーやテイトボーイだって、職業は何って聞かれたとき、違法な養子斡旋とは言えないじゃない。でもNPOで働いているなら大きな声で言える」

262

三枝、顎の肉を引っ張っている。

三枝「たしかに体裁はいいけど。問題は資金だよな。どれくらい必要なのか見当もつかない。今、プールしてある現金は400万ほど。足りないだろうな」

アンジェリン「資金は集めるものでしょう」

三枝「ははは、簡単に言うじゃないか」

アンジェリン「なるようになるでしょう」

三枝「まあ俺も調べてみるわ。アンジェリン

はパパジーたちとも話し合ってくれ。それはそうと、さっさとこの子連れていけ！」

アンジェリン「あちゃー」

アンジェリン、あへあへのポーズをしながら、子供の手を引き、走っていく。

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバスチヤンの家・リビング

セバスチヤン、三枝、ココナッツジュースを飲み、キャッサバケーキを食べながら話している。

セバスチヤン「クリスマスなんだが、赤ちゃんを引き取って、わずか3日で、夜泣きがひどくて眠れないから、預かってくれと言ってきた。それでうちにいる」

三枝「育てる気がないということ？」

セバスチヤン「夜泣きが収まったら、引き取るらしい」

三枝「1年か2年間、預かるということですね」

セバスチャン「そうなるな。うちは使用人も大勢いるから何の問題もないのだが、気になることがある。赤ちゃんの頬が赤くなつて少し腫れていたのだ。もしかしたら殴つたか、引つ搔いたのではないか？」

三枝「クリスは何と言ってますか？」

セバスチャン「顔をタオルで強く拭き過ぎたと」

三枝「うーん、微妙ですね。医者に診てもらうしかないでしょう」

セバスチャン「タンさんの病院に連れて行つたんだが、はつきりとはわからなかった。今は腫れも引いてなんともない」

三枝「はあ」

セバスチャン「うちで預かってから何日かたつのに、クリスは赤ちゃんに会おうともしない」

三枝「そうなんですか、家庭教師の仕事は真面目にやっているのでしょうか」

セバスチャン「それは完璧」

三枝、首をかしげている。

三枝「ますますわからなくなってきた」

セバスチャン「現状を知ってくれていたらいい。まあ夜泣きはいずれなくなるだろうからそれまで、預かっておくつもりだ」

三枝「もしなにかあれば赤ちゃんはいつでも引き取りますが、売り手には何の落ち度もないし、すでに支払ってしまったているので返金是不可能的なのですが」

セバスチャン「返金してくれなんて言わないから心配するな」

265

○ トンド・賃貸物件

キカイ、パパジー、不動産屋と物件を見ている。

アイナ、アラ、お互いの顔をいじって変顔を作りあい、笑い転げている。

物件は2車線の道路沿いで、1階は店舗用、2階は4部屋、トイレ、バス。パパジー、不動産屋と話している。

不動産屋「家賃は5万円、前払い金は3ヶ月」
パパジー「築何年？　古いなあ、改装しなく
ちゃ。その費用がかかる」

不動産屋「築15年です」

パパジー、キカイを呼ぶ。

パパジー「おいキカイ、どう思う？　メイ
リーンは見たのかな？」

キカイ「メイリーンはここが一番気に入って
た。私もそう！　イートインもできるし、
人通りも多い」

パパジー、アイナとアラを見ながら、

パパジー「そうか、アイナ！　アラ！　ぶさ
いくな顔だな。ここに住みたいか？」

アイナ、アラ、笑いながら、

アイナ、アラ「うん」

パパジー「ボスがここに一緒に住んでくれな
いかな」

アイナ「私がボスと一緒に住もうってお願い
する」

○同・墓地・三枝の家

三枝、パソコンでフィリピンのNPOについて調べている。

アイナ、やってきて、三枝の横にちょこんと座る。

アイナ「ボス！ここを出て一緒に住もう」

三枝「なんだい、突然」

アイナ「私と一緒に住むのは嫌？」

三枝、アイナのおでこを人差し指でつついている。

三枝「パパジーに頼まれたな。でもアイナと

アラにいつも会えるなら、いいよ」

アイナ、ピョンピョン飛び跳ねながら、帰っていく。

○同・墓地・小さなコーヒーショップ

アンジェリン、テイトボーイ、パパジー、粉末ジュースを紙コップに入れ、水と氷を入れて飲んでいる。

アンジェリン「今の仕事は順調でしょう。さ

らに良くするためにNPOを設立しようか
という相談です」

パパジー「難しそうな話だな。ポン引きの俺
にはついていけない」

テイトボーイ「設立の仕方とか、どうやって
運営するのか、まったくわからないが、何
度か俺はNPOだと偽って交渉してうまく
いったから、賛成だ」

アンジェリン「ボスは資金の問題で頭を悩ま
せているようですが、概ね賛成してくれて
いると思っています。パパジーさんが賛成
してくれるなら、一気に話が進みそうです」
パパジー「俺はボスがやると言えばやるだけ
さ」

○同・墓地・テイトボーイの家・前

テイトボーイ、ブログの母親リガヤ（女
34）、椅子に座り、話している。

若者2人、立って見ている。

テイトボーイ「ブログが少年ギャング団に入

ろうとしている。止めないのか、あんなにいい子なのに」

リガヤ「いいとは思わないけど、うちは子供が3人いて、食べるのに精いっぱい。ブログがギャング団から食べさせてもらえるならありがたい」

テイトボーイ「ブログを学校には行かせないつもりか？」

リガヤ「行かせてやりたいけど、出生証明書もないし、学校は無料だけど、制服や教科書は買えないし、交通費もない」

テイトボーイ、両手で顔をこすっている。

テイトボーイ「ウワー、出生証明書がないのか、どこまでいい加減なんだ。それじゃあブログがあまりにも可哀そう。それならいっそ俺に預からせてくれないか、学校くらい行かせてやるし、飯もたらふく食わせてやる」

リガヤ「あんだ！偉くなったつもりか！

やんちゃなことばかりしてたくせに！ 預かるって？ あんたの子供にする気かい？」

テイトボーイ「それが嫌なら、金持ちに養子として出すってのはどうだ？ たんまり貰えるぞ。但し、一生ブログとは会えなくなるけど」

リガヤ「たんまりってどれくらい？」

テイトボーイ「引き取り手が見つかるかどうかわからないから確約はできないけど、うまくいけば300万」

リガヤ「300万！ それはすごい。けど、

私はブログが大好きだから、そんな子売ってお金を貰ったって嬉しくない」

テイトボーイ「学校も行かさない、ギャング団に入れば、将来刑務所を行ったり来たりするのは目に見えている。親としての責任も果たさず、いいかっこうしてるんじゃない。えよ。ブログのことも考えてやれ、今ならまだ間に合う」

リガヤ「あんたの言う通りだけど、売るのは

嫌だ」

テイトボーイ「それなら俺に預けろ、飯も食
わせる。学校にも行かせる。勝手に売った
りしないからいつでも会える。よく考えろ」
リガヤ、立ち上がり、顔をしかめなが
ら立ち去る。

○ トンド・賃貸物件

メイリーン、三枝、パパジー、物件を
見ながら話している。

アイナ、アラ、階段をあがったり下が
ったりして遊んでいる。

三枝「メイリーンはここでいいの？」

メイリーン「うん、何とかなりそうだけど、
改装の費用がいくらかかるか心配」

三枝「アイナに頼まれたら嫌だなんて言える
わけない。俺はここに住んでいいよ」

アイナ、パパジーの横に来て、ハイタ
ッチしている。

メイリーン「決まりね」

パパジー「改装が終わったら引っ越ししよう」

アイナ、アラ、喜んで抱き合っている。

○ トンド・NPO事務所（夜）

アンジェリン、ホワイトボードの横に立ち、説明している。

三枝、パパジー、テイトボーイ、ロメロ、デレク、座りながら聞いている。

カミール、赤ちゃんを抱いている。

アンジェリン「夜は誰もいないので今日だけ

ここで会議をします」

ホワイトボードに書かれている内容。

新規NPOの活動――

孤児や虐待を受けた子供たち、

ストリートチルドレンを施設

で保護し、教育やカウンセ

リングも行う。

組織図――理事長、三枝

理事、5名

支部統括、パパジー

資金調達、三枝

財務、未定

事業推進、テイトボーイ

事務、アンジェリン

広報、ロメロ

登録——フィリピン証券取引委員会

（SEC）で法人登録

必要書類——定款、発起人情報

許可——地方自治体

資金調達——クラウドファンディング、

寄付

銀行口座の開設——

支援者——SNS、イベント、広報活動

児童養護施設、本部、支部の開設

パパジ——「難しい、俺の頭では理解不能」

ロメロ「ギブアップ、広報って何をするの？」

デレク「もっとわかりやすく説明してくれ」

カミール「私はここにいてもいいの？　いき

なり難解な話でわけがわからない」

三枝「バカばかりや」

アンジェリン「書類作成や登録など難しいことは私がやります」

テイトボーイ「頼りになる」

三枝「ひとついいか！ 活動内容なんだがストリートチルドレンを保護する。これをトップに掲げたい、もちろん虐待された子供も孤児も引き受けるけどな。主張がわかりやすいのは一番だと思う」

パパジー「おっ、それは気に入った」

テイトボーイ「支部もあちこちに作るんだろう？ 児童養護施設を作って子供の面倒を見る。相当、お金がかかりそう」

アンジェリン「まさにそこが問題だけど、ボスが何とかしてくれる」

三枝「簡単に言うな！ 手持ちは400万あるが、到底足りない。まずはクラウドファンディングをやる」

ロメロ「GAVAがいいな。寄付を集めるならこのサイト」

三枝「おっ、さすが！ ロメロはブログや

S N Sをやっているのか？」

ロメロ「やっていたけど、今はやめている。

仕事内容を発信できなかったから」

パパジー「そりゃそうだ。でもN P Oならば
ンバン発信できる」

ロメロ「作ってみる。できたらみんなに見せ
るから」

三枝「それからな、N P O理事長は辞退した
い。財務はやってもいいのだが」

パパジー「なぜやらない？」

三枝「日本で犯罪を犯しているから目立ちた
くない」

アンジェリン、身構えている。

アンジェリン「人を殺したの？」

三枝「そんな根性はない！ 横領だ。パパジ
ーがすべて知っているから聞きたければど
うぞ」

アンジェリン「えっえっ、横領した犯人が財
務って、笑っちゃう」

ティトボーイ「昔の話だろ。ずっとボスはお

金を管理していて、無駄遣いもせず、きちんとやっている」

アンジェリン「私も信じてるよ」

三枝「もうひとつあった。俺は不法滞在なんだわ」

テイトボーイ、げらげら笑っている。

テイトボーイ「うーん。納得！　ボスは理事長にはなれない」

アンジェリン「ボス！　いい加減すぎる。ビザ取って、ちゃんとして！」

パパジー、会話を遮って、

パパジー「そうか、じゃあ誰が理事長になる？」
アンジェリン「ボス以外に考えられない。みんな若いし、バカばかりだし」

テイトボーイ「そうだよな、俺たちじゃ無理だ。誰か探さなきゃ」

デレク「俺がやるのか？」

全員「うるさい！」

○チャイナタウン・日本語学校

三枝、日本語で教えている。

生徒は8人。

三枝「今日は老人ホームでの入浴介助の手順をやります。まずは入浴前に血圧。脈拍、体温を測定します」

x x x

エドナ、三枝、並んで出ていく。

○同・マクドナルド・内

エドナ、三枝、食べながら話している。

エドナ「先日はありがとう。あのお金はすご

く助かった」

三枝「親には渡していないだろうな」

エドナ「1万だけあげた」

三枝「まあいい、それで何？」

エドナ「うちの患者なんだけど」

○（回想）B G C・病院・産婦人科

医者、説明している。

エドナ、立っている。

シオニ（女28）、椅子に座り、聞いている。

ミラー（男46）シオニの肩を抱いている。

医者「尿検査では陰性。超音波検査でも何も見られません。妊娠ホルモンも検出されません。残念ですが想像妊娠です」

シオニ、俯いている。

シオニ「またですか？」

シオニ、ミラーの肩に顔を埋めて、

シオニ「あなた、ごめんなさい」

ミラー、シオニの手を優しく握っている

（回想終わり）

○チャイナタウン・マクドナルド・内

エドナ「妊娠したといって、調べてみたら想像妊娠。それも2回目なんだって」

三枝「聞いたことはある。どんな症状？」

エドナ「生理がない。吐き気、排卵障害、乳

房も張っている。やっかいなのが、不安障害
害」

三枝「何が原因？」

エドナ「子供が欲しい欲しいと強く思い過ぎて、ホルモンバランスがおかしくなっている」

三枝「そうなんだ」

エドナ「それで医者が詳しく検査すると不妊症だったの。それでご主人もすっかり参っていて、たまたま話す機会があったので、養子を貰ってみては？ と勧めておいた。感触がよかったので、連絡があると思う」

三枝「名前を教えてください」

エドナ「奥さんはシオニ、御主人はミラー、お金持ちのドイツ人だよ」

三枝「ありがとう」

○高速道路・バス・中

リム、リムの孫2人、リムの友人2人、その子供5人、湯野、マイキー、メロ

デイ、ベビーシッター、三枝、キカイ、
アイナ、アラ、中型バスに乗っている。
スナック菓子を食べ、ビールやジュースを飲みながら騒いでいる。

○スービック・ホワイトサンドビーチ

子供たち、浮き輪、水中眼鏡、ビーチ
ボールで遊んでいる。

キカイ、マイキー、ベビーシッター、
子供たちを監視している。

大人たち、ビールを飲んでいる。

三枝、リム、湯野、子供たちを見なが
ら話している。

三枝「ストリートチルドレンや虐待された子
供、孤児を保護することを目的としたNP
Oを立ち上げます」

リム「ほう、何かやるのではないかと思っ
ていたが、大きく出たな。三枝のことだから
非合法の養子斡旋の隠れ蓑にしようとして
いるのではないか」

三枝、おでこを掻いている。

三枝「参ったなあ。凶星です」

リム「NPOは資金集めが大変だから軌道に乗るまで苦労するぜ」

湯野「そんな資金あるのか？」

三枝「もちろん、今はありませんが、なんとかしそうな予感があります。まずはクラウドファンディングから始めます」

湯野「フィリピンでもそんなサイトがあるのか？」

リム「いくつかある。最初は集まるかもしれないが、継続しないだろうな。大口で毎年予算を組んでくれるようなスポンサーがい

くつか必要」

三枝「ですよね。ある程度、組織が固まれば、スポンサー探しに本腰を入れます。ところであなたか理事長になってくれそうな人はいないでしょうか？是非紹介してほしい。それに加えて理事5人も」

リム「なぜ、三枝がやらない？」

三枝「私はそのような器ではありません。財務経験があるので経理をやるうかと」

リム「趣旨に賛同してくれて、三枝のことをわかってくれて、金があるやつがいいな、理事はどうにでもなる。問題は理事長だな、探してみるから資料を送っておいてくれ」

湯野、エコバックからお重を取り出して机の上に並べている。

三枝、蓋を開けながら、

三枝「何を持ってきたのかと思ったら、お弁当！ 7段重とはな」

三枝、すべてのお重の蓋を開けて、

三枝「ワオ！、これは！ すごい！ 見たことない。豪華なお子様ランチ」

リム、覗き込んでいる。

大人たちがやってくる。

リム「ここまでされると料理というよりアートじゃないか！ 昨日から作っていたのか！ 頭が下がる。食べるのがもったいない」

湯野「気にせず食べてくれ。喜んでくれるなら作るのはまったく苦にならない」

アイナ、アラ、走ってきて、三枝の手を引っ張っている。弁当を見て固まっている。

三枝「すごいだろう。湯野さんが作ってくれた」

アラ、じっと弁当を見ていたが、そっと手を出し、手づかみで食べ始める。

アイナ、慌てて止めようとする。

アラ、次から次に手を出し、口に入れる。

アイナ「まだ食べてはダメでしょう。アラ！あれもこれも食べない！」

湯野、にこにこしながら、アイナに
湯野「アイナ、どんどん食べて、遠慮しないで」

アイナ、夢中になって、口いっぱいに頬張っている

マイキー、メロディを抱きながらやっ

てくる。

リムの孫たち、走ってくる。

リムの孫「わわわわわ」

メロデイ、食べ始める。

リムの孫たち、がつついている。

キカイ、紙皿、スプーンを配っている。

大人たちも食べ始める。

ベビーシッター、飲み物を配っている。

メロデイ、湯野の腕を引っ張っている。

メロデイ「じいじ、一緒に遊んで？」

三枝「おっ、じいじって呼ばせているんだ」

湯野「羨けた。あこがれだったんだ。三枝し

か理解できないだろうけど」

三枝「わかるわかる。じいじって響きがいい、

羨ましい」

アイナも三枝の腕を引っ張っている。

アイナ「ボス、一緒に泳ごうよ」

三枝、にっこり笑って、

三枝「ひと泳ぎしてきます。海は久しぶりな
んで」

湯野、
湯野、
リム、
「俺たちも泳ぐ」
リム、立ち上がる。

第7話

○同・墓地・テイトボーイの家・前

テイトボーイ、リガヤ、リガヤの友達
2人、話している。

若者2人、立って見ている。

リガヤ「あんだ、大口叩いたよね。ビログを
俺に預けろ、飯も食わせて、学校にも行か
せてやるって」

テイトボーイ「あー言った。預ける気になっ
たのか？」

リガヤ「どうせなら私の友達の子供3人とビ
ログの合計4人、世話してくれ」

テイトボーイ、両手を挙げて、口をあ
んぐりと開けて、顔を覆っている。

テイトボーイ「げげー、4人も！ 他の3人
の子供も同じくらいの年齢なのか？」

リガヤ「あー、同じような年齢で、少年ギャ
ング団の周りをうろろしている。まだ幼
いから役に立たないんだけど。できないの
か？ 口だけか！ 根性ないな」

テイトボーイ「待ってくれ、少し考えさせてくれ。なんとかしたい」

○ トンド・賃貸物件

職人が内装工事をしている。看板が置かれていて、MAYLEEN EAT ERLYの文字が。メイリーン、キカイ、アイナ、アラ、作業を見ている。

キカイ「もうすぐだね」

メイリーン「近所を見に行こう。売っているものとか値段とか調べて、メニューを考えなくては」

○ サンタメサ・ロメロの家

カミール、赤ちゃんを抱いている。テイトボーイ、赤ちゃんを見ている。ロメロ、スマホをテイトボーイに見せる。

ロメロ「NPOのクラウドファンディング、

ティトボーイ、スマホを押し返している。

カミール、赤ちゃんをあやしながら、

88

L

出生証明書がない子供がいる。これは俺が

なんとかする」

ロメロ「出生証明書の遅延登録できるの？」

「けっこう手間だよ」

テイトボーイ「親を引きずってでもやらせる。

子供の将来がかかっているからな」

ロメロ「テイトボーイは変わったなあ。やる気に満ち溢れている！ でもなあ、ここは

児童養護施設になってしまっただけ」

カミール「うひゃー、4人も！ お金貰えるのよね？」

テイトボーイ「もちろん必要経費プラス保育

289

料は払う。ただな、少年ギャング団に足を踏み入れかけなんだ。精神的支配はまだ受けていないようなんだがな」

ロメロ「ギャングに染まる前に抜け出させな

いと更生させるのは骨が折れる」

テイトボーイ「わかってるな」

カミール「私はやってみたい。でも一人じゃ無理だから友達も誘っていい？」

テイトボーイ「ロメロは頼りにならないから

もう一人いた方がいいだろうな」

ロメロ「4人かあ、男の子ばかりだろ、か

ミール！ 安請け合いして大丈夫か？」

カミール「赤ちゃん、私が育ててるんだよ。

なんとかなるなる」

○トンド・墓地・三枝の家・前

三枝、アイナ、アラ、バレーボールを
している。

三枝のスマホに着信、三枝、ボールを
アイナに渡して、話している

三枝「はい、三枝です。ああビリーさん。放
置されていた男の子ですね。幹旋できます
よ」

○オルティガス・キコの家

三枝、ビリー、キコ、キコの父親、蒸
しパンを食べ、アイステイを飲んでい
る。

ビリー「レズビアンのドンナとラニーは毎日

が楽しそう。仕事も子育ても張り切って、
生き生きとしている。彼女たちを見ている
と俺も子供が強烈に欲しくなった」

三枝「ドンナさんが喜んでゐる姿が目には浮か
びますね」

キコ「あまりにも楽しそうなんで、この頃は
会うたびにむかむかしてくる。素直に喜ん
であげたらいいのに俺は心が狭い。そんな
自分が嫌になる」

ビリー「友達のゲイカップルに話をしたら、
三枝さんを紹介してくれて言う。こりゃ

291

うかうかしてたら周りにみんな赤ちゃん
持っていかれてしまう。それで焦って今日
は来てもらった。何人かに代理母を頼んだ
のだが、どうも感触がよくないし、養子な
ら後腐れもなさそうだし、揉めることもな
いだろうから」

三枝「ゲイもレズビアンも子供が欲しい人は
たくさんいるようですね」

ビリー「まだ紹介はしないよ。俺たちが先だ

からね」

三枝、スマホを見せている。

三枝「わかりました。さて本題に入りましょうか。赤ちゃんは生後2か月くらいの男の子。誕生日も名前もわからない。ただ母親には一度、うちのスタッフが会っていて、フィリピン女性でおとなしそうだったと。それしかわかつていることはありません。1か月預かっているのですが、病気もせず、健康です」

キコの父親、おもむろに立ち上がり、

三枝を睨んでいる。

キコの父親「フィリピンでは同性婚すら認められていないのに、ゲイカップルが養子をもたらうのは後々面倒なことになるかもしれない。その点君はどう思う？」

三枝、間髪入れずに、

三枝「無責任なようですが、まったくわかりませんし、考えようとも思いません。考えたところで答えが見つかるわけありません

ん。私は赤ちゃんが幸せに育ってくれることだけを願っています。養父母がゲイであろうと、レズビアンであろうと、独身であろうと、それは本質的な問題ではありません。大切なのは愛情と責任をもつて、もちろん財力もあつてですが、きちんと子供を育てられるか――その一点だけです」

キコの父親「いい加減な野郎だな！　　と言いたいところだが、正直でいい。適当なことを言うかと思ったのだが」

三枝「フィリピンではシビルユニオンも認められていませんよね」

キコ「フィリピンのLGBT人口の割合は1%もいて、社会に受け入れられているのに、法的な権利保障はまったく認められていない」

三枝「当然ですが、この赤ちゃんは出生証明書もあります」

ビリー「考えないとな」

キコの父親「出生証明書は俺が何とかしてや

る。心配するな。お前たちはこの子の名前を決めて、子育てに専念しろ」

キコ、肩の力が抜けている。

キコ「親父もやっと賛成してくれた」

三枝「受け渡しは明日でいいでしょうか？」

○マニラ市役所・市民登録課

テイトボーイ、リガヤ、リガヤの友達、椅子に座って待っている。

テイトボーイ「先が思いやられるな。遅延登録だから何度も市民登録課に来ないと出生

294

証明書は取れない。宣誓供述書も必要だしな。ビログは病院で生まれたのか？」

リガヤ「助産師だった」

テイトボーイ「その助産師とは連絡がとれるか？」

リガヤ「連絡先はわかる」

テイトボーイ「そうしたら、宣誓供述書は作成できそうだな。担当者の言うことをよく聞けよ。決してあきらめるな。二人とも出

生証明書を取れたら1万づつ払ってやる」
リガヤ「それならやるわ」

テイトボーイ、ため息をついている。

○オルティガス・キコの家・リビング

翌日。

キコの父親、ドンナ、座っている。

ラニー、赤ちゃんを抱いている。

ベビーシッター、ベビーベッドを整え

ている。

机にはベビー用品が置かれている。

ビリー、キコ、立ったり、座ったり落

ち着かない。

ドンナ「おい、キコ、気持ちわかるけど。

座りなさいよ」

キコ「うん」

x

x

x

三枝、赤ちゃんを抱きながら、入って
くる。

ビリー、両手を何度も振っている。

キコ、駆け寄って、

キコ「ホセー！ー」

ドンナ、笑っている。

ドンナ「まさか！ 名前を決めたんだ。ホセ・

リサールのホセ？」

ラニー、キコの父親、にこにこしている。
る。

○ トンド・墓地・三枝の家（夕方）

アイナ、アラ、上手に手づかみで食事
している。人参を皿の隅によけている。
°296

三枝、お金を配っている。

パパジー、ロメロ、カミール、デレク、

アンジェリン、テイトボーイ、踊って

いる。

三枝「放置された赤ちゃんがさきほど500
万で引き取られた。新設のNPOに300
万を寄付。100万はプールして、残りは
山分けにする。カミール！ 1カ月ご苦労、
アンジェリンもな」

全員、笑いながら激しく踊っている。
アイナ、アラ、食べるのをやめて踊っている。

三枝、キカイ、踊りに加わっている。

三枝のスマホに着信。外に出る。

三枝「はい三枝です。あードンドンさん！ 何か問題でも？ はいはい、そういうことでしたら明日伺います」

三枝、スマホをポケットに入れ、戻ってくる。

三枝「おいおい、踊りすぎだろう。もしかしたら理事長になる人が見つかるかもしれない」

パパジーたち、叫びながら、踊り続けている。

○ヴァレンズエラ・フィリピン料理店・内（夜）

三枝、ドンドン、食事しながら話している。

三枝「赤ちゃんは元気ですか？」

ドンドン「最初はどうかと思っていましたが、ようやく自分の子供のように思えてきました。ヴィルマも張り切っています」

三枝「よかった」

ドンドン「父親から聞きました。ストリートチルドレンのためのNPOを創設するんですね。それで理事長を探しているとか？」

三枝「はい」

ドンドン「私は来年、下院議員に立候補します。父親の地盤が強力なので当選できるラインにいます」

三枝「ほう、それはそれは」

ドンドン「ただ肩書が弱い。父親のサンダル工場の常務しかないので。選挙のためですが、ぜひNPO理事長の肩書がほしい。ストリートチルドレンのためのNPOならイメージも申し分ない」

三枝「リムさんから聞いていますか？ 私たちは違法な養子斡旋も続けるつもりです。リムさんに相談したときに、NPOを隠れ蓑

にするつもりなんだなとすぐに見抜かれました。露見すれば理事長責任も問われてしまえます。その覚悟はありますか？」

ドンドン「聞いています。違法な養子斡旋で赤ちゃんを引き取ったのは私が最初ですよね。覚悟というより、もうすでに足を踏み入れている状況です。ただし私と理事は今後の違法な養子斡旋については一切関与しません。三枝さんたちが独自に秘密裡に斡旋を進めることについては差し支えありません。このような立場でいきたいと思っ
ています」

三枝「わかりました。さて問題は資金です。今、使えるお金は700万ほどで、これでは到底足りません。強力な支援者、スポンサー探しをしなくてはなりません」

ドンドン「それは任せてください。私はフィリピン商工会議所青年部のメンバーですし、中国人の富裕層グループから多くの支援を集めることができます。近年、中国人の子

供を標的にした誘拐や拉致、殺人が多発しています。その背景にはストリートチルドレンが成長して犯罪に手を染めるケースがあると考えられます。こうした状況は私たちにとって深刻な脅威となっています」

三枝「確かに中国人は狙われていますね」

ドンドン「父親も民兵を雇っているくらいですから。それから理事ですが、マカティの病院長タンさん、父親のリム、など肩書が申し分ない人を5人選びました」

三枝「リムさん、タンさんがよく引き受けてくれましたね。ありがたい。それではドンさん、トンドに来てもらえますか？ スタッフに会っていただいて、決めたいと思います」

○チャイナタウン・マクドナルド

エドナ、食べている。

三枝、慌ただしく入ってくる。

三枝「すまない、今日は食べている時間がな

い」

三枝、封筒を渡している

三枝「ゲイカップルに養子を斡旋した。これは謝礼。また次の機会にゆっくり話そう」

エドナ、笑いながら見送っている。

○ トンド・墓地・三枝の家・前

トラックが横付けされている。

アイナ、アラ、スンカというフィリピンの伝統的なゲームで遊んでいる。

三枝、帰ってくる。

アイナ「みんな待ってるよ。引越しだよー」

三枝「ごめん、遅くなった」

三枝、部屋に入ろうとする。

三枝のスマホに着信。

三枝「はい、三枝です。あーミラーさんですか？ 聞いています。ドイツの方ですよね。

私は日本人です。英語でもタガログ語でも大丈夫です。はい、ただ子供たちがすべて引き取られてしまい、斡旋できる子供が今

はいないのです。見つかり次第、こちらから連絡します」

○ トンド・墓地・テイトボーイの家・前

リガヤ、コリーナ（35）、女の子、立っている。

若者、テイトボーイを呼んでいる。

テイトボーイ、出てくる。

テイトボーイ、「出生証明書は取れたのか？」

リガヤ「まだだよ。難しいことばかり言われてくじけそう」

テイトボーイ「諦めるなよ」

リガヤ「わかってる。今日はね、コリーナが300万もらえるなら売りたいって言うから連れてきた」

テイトボーイ「金に目がくらんだか？ 永遠に会えなくなるぞ。俺も行先は知らないし、上流階級に貰われるとしかわからない」

コリーナ「4歳になる。この子どう？」

テイトボーイ「どうって言われても。女の子

だな」

コリーナ「子供は6人いるから、一人くらい、いなくなってもどうってことはない。主人が怪我をして、収入が途絶えて、困っている。この子を売れば、他の5人の子供がご飯を食べられる」

ティトボーイ「旦那は納得してるのか？」

コリーナ「しょうがないと諦めている」

ティトボーイ「じゃあ、写真撮るぞ。この子のこと詳しく教えてくれ」

ティトボーイ、女の子をスマホで撮影している。

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、荷物を片付けている。石棺を撫でながら、ぶつぶつ呟いている。

三枝 N 「世話になったな。来たときは墓地なんかに住めないと泣いたのに、どうして名残惜しい？」

三枝、荷物をすべて外に運びだし、振

り返っている。

三枝 N 「また遊びに来るからな」

○ トンド・パパジーと三枝の新しい家

トラックが家の前にある。

メイリーン、キカイ、手伝いの人たち、
家財道具を次々に運び込んでいる。

アイナ、アラ、三枝の両腕にぶら下が
っている。

三枝 「二人とも大きくなった。重い」

パパジー、階段を降りてくる。

パパジー 「ボスの荷物少なすぎる」

三枝 「パパジーのところは荷物が増えたなあ」

パパジー 「ボスが自転車とか、買ってくれる
から」

三枝 「部屋に荷物が入りきらなかったら、俺
の部屋を物置代わりに使ったらいい」

○ サンタメサ・ロメロの家・中

ロメロ、頭を抱えている。

ビログと3人の男の子、走り回っている。

カミール、おやつを持って帰ってくる。
子供たち、歓声をあげながら、おやつを奪い取っていく。

ロメロ「ここは狭いから頭が変になる。学校に行けばちよつとはましになるんだろうけど」

カミール「賑やかでいいじゃない。赤ちゃんより楽」

カミールの女友達、エリ（23）やってくる。

カミール「エリが来てくれたよ」

ロメロ「助かるー」

エリ、子供たちを見て、

エリ「元気いっぱいじゃない？」

ロメロ「こいつらを静かにさせるにはどうすればいい？」

エリ「スマホ」

ロメロ「やっぱりな」

ロメロ、スマホでパパジーと話している。

ロメロ「パパジー、安いスマホを4台買ってもいいかな？ 餓鬼を静かにさせたい」

ロメロ、ビログと子供たちに手招きしている。

ロメロ「やったー OKが出た。スマホを買いに行こう。ビログ！ ついてこい」

○パヤタス・デレクの家

デレク、助産師、ビーフンを食べ、水を飲みながら話している。

助産師「うちで出産した女性が産後鬱になつてね。赤ちゃんが病気になつても病院に行かず、ほったらかし。昨日は私のところに来て、焦点が定まらない目つきで、赤ちゃんを殺して、私も死にたい死にたいって」
デレク「産後鬱って何？ なぜそんなことになる？」

助産師「母親として自信がなくなり、育児を

しなくなる。旦那が他の女性の家に行った
きりで帰ってこない。一人で育てなければ
ならなかったのが原因だろうね」

デレク「治るの？」

助産師「周りのサポートがあれば治るんだけど、旦那があれだからね」

デレク「じゃあどうする？」

助産師「あんたのところで預かってくれない
か？ 噂は聞いてるよ。まずは引き離さな
いと。親子共々死んでしまいそうなので」
デレク「そういうことならまかせて。サンタ
メサで、何人か子供を預かっている。病氣
になってもすぐに病院に連れていく。いつ
でも会えるから、何も心配はない」

○サンタメサ・ロメロの家・内

カミール、エリ、子供たちとお遊戯を
している。

ロメロ、スマホを操作している。

デレク、赤ちゃんを抱いてやってくる。

ロメロ、大きく口を開け、体を反らし
ている。

ロメロ「まさかと思うが、その赤ちゃんも世
話しろってか？」

デレク「ビンゴ！」

カミール「6ヶ月くらい？ 男の子？」

デレク「4ヶ月と少し、男の子だよ。お母さ
んが産後鬱になって、預かることになった」

カミール「了解」

ロメロ「カミール！ 即答かよ！ 嫌とは言

わないんだな。NPOの施設ができたら保
母さんとしてやっていけるな」

カミール「私の人生で今が一番楽しい。人か
らこんなに頼まれるなんてすごくやりがい
がある。NPOができたら、もちろんやる
つもりだよ。エリも一緒にね」

デレク「やりやりー」

○ トンド・墓地・NPO事務所（夜）

机の上には書類が何枚もある。

アンジェリン、棚にあるバインダーを開き、黙々と作業している。一区切りついて、バインダーを閉じ、顎を触っている。

アンジェリン「だいたい書類はできたけど、理事長や理事に児童養護施設や本部が決まらなければ前に進まないじゃない」

ロメロ、中の様子を伺っている。

アンジェリン、気が付き、ロメロを招き入れる。

アンジェリン「どうしたの？こんな夜遅くに」

ロメロ「クラウドファンディングのページができたので誰かに見てもらいたくて、ティトボーイにはあっさり断られたんだ」

アンジェリン、ロメロのスマホを見ている。

アンジェリン「すっきりまとまっているから、いいんじゃない。ロメロは才能あると思う」

ロメロ、にやけている。

ロメロ「アンジェリンは頭もいいし、かわいいし、デートしようか！　褒めてくれて最高」

アンジェリン、ロメロの肩を思い切り叩く。

アンジェリン「もう、調子いいんだから、カミールに告げ口するよ」

ロメロ、よろけながら、

ロメロ「才能なんかまったくないよ。グーグルジェミニが指示通りやってくれるから」

アンジェリン「私も書類ができているんだけど、

ど、なにも決まらないから提出できない」

ロメロ「そうだよな。早く決めてくれないかな」

○トンド・パパジーと三枝の家・前

メイリーン、キカイ、料理を作っている。

アイナ、アラ、スマホをスマホスタンドに置き、振り付けを見ながら、ダン

スをしている。

店の前に椅子が並べてある。

三枝、パパジー、ティトボーイ、アン
ジェリン、ロメロ、デレク、カミール、
エリ、ドンドン、椅子に座り、会議を
している。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

三枝「紹介する。ミスタードンドンさん、N
P O の理事長に立候補してくれた。パパジ
ーは知っているな。ヴァレンズエラの副市
長リムさんの次男で、来年、下院議員選挙
に立候補する。現在はサンダル工場の常務
取締役」

ドンドン、手をあげて、みんなを見渡
し、頷いている。

三枝「もうひとつ付け加えておく。言うかど
うか迷ったのだが、ドンドンさんが話して
おいたほうがなにかとやりやすいというの
でな。俺たちが最初に養子斡旋した赤ちゃん
ん、そうそうティトボーイが頑張ったあの

ホームレスの赤ちゃんの引き取り先がドン
ドンさんなのだ」

ドンドン「おかげさまですくすくと育っています」

テイトボーイ、ドンドンを優しい目で
見つめている。

テイトボーイ「おお親近感が湧いてきた。

赤ちゃんに会いたいな」

ドンドン「もう少し大きくなったら連れてきます」

三枝「こちらはうちのスタッフ。こういう人材かという仕事は真面目にやってくれている。みんな貧乏だったからか、頭は悪い」

パパジー、デレク、ロメロ、ブーイング。
グ。

アンジェリン、カミール、エリ、げら
げら笑っている。

メイリーン、キカイ、手を止めて笑っている。

アンジェリン「本当のことじゃない。ボスは

嘘を言っていない」

アンジェリン、手をあげている。

アンジェリン「ドンドンさんに質問があります。下院議員に当選できますか？」

ドンドン「ヴァレンズエラは父親の地盤で強固な組織票があり、選挙で一度も負けたことがない。多分いけると思う」

アンジェリン「ということは、比例ではなく選挙区から出馬するんですね」

ドンドン「そうです」

三枝「下院議員が理事長になってくれるのな

313

ら、俺たちにとっても有難い。理事はドン
ドンさんの父親リムさん、マカティの病院
長、タンさん。そう、ホームレスが赤ちゃん
を産んだ病院だ。他の3人も肩書は申し
分ない。さらにドンドンさんは資金集めは
任せてくれと言ってくれている」

パパジー「それは頼もしい」

ドンドン「すでに3人の中国人から資金提供
したいと申し出がありました。正式に私が

理事長になればさらに増えると思います」
アンジェリン「ストーリーチルドレンの保護
を行っている団体がすでにありますが、ど
うお考えですか？」

ドンドン「あそこはストーリーチルドレンが
メインではない。子供の虐待がトップでス
トリーチルドレンは3番目だった。我々
はトップがストーリーチルドレンだからイ
ンパクトがある。現在、マニラには6万人、
全国では数十万のストーリーチルドレンが
いて、10年前と比べてもその数はほとん
ど減少していない。これは深刻な状況で看
過できない規模です。まずはマニラのスト
リーチルドレンを半減させることを目標
に取り組んでいきたい」

三枝「俺たちは後発だから、目に見える成果
をあげたい。いずれは全国に展開するが、
まずはマニラからだな」

テイトボーイ「具体的には？」

三枝「このメンバーの自慢できるところは……」

まあ頭が悪いのはさておいて」

テイトボーイ、顔をしかめて、冗談っぽく、右手中指を立てている。

テイとボーイ「しつこいぞ！　ボス！　わかってるって」

三枝、指2本を立てて、左右に振っている。

三枝「おお、自慢できる点は、全員がスラムに住んでいる、住んでいたということ。すなわちスラムのネットワークに深く食い込

315

めているし、貧乏人の気持ちができる。スラムに支部を作り、スタッフを雇い、ストリートチルドレンの情報を集め、両親の同意を得て、児童保護施設に預ける。合法、違法を問わず養子斡旋を行う。児童養護施設には将来的には最大5000人受け入れる。食費、生活費、教育費など、すべて無料」

パパジー「大きく出たなあ」

ドンドン「金が湯水のように出ていく」

三枝「まあ目標ではある。お金がショートしないようにするのは苦勞するだろうな」

ドンドン「俺は金集めに専念するから、現場はすべて任せようと思う」

三枝、みんなを見渡している。

三枝「そろそろドンドンさんが理事長になってほしいかどうか採決したい。いいか？」

賛成の人は手を挙げて！」

全員、手を挙げている。

三枝「決まりだな。ドンドンさんよろしくお願いします」

ドンドン「ありがとう。こちらこそよろしく」

全員、拍手している。

テイトボーイ「違法なこともすべて知っていてくれるなら、俺たちもやりやすい」

メイリオン、キカイ、ビールを運んでいる。

アイナ、アラ、楽しそうにグラスを運んでいる。配り終えて、

全員「乾杯！」

○ トンド・大通り

少年 1 ' 赤ちゃんを抱きながら、信号待ちをしている車の運転手側の窓を叩き、手を出している。

少年 2 ' 買い物客が通るのを見計らって、コンビニのドアを開け、手を差し出している。

少年 3 ' 4 ' バケツに水、袋に洗剤を入れ、スクイージーを持ち、信号待ちの車のフロントガラスを洗い、終わると手を出している。

少年 5 ' 歩行者に近づき、右手でライスを掴む仕草をしながら口元に当てて、食べ物に困っていると訴えている。

少年 6 ' マクドナルドに入り、飲食中の客に近づき、手を出している。3人目で店員に見つかり、追い出されている。

少年 7 ' 8 ' 客待ちをしているジプニ
ーに乗りこみ、年配の女性にナイフを

突きつけ、バッグ・時計・スマホ・指輪を奪って、素早く逃げている。
少年9、10、汚い髪で、全身真っ黒、破れたTシャツを着て、裸足の老婆と縁石に座り、紙コップを前に置き、物乞いをしている。

少年10人、一人で歩きスマホをしている若い女性を取り囲み、スマホとバッグを奪っている。女性の悲鳴で男が駆けつけるが蜘蛛の子を散らすように逃げている。

○ トンド・墓地・ロビンの家・中・（夕方）

大きなお墓。新しい机、椅子、ソファパソコン、おもちゃなどがある。

少年ギャング団の、ロビン（35）、NO2のジミー（14）を手招きしている。

買取屋がロビンの横に座っている。

ロビン「少年たちを集めろ」

ジミー、少年たち50人がたむろして
いる広場に走っていく。

ジミー「集まれ！」

少年たちロビンの家に向かい、一列に
並んでいる。

先頭の少年1、小銭をポケットから出
してジミーに渡している。

ジミー、小銭を数えて箱に入れ、金額
をロビンに伝えている。

ロビン、パソコンに入力している。

少年2、小銭を渡している。

ジミー「稼ぎが少ない！明日も少なかった
ら飯抜きになるぞ！」

少年2、うなだれている。

少年7、バッグ、財布、スマホ、指輪、
時計をジミーに渡している。

ジミー、財布の中の現金だけ数えて、
商品は買取屋に渡している。

買取屋が商品を調べて金額をロビンに
伝えている。

x x x

ロビン、パソコンを打ち終えて、金を数えている。

ロビン、ジミーに金を渡して、

ロビン「ボス！ これでいつものようにな」

x x x

ジミー、大きな袋を6つ持ち、8人の少年を連れて、サリサリストア（雑貨店）とテイクアウトの店で買い物をしている。

x x x

少年たち、広場に集まり、食事している。

お菓子、コーラ、ジュースが大量に置かれていた。

遠くからネルソン、警官2名、少年たちをじっと見ている。

ネルソン「ロビンは用心深くて、滅多に家から出ない。あのジミーって餓鬼にだけ指示を与え、他の少年たちに伝えている。1年

前にジミーを捕まえたが、彼は当時14歳の未成年で俺がボスだと平然とほざく。自分が逮捕されることはないとわかってやがる。ロビンも過去に逮捕したことがあるが、俺は何もしていない。ジミーが勝手にやっている」と

警官1「ロビンをもう一度しょっ引きましよう。児童福祉法や教唆罪で逮捕できるでしょう」

ネルソン「少年たちを取り調べて、誰がボスかと聞くと、口を揃えて、ジミーがボスだと言う。何故かというところではジミーをボスと呼ぶからな。それで少年たちにその印象を強く植え付けている」

警官1「くそ！　悪賢い奴め！　物乞いや犯罪に手を染めるのは子供たちで、その指示役も未成年！　ロビンは金を吸い上げるだけか！」

ネルソン「あいつを野放しにしている俺たち

もどうかしてる」

警官「盗聴器をつけるか、そうだ！ おとり

捜査はできないですか？」

ネルソン「馬鹿野郎！ おとり捜査って！

子供にそんなこと頼めるわけがない。まあ

盗聴器は考えてみるわ」

○タギッグ・フォートボニファシオ陸軍基地・

ミラーの自宅・ダイニングルーム

オフィサーズ・クォーターズと呼ばれる
集合住宅。コンクリート造り・快適

322

な住環境。

三枝、ミラー、シオニ、ソーセージ・
マッシュポテト・サワークラウトを食
べ、ハープティを飲んでいる。

三枝「ドイツソーセージはおいしいですね。

大好きなんです」

シオニ「私も」

三枝「ミラーさんはどうしてフィリピン陸軍
の基地内に住んでいるのですか？」

ミラー「フィリピンとドイツの軍事協力の一環として軍事専門家の私がドイツ政府から命令されて、それでここに住んでいます」

三枝「BGCやマカティも近くて、このような便利なところに基地があるなんて驚きです」

ミラー「私も最初は驚きました」

三枝「本題に入りますが、お待たせしてすみませんでした。現在、4歳の女の子は幹旋できます。父親が怪我をして、収入がなくなり、他の5人の子供たちを育てるために手放したいということです。さらにもう一人預かっている子供がいるのですが、母親が産後鬱で精神的に不安定で幹旋できるかどうか今ははっきりしません、4か月半の男の子です。なお幹旋料は500万です」

三枝、スマホ内の写真及びデータを見せている。

ミラー、シオニ、食い入るように眺めている。ミラー、シオニに向かって、

ミラー「どう思う？」

シオニ「女の子がほしい。想像妊娠から不妊症がわかって、あなたを落胆させてばかり。

写真を見てると私に似てるような気がする。

この子なら愛せると感じる」

ミラー「じゃあ決めようか。半年後にドイツに戻るの、早いほうがいい。4歳なら言葉の問題もなんとかなると思う。500万は安くないけど」

○ トンド・三枝、パパジの家

324

M A Y L E E N E A T E R L Y と書

かれた看板が上部に掲げられている。

メイリーン。キカイ、スタッフ、惣菜

を作り、味見して、意見しあっている。

アイナ、アラ、凍ったアイスポップを

を手で溶かしながら飲んでいる。

○ トンド・墓地・テイトボーイの家・前

リガヤ、書類を持っている。

ティトボーイ、椅子に座っている。

リガヤ、これみよがしに書類をティトボーイの腹に押し付けている。

リガヤ「出生証明書、取ったぞー」

ティトボーイ「お疲れさん、よく我慢したな」

リガヤ「もうこりごり、1万じゃ安すぎるわ」

ティトボーイ、ポケットからお金を出している。

ティトボーイ「何を言ってる！ お前の息子のためだろうが、ほれ！ 1万払ってやる。もう一人の友達の出生証明書は取れたのか？」

リガヤ、バッグから書類を引っ張り出している。

リガヤ「あたりまえだろ！ 取れたよ」

ティトボーイ、再びポケットから金を出す。

ティトボーイ「じゃあ、もう1万払うわ」

リガヤ「ラッキー、ビログは元気なのか？」

ティトボーイ「元気だよ。スマホを買っても

らったらしいぜ。会いに行くか？」

リガヤ「元気ならいい」

○ トンド・墓地・NPO事務所・内（夜）

アンジェリン、所長に退職届を提出している。

所長「なぜ辞めるの？」

アンジェリン「所長、長い間お世話になりました。新しいNPOに就職します」

所長「不満があつたの？」

アンジェリン「いえ、不満はまったくありません。新しいNPOの立ち上げから関わったのでやりがいを感じています。これまで培ってきた知識や経験を存分に活かそうなので」

所長「困ったことがあれば、いつでも相談にのるよ」

アンジェリン「ありがとうございます」

○ トンド・パパジー、三枝の家・前

12個のトレイが並んでいる。

テイトボーイ、アンジェリン、デレク、ロメロ、三枝、パパジー、店を眺めている。

アラ、もやしを小さなガラスのトレイで育てていて、それをじっと見ている。メイリーン、キカイ、客の相手をしている。

テイトボーイ「もうお客さんが来てる」

デレク「俺、一度も食べたことがないんだ。

おいしいとは聞いているんだけど」

三枝「ご馳走するから好きなものとして俺の

部屋に行こう」

テイトボーイ、デレク、アンジェリン、ロメロ、三枝、パパジー、それぞれトレイを指さしている。

メイリーン、キカイ、手際よく、惣菜を渡していく。

メイリーン「ごめんね、前より2割高くなってる」

デレク、にこにこしながら、

デレク「ボスの奢りだから、もっと高くてもいいよ。味は？」

キカイ「前は食材をけちったりしてたけど、値上げしたおかげで、いいものを使えるので、さらにおいしくなってるよ」

ロメロ「ほう、楽しみ」

三枝「俺は毎日食べてるよ。飽きないんだなあ」

三枝、お金を払っている。

全員、お皿と氷を入れたコップを持って、階段を上がっている。

キカイ、コーラのボトルを2本持っていていく。

○同・三枝の部屋（夜）

マットレス、扇風機、パソコン、小さなテレビ、小さな机、椅子が3つ、洗濯籠、小さな棚、ゴミ箱がある。アイナとアラのおもちゃや服が置いてある。

アラ、バナナを食べている。

アンジェリン、驚いている。

アンジェリン「エアコンもないの？　お金あ

るのに！　少しは自分のために使ったら？

不用品の物置になってる」

三枝、笑っている。

パパジー、キカイ、机と椅子を運んで

くる。

三枝、みんなが座るのを待って、

三枝「注目！　NPOの名前を決めたぞ。S

AVE THE STREET CHIL

DREN」

アンジェリン「SAVE THE CHIL

DREN PHILIPPINEという似

たような名前のNPOがありますけど」

三枝「確かにあるな」

テイトボーイ「でもストーリートチルドレンに

特化してるのが、俺はいいと思う」

パパジー「俺も賛成、わかりやすくいい」

アンジェリン「商業目的じゃないから似てて

もいかな！　それなら私も賛成する」

三枝「長いので頭文字をとってSTSC」

ロメロ「STSCね。わかった」

三枝「さあ、食べよう」

全員、食べ始める。

アイナ、制服を着て、帰ってくる。

アイナ、三枝にハイタッチしている。

三枝「アイナ、お帰り」

○同・墓地・テイトボーイの家・前

ネルソン、警官2名、テイトボーイ、

家の前に椅子を4つ、丸くならべて話している。

若者2人、後ろに立っている。

ネルソン「ストリートチルドレンを保護する

NPOを立ち上げるんだってな。お前にし

てはまともなことをやるじゃねえか」

テイトボーイ「ああ、パパジーらとな。理事

長は下院議員だぜ。三枝さんも絡んでる」

ネルソン「下院議員？　誰だ？」

テイトボーイ「間違った。下院議員に立候補するんだったわ。まだなっていない」

ネルソン「三枝さん？　いつからそんな丁寧な呼び方になったんだ。お前らみたいなクズの集まりの理事長が下院議員？　笑わせるんじゃないだろうが」

テイトボーイ「楽勝だと言ってたぜ」

ネルソン「そいつはどこに住んでる？」

テイトボーイ「ヴァレンズエラ」

ネルソン「遠いな、まあいい。それよりな、

お前！　俺たちに協力しろ！」

テイトボーイ「はあ」

ネルソン「少年ギャング団のボス、ロビンを捕まえたい」

テイトボーイ「最低の野郎だな」

ネルソン「ギャング団にいる少年の一人に盗聴マイクをつけたい。ロビンがボスだという証拠がないと捕まえられない」

テイトボーイ「俺もな、あの少年ギャング団を解体して、少年たちをまとめて施設に放

り込めないかと考えていた。今も4人預かってる」

ネルソン「俺たちは仲は悪いが、それならお前にとっても都合のいい話だろ！協力しろ」

○ヴァレンズエラ・ドンドンの家・リビング

三枝、ドンドンに資料を見せながら、話している。

ヴィルマ、赤ちゃんを抱いて入ってくる

332

三枝、赤ちゃんに駆けよる。

三枝「ごぶさたしています。元気そうだ！」

ヴィルマ「おかげさまで、1日があつというまに過ぎてしまいます」

三枝「ヴィルマさんは目がキラキラしていますね」

ドンドン「子供って生活を180度変えてしまえます。もちろん楽しい方ですが」

ヴィルマ「ホームレス夫婦は妊娠したのです

か？」

三枝「さあ、まだ情報は入ってきてませんが、妊娠したとなればすぐにお知らせします」

ヴィルマ「楽しみにしています。ゆっくりしていつてください」

三枝「ありがとうございます」

ヴィルマ、部屋から出ていく。

三枝、ドンドンに、

三枝「N P O の名前は S T S C でいいでしょう
うか？」

ドンドン「それでいいと思います」

三枝「お願いに来たのは、児童養護施設に適した建物を探したいのですが、新築は現実的には難しく、既存の物件、例えば廃校舎とか閉鎖された病院だとかありませんか？
我々の力では限界があります」

ドンドン「500人を収容できる施設？」
三枝「そこまではまだ、1000人くらいが
まずは妥当かなと」

ドンドン「マニラ市内だよなあ、学校とか、

大きな寮とかだな、よし、それはまかせて
くれ、父親が助けになってくれると思う。
政府に掛け合ってみる。

第8話

○ トンド・テイトボーイの家・中

新しいソファ、30インチのテレビが

ある。石棺の上に高級マットレス、大

きな冷蔵庫、椅子が5つ。

テイトボーイ、パパジー、リガヤ、コ

リーナ、女の子、話している。

テイトボーイ「いいんだな！ここに300

万ある。どうする？」

パパジー「未練があるのか？」

テイトボーイ「あるように感じたので、最終

確認をしたい」

リガヤ、コリーナの手を握っている。

リガヤ「いいの？もう2度と会えないんだ

よ」

コリーナ、顔が引きつっている。

コリーナ「売りたいくない。でもお金が必要、

昨日から何も食べていない。あちこちから

お金を借りてて、もうどうにもならない」

リガヤ「はつきりしなさいよ」

パパジー、お金をかばんに入れている。

パパジー「出直すか、無理強いはしたくない」

テイトボーイ、黙ってコリーナを見て
いる。

コリーナ、泣きながら、パパジーの
カバンを握っている。

コリーナ「もうぐだぐだ言わない」

コリーナ、女の子を差し出している。

女の子、泣いている。

コリーナ、女の子に向かって、

コリーナ「お腹が減ってるだろう。このお兄

336

さんについて行けばお腹いっぱい食べられ
るし、いい家に住める。お菓子もたくさん
くれる」

テイトボーイ「いいんだな。じゃあ300万
受け取ってくれ」

母親、カバンの中を見て、大事そうに
抱えている。

テイトボーイ、女の子に、向かって、

テイトボーイ「おいしいものの食べに行こう、

いいか？」

女の子、涙を拭いて、頷いている。

○タギング・フォートボニファシオ陸軍基地・

ゲート

陸軍兵士、2名、ライフルを抱えている。

三枝、テイトボーイ、女の子を連れてゲート前で立っている。

ミラーとシオニ、走ってくる。

ミラー、兵士と話している。

ミラー、話し終わって、三枝に、

ミラー「さあ行きましょう」

三枝、テイトボーイに、

三枝「テイトボーイ、ここでしばらく待っていてくれるか？」

テイトボーイ「わかった」

三枝、女の子を連れて行こうとする。

女の子、三枝の手を振りほどき、テイトボーイにしがみつく。

テイトボーイ、かがんで、女の子の肩に手を置きながら、

テイトボーイ「だめだめ、お腹が減っているだろう、俺といたって何も食べられないよ」

女の子、立ちすくんでいる。

テイトボーイ、女の子の手をつかんで三枝に渡している。

シオニ、女の子のそばに行き、やさしく話しかける。

シオニ「フライドチキンとマンガrahamにココナッツジュースを用意しているの。すぐ食べられる」

女の子、目を輝かせている。

シオニ、女の子の手を取り、

シオニ「さあ、かけっこしよう。速く走らないと誰かにフライドチキンを食べられてしまうわよ」

女の子、駆け出す。シオニ、後を追う。

三枝、ミラー、笑いながらついていく。

テイトボーイ、ほっとした表情で見ている。

○同・ミラーの自宅・前

シオニ、女の子、自宅に到着。

シオニ、ハアハア言いながら、ドアを開けている。

シオニ「さあ、どうぞ」

ミラー、三枝、ゆっくり歩いている。

○同・リビング

テーブルの上に料理が並べられている。

女の子、歓声をあげながら、駆け寄る。

シオニ「さあ、食べて、昨日から何も食べてないのでしょう。話は後で」

女の子、おいしそうにフライドチキンにかぶりついている。

三枝、ミラー、部屋に入り、微笑みながら見ている。

三枝「4歳ですし、兄弟に囲まれて育ってき

たから、さびしくて、泣くでしょうね。最初は苦勞するかもしれません」

ミラー「焦らずにじっくり慣れるのを待ちます」

ミラー、現金の入った大型封筒を手渡している。

三枝「ありがとうございます」

○チャイナタウン・日本語学校

三枝、授業を終えて、エドナに合図をしている。

340

○チャイナタウン。マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

三枝「君が紹介してくれたドイツ人夫婦に養子を斡旋した。これがお礼だ」

三枝、封筒を渡す。

エドナ、中を覗いている。

エドナ「またまたこんなに！、もう日本に行かなくてもいいかな」

三枝「日本に行ったほうがいいと思う。いつまでもうまくいくとは限らないからな」

エドナ「ドバイのお姉さんにすべて話したの。

もう合計すると100万近くになるから、全部お姉さんに渡すの。まだまだ足りないけどいつか家を買えるでしょう。お姉さんも頑張るって喜んでくれた」

三枝「えらいな」

エドナ「もう一人紹介したい人がいる」

○（回想）アラバン・葬儀場

3年前。

ナネット（女45）、葬儀場で大きな棺と2つの小さな棺の前で佇んでいる。

友人1・2、離れた場所で椅子に座り、ナネットを見ている。

友人1「かわいそうで慰める言葉もない。何時間も棺の前に座ったまま」

友人2「ナネットが私も一緒に逝きたかったって言うのよ。気持ちには痛いほどわかる」

友人1「私たちが少しでも支えにならなくちゃ」

（回想終わり）

○チャイナタウン・マクドナルド・中

三枝「誰？」

エドナ「45歳の女性、3年前に二人の子供と旦那を事故で亡くした可哀そうな奥さん」
三枝「身につまされるな」

エドナ「更年期障害でうちに通っている。生命保険で得たお金や旦那が社長だったため、生活は裕福だけど生きてる元気はまったくない。死んだも同然、養子をあげたい。名前前はナネット」

三枝「わかった、ナネットさんだな。今は幹旋できる子供がいないが、なるべく早く連絡する」

○トンド・三枝、パパジーの家

三枝、お金を分配している。

デレク、振り付けを考えている。

デレク「引っ越したから、振り付けを変えよう。曲も変えよう」

カミール、ユーチューブのダンスをスマホで見ながら考えている。

カミール、振り付けをデレクと話し合っている。

デレク、踊りだす。

テイトボーイ、パパジー、アンジェリン、ロメロ、デレク、カミール、三枝、最初はぎこちなかったが、徐々にうまくなっている。

エリ、赤ちゃんを抱きながら、踊っている。

アイナ、アラ、飛び込んできて、しばらく見ていたが、踊りだす。

○ トンド・墓地・テイトボーイの家・前

テイトボーイ、アンジェリン、リガヤビニール袋に入れたコーラにストロー

を差し込んで、飲んでいる。

テイトボーイ「コリーナは大丈夫か？ 落ち

こんでいないか？」

リガヤ「まだ5人を育てているからねー、くよくよしている暇はないわ。それにしても300万は大きい。旦那は医者に診てもらって、手術でケガが治れば元の生活に戻れる」

テイトボーイ「そうか、早く治るといいな。ところで相談なんだが、少年ギャング団の少年に盗聴器をつけられないだろうか、ネルソンから頼まれた。ロビンを捕まえたいそうだ」

アンジェリン「へー、賄賂警官が本気出したのかな」

リガヤ「盗聴器ってどんなの？ 実物を見たい。バッジみたいに胸に取り付けるとか？ 頼めると思うけど」

テイトボーイ「頼む。ロビンを捕まえたら、少年たちを児童養護施設に全員まとめて送

り込みたい」

アンジェリン「テイトボーイ！　気が早すぎる。まだ施設が決まっていけないよ」

テイトボーイ「ボスがなんとかしてくれるだろう」

アンジェリン「さあどうか、ボスのお尻を叩かなきゃね」

○トンド・三枝、パパジの家・三枝の部屋

三枝、パパジ、テイトボーイ、アンジェリン、ロメロ、デレク、グリーン、マンゴとバゴーン（エビの塩辛）を食べている。

アイナ、アラ、パズルをしている。

三枝「SAVE THE STREET」

HILDERN（STSC）の支部を3か所で作る。墓地、サンタメサ、パヤタスでだ。墓地はテイトボーイ、サンタメサはロメロ、パヤタスはデレク、アンジェリンは手伝ってやれ。急いで物件を探してくれ」

アンジェリン「広さは100m²くらいでいいですか？」

三枝「それくらいで十分だろう。なるべくわかりやすい場所がいい。スラムの入り口近くでな」

デレク「本部はどこに？」

三枝「マニラの真ん中に位置するマンダルーヨンなどがいいかなと思う。ただ児童養護施設が決まらないと」

ロメロ「マンダルーヨンかあ。マカティに近いいのにごちゃごちゃしてるし、いいんじゃない？」

346

○トンド・墓地・テイトボーイの家・中

ネルソン、警官2名、テイトボーイ、リガヤ、ソファに座りながら、話している。

警官1名、見張っている。

ネルソン、リガヤに盗聴器を5個渡している。

リガヤ「2 c m 四方くらいね。もっと小さいのはないの？」

ネルソン「これが一番小さい」

テイトボーイ「これだと生地と生地の上に縫い込むしかないな」

リガヤ「ジーンズのベルトあたりに縫い込めばわからないかも」

ネルソン「電池内蔵なので約30時間盗聴可能、電池が切れたら外して、新しいものに交換してほしい。やってみてくれるか？」

リガヤ「取り付いたら連絡する」

ネルソン、警官1に向かって、

ネルソン「俺は面が割れているのでロビンに近づけない。電波は50 mしか届かない。何とかして接近して信号を拾え！」

○ニューポートシティ・五つ星のホテル・日本料理店

湯野、厨房で働いている。

リム、三枝、厨房を覗いて、湯野に挨

拶している。

リム、三枝、ドンドン、食事をして
いる。

リム「ここに来ると日本料理の神髓が味わ
える」

三枝「まさにそうですね。理事を引き受けて
くれてありがとうございます」

リム「名前を貸すだけだぞ」

リム、写真と図面を見せている。

リム「場所はサンタアナで、私立のシニアハ
イスクールだった。教室は35あって1室

348

に20人は楽に住める。2段ベッドを置く
とか、工夫次第で30人でもいけると思う。

1000人は楽に収容できる」

ドンドン「NPOなので賃料は優遇されてい
るが、政府も全面的に信用しているわけ
はない。契約は1年ごとの更新で、万が一
問題が起きれば即時退去です」

三枝「よく探しましたね。さすが副市長！こ
こで契約してください。お願いします」

ドンドン「わかった」

三枝「これで本格的にスタートできます。この児童養護施設の近くで本部の事務所を探します」

○トンド・パパジと三枝の家・三枝の部屋

アイナ、アラ、部屋の壁やパソコン、ドアや扇風機などいたるところにべたべたとハローキティとクロミ、ラブブのシールを貼っている。

キカイ、部屋を覗きながら、

キカイ「勝手にシールを貼って！　ボスに怒られるよ」

アイナ「怒らないもん」

キカイ「あんたたちには甘いんだから」

アラ「ボスはラブブが好きなんだよー」

キカイ「嫌がったら全部きれいにはがすのよ」

○サンタメサ・ロメロの家・内

アンジェリン、ロメロ、カミール、エ

リ、春巻きを食べ、ライチジュースを飲んでいゐる。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

4人の子供たち、スマホで遊んでいる。

アンジェリン「施設が問題なければ、子供たちは行くことになる。カミールとエリはどうする？　ここから通う？　それとも住み込み？」

カミール「住み込みがいい。スラムから抜け出せる」

エリ「私も」

アンジェリン「まかないつきかどうか、まだ決まっていない。それに給料は安いよ」

カミール「食事はただにしてほしいな」

アンジェリン「交渉はするけどね。それから
保母さんに向いてる人やボランティアがい
たらどんどん紹介して、子供は1000人
くらい集める予定だから」

エリ「わかった、場所は決まったの？」

アンジェリン「サンタアナだよ」

カミール「1000人って大変だよ。食事の世話に、トイレやシャワー、掃除も」

アンジェリン「一気に1000人来るわけじゃないから。徐々に増えていく」

ロメロ「俺は施設には行けないの？」

アンジェリン「ロメロはここでしょう。カミールと離れ離れになるのは嫌なの？」

ロメロ「カミールは何人かいる彼女の一人だったんだけど、働いてる姿を見てたらどんな惹かれていって、今は俺の一番の彼女。離れるなんて考えただけでもさみしい」

351

カミール、ロメロを見つめている。

エリ、カミールにピースサイン。

アンジェリン「へーいい関係になったんだ。

ロメロ！ のろけてないでさっさと支部の場所を探さないと」

ロメロ「そうだよな」

○ トンド・パパジー、三枝の家・三枝の部屋
三枝、帰ってくる。

アイナ、アラ、部屋を覗いている。
三枝、ドアを開け、ゲラゲラ笑っている。

三枝、アイナとアラを見て、
三枝「ははは、よくもまあ、こんなにたくさん貼ってくれてありがとう、殺風景だもんな」

アイナ、アラをつついている。
キカイ、ドアを開け、様子を窺っている。

アイナ「もっと貼ってもいい？」

三枝「いいよ。アイドルのシールも欲しいな」
アイナ、アラ、顔を見合わせている。

アラ「やったー、シールを買いに行こう」

キカイ、やれやれといった表情、
キカイ「ボス、この子たちに甘すぎる。もっと怒っていいよ」

三枝「危険なことをしたりしたら怒る」
キカイ「それはわかるけど」

アイナ、キカイにあっかんべーをして

いる。

○サントアナ・STSC児童養護施設・前

アンジェリン、カミール、エリ、三枝、

建物を見上げている。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

アンジェリン「広い、こんなに大きいとは。

どうやってこの施設を運営していくの？」

三枝「考えていたら頭が痛くなった」

カミール「なるようになる。なんとかな

るなる」

三枝「フィリピンスタイルだな」

カミール「何人来るかわからないし、考えた

って意味がない」

エリ「やってるうちに見えてくるわよ」

カミール「まずは人を集めて掃除。それが終

わって、寝室、キッチン、ダイニングルー

ム、トイレにシャワー」

アンジェリン「そうだよね、カミールって頼

りになる」

カミール「私たちの食費をただでお願いします」

三枝「住み込みだもんな。了解した」

カミール、エリ、にっこり笑っている。

○ トンド・パパジーと三枝の家・近所

アイナ、ラブブの衣装。

アラ、クロミの衣装。

女友達2人も仮装。

キカイ、離れたところから見ている。

ハロウィンかぼちゃバケツを持ち、

家やお店を回り、T R I C K O R

T R E A Tと言いながら、キャンディ

やチョコを入れてもらっている。

○ トンド・墓地（深夜）

大勢の墓参り客が訪れている。

お墓が色とりどりの花や灯り、ろうそ

くで飾られている。

あちこちで音楽が流れている。

大きなお墓に10人ほどが集まり、食事をしている。

テイトボーイ、リガヤ、コリーナ、輪の中にいる。

パパジー、メイリオン、歩きながら、テイトボーイに手を振っている。

テイトボーイ、立ち上がり、パパジーのそばに、

テイトボーイ「おう、二人揃ってどうした？」

パパジー「何十年も住んでいたお墓のオーナーに挨拶してきた。今日はALL S A I

355

NT DAYで毎年、オーナーが必ず来て、一夜を過ごすから」

テイトボーイ「長い間、住んでいたからな。

こっちに來て一緒に食べよう」

メイリオン「いやー、オーナーに散々勧められて、もうお腹いっぱい、これ以上何も入らない」

○同・ロビンの家の近く

周りの喧騒を横目で見ながら、警官1，
薄汚れた服装、ひげもそらず、裸足で、
無人の墓にもたれかかっている。誰も
見ていないのを確認して、受信機をオ
ンに、イヤホンで音声を聞きながら、
スマホに録音している。

○パヤタス・小さなビルの1階

2日後。

スラムの入り口付近。

デレク、パパジー、テイトボーイ、支
部の物件を見ている。

パパジー「ここでもいいんじゃないか、入口に
近いし」

テイトボーイ「広さもこんなものだろう」

デレク、ためらいがちに、

デレク「聞きたいんだが、もしかして俺がパ
ヤタスの支部長になるの？」

パパジー「そうだよ」

デレク「えええ、俺が支部長！ 本当に？ 部

下を雇ってもいいの？」

ティトボーイ「お前は頼りない。まあ仮の支部長だな。仕事は親を説得してストリートチルドレンを施設に連れていくこと。部下はそれができるやつじゃないとな」

デレク「うんうん」

ティトボーイ「あーその返事！ 聞くだけで心配になる」

○サンタアナ・商業ビルの1階

ビルは古いが大通りに面している。児

童養護施設が先に見えている。

三枝、ドンドン、見ている。

ドンドン「本部はここがいいな。家賃は少し高いけど、バス停も近いし、何より目立つ、大きい看板も掲げられる」

三枝「理事長室は品格のある部屋にしたい。お金をかけたいのですが、いいですか？」
ドンドン「安心感と信頼感を与えるような部屋ならそれでいい」

三枝「落ち着いた色調で、柔らかな照明、壁には子供たちの書いた絵。家具やソファは重厚なものにします」

○サンタメサ・線路わきのスラム近辺
ロメロ、カミール、パパジー、見ている。

雑居ビルの1階。

パパジー「サンタメサ支部はここしかない」
ロメロ「決まってよかった。さあやってやろうじゃないか」

カミール「よっ、支部長、がんばれよ」
ロメロ、舌を出して笑っている。

○トンド・墓地付近

入り口近く、一軒家。
アンジェリン、テイトボーイ、パパジー、見ている。
パパジー「ここは墓地の外だけど、墓地に行くにはここを必ず通るから、いいんじゃない

いか。建物は汚いけど、ペンキを塗って少し金をかければ悪くない」

アンジェリン「いいよね」

テイトボーイ「よし、決まり」

アンジェリン「児童養護施設に本部も、3つの支部も決まったね。明日にでも申請書類をドンドン理事長と出してくる。それとロメロのクラウドファンディングが立ち上げられる」

パパジー「よっしゃー、IT'S JUST BEGINNING。始まりだ」

359

○ トンド・墓地・ロビンの家の近く

警官1、薄汚れた服装、ひげもそらず。

裸足で、墓にもたれかかりながら受信機を見ている。

ロビンとジミー、警官1の目の前に立っている。

ロビン「お前、ここで何をしているんだ。その手にあるものを見せろ」

警官1、慌てて受信機をポケットに仕舞おうとする。

ジミー、受信機を取り上げようとする。
警官1、取られまいと抵抗するが、ロビンに右手を掴まれ、あっけなく奪われてしまう。

ジミー「これはなんだ？」

ロビン「盗聴器の電波を受信する機械だな。

お前、警官か？ 姑息なことしやがって」

ジミー、受信機を踏みつぶしている。
遠くから見ていたネルソン、警官2、慌てて駆けつけてくる。

ネルソン「こら、ロビン、なんてことをしやがる」

ロビン「ふん、ネルソンか！ 凝りもしないでつまらないことしやがって、堂々と逮捕してみろ」

ネルソン「覚悟しておけ！ 必ずお前を捕まえるからな」

ロビン「それで盗聴器はどこに仕掛けた？」

ネルソン「盗聴器？ 何の話だ。気になるなら探してみろ」

○同・テイトボーイの家・中

テイトボーイ、リガヤに謝っている。

若者、立っている。

テイトボーイ「すまない。盗聴していることがばれた。幸いにも盗聴器は見つかっていない。それでだ、あの子供をここに連れてこれないか？ ロビンの野郎は蛇みたいなしつこい男だから盗聴器がどこにあるか必ず突き止める。見つければなにをされるかわからない。ここまで連れてきてくれたら、俺が匿う」

リガヤ「何かあったら私もあの子の母親に顔向けができない。あんたを信じてたのに」

ネルソン、やってくる。

若者「ネルソンが来た」

テイトボーイ、ネルソンに詰め寄っている。

テイトボーイ「何やってるんだ。ばれないように慎重にやれよ。子供に何かあったらどうする。責任とれるのか。結局、俺が尻ぬぐいしなくちゃならなくなった」

ネルソン「すまない。埋め合わせはするから、

あの子供は助けてやってくれ」

テイトボーイ「言われなくてもやる」

○サンタアナ・STSC児童養護施設・内

アンジェリン、ロメロ、カミール、エリ、ビログ、子供3人と赤ちゃんを連れて
362
いている。

幼児部屋にはずらっと2段ベッドが置かれて
いる。子供4人はベッドに潜り込んでいく。

隣の乳児部屋にはベビーベッドが10台置
かれている。

ダイニングルームには長机、椅子が配置
されている。

スタッフルームにカミールとエリがベ

ッドを運び込んでいる。

アンジェリン「どんどん子供が入ってくるから、急いでスタッフを掻き集めなくては。男性も必要ね」

エリ「何人かに声をかけたから、今日来てくれる」

アンジェリン「来てくれた人は全員採用する。ただし最初の1か月間は研修期間。適性がなければやめてもらう。それでいい？」

エリ「わかった」

カミール「おいしい食事を作れる人がほしいな」

アンジェリン「メイリーンに聞いてみるわ」

○ トンド・墓地・ロビンの家・内

ロビン、ジミー、少年たち、盗聴器がないか、片っ端から調べている。コンセントを分解し、電球を取り外し、棚を動かし、子供のおもちゃを一つずつ調べている。

ロビン「くそ！　どこに仕込みやがった。部屋の中にないとなると、外か！　探すのに骨が折れる」

ジミー「盗聴器を見つける機械を買わないと」
ロビン「そうだな。キアポに行けばあるだろう。買ってくる」

ロビン、家から出ていく。
リガヤ、母親、ロビンが出て行ったのを見て、盗聴器をつけた子供を探している。

リガヤ、近くにいた少年に聞いている。
少年、指さしている。

リガヤ、母親、そちらに向かって歩き出す。

母親、子供のそばに行く。

母親「帰っておいで」

子供「いやだ。ここにいる」

母親、無理矢理、子供を引っ張っていく。

子供、暴れている。

ジミー、走ってくる。

ジミー「子供が嫌がってるじゃないか」

母親「あんたが口出しするな。餓鬼のくせに。」

この子は私の子供」

ジミー「ふん、いつもは食べ物も与えず、ほ

ったらかしておいて急に母親面かよ」

リガヤ「調子にのってるんじゃないよ。何様
なんだ」

母親、リガヤ、嫌がる子供を力づくで
連れていく。

○同・テイトボーイの家・前

リガヤ、母親、子供を連れて来る。

若者、大声でテイトボーイを呼ぶ。

テイトボーイ、飛び出してくる。

テイトボーイ「無事でよかったな」

リガヤ「ロビンがたまたま出かけたので、う
まくいった」

テイトボーイ「できたばかりの児童養護施設
がサンタアナにある。そこにはブログもい

るから、そこへ行こう。もちろん、気に入らなければいつでも出て行っにかまわない。・・・とは言ったものの、実は俺も行くのは初めてなんだ」

母親「見てから決めていい？」

ティトボーイ「おう」

リガヤ、考え込んでいるが、

リガヤ「よし、私も行く」

○マカテイ・レガスピビレッジ・湯野のマン
ション・リビング

366

三枝、湯野、アンジェリン、マイキー、
メロディ、ベビーシッター、メイド、
鯛焼きを食べ、抹茶ラテを飲んでい
る。

三枝「マイキーさんもメロディも元気でなにより、湯野さんとマイキーさんはうまい
ってるようで。アンジェリンは湯野さんの
ところに行くと言うと、喜んでついてきて
しまっただけにすみません」

湯野「アンジェリンさんが来るとメロデーも
マイキーも喜ぶから大歓迎」

アンジェリン、舌を出している。

アンジェリン「ここに来ると毎回毎回、不思議な見たこともない食べ物に出会えるの」

三枝「そうだよな。鯛焼きなんて俺も初めて
フィリピンで見た。さして、今日はお願
いがあって来ました。ストリートチルド
ンを半減させるNPOの名前はSAVE
THE STREET CHILDREN
といいます」

湯野「ほう」

三枝「サンタアナに児童養護施設を借りるこ
とが決まりました。そこには最大1000
人受け入れるつもりです。ただ、私には食
事を作るための厨房の知識がまったくあり
ません。それで湯野さんに厨房機器の手配
をお願いできないかと思い、相談に来まし
た」

湯野「とうとう、どん底から這い上がってき

たな」

三枝「湯野さんが投資してくれた100万が
本当にありがたかった」

湯野「あの金が役に立ったとは。そうか、よし！
引き受けた。今日は暇だからその施設とやらに行こう」

マイキー、三枝を見て、

マイキー「ボランティアは募集していますか？
サンタアナなら遠くないし、少しでもお役に立てたら」

三枝「ありがとうございます。まだボランティア
ニアについて、詳細が決まっていけないので、
わかり次第、アンジェリンから連絡させます。
その時はぜひ参加してください」

マイキー「私も湯野さんに行っている？」

三枝「もちろん、アンジェリン！一緒に行く
か？」

アンジェリン「私はメイリーンさんのところ
に行く約束が・・・厨房のスタッフを探さない
と、その後、ドンドン理事長と書類の

提出」

三枝「そうか、後でおいしいものでも食べに行こうかと思ったのだが」

アンジェリン、固まっている。

アンジェリン「えっえっえ、おいしいもの？」

湯野「三枝がからかってるだけ。メロデイが喜ぶから、ジョリビーには寄るけど」

アンジェリン、ほっとしている。

○ トンド・パパジー、三枝の家・前

アンジェリン、やってくる。

アイナ、アラ、ぬいぐるみを投げ合って本気で喧嘩している。

メイリーン、キカイ、アンジェリンに手を振っている。

アンジェリン、アイナとアラの間に入っている。

アンジェリン「アイナ、アラ、喧嘩しちゃダメでしょう」

アイナ「アラなんか大嫌い」

アラ、アンジェリンの陰からアイナを蹴っている。

アイナ、アラの髪を引っ張っている。

アンジェリン「はいはい、そこまで」

アンジェリン、アイナ、アラをしつかり両手で押さえている。

メイリーン「仲良くしてると思ったら途端に喧嘩、それでまた何故かすぐに仲良くなる。

いつものことだからね」

アンジェリン「相談があるの。施設で食事を作ってくれるリーダーを探している。メイ

リーンさんならいい考えがあるかなと思つて」

メイリーン「私に来てほしいのでしよう？」

アンジェリン、親指を立てている。

アンジェリン「うん、でもお店をオープンしたばかりでいくらなんでも無理かなと思つて」

メイリーン、キカイの目を覗き込んで、メイリーン「キカイが行きたいなら、それも

いいかな！。ここにいたってたいした給料も払えないし、今は料理の半分はキカイが作っているから、役に立てるかもね」

キカイ「大量に作るのでしょうか？」

アンジェリン「今はスタッフ込みで20人くらいだけど、どんどん増えてくる。いずれ1000人は行くと思う。場所はサンタアナで住み込みでもOK。給料は安いけど、食費はただ」

キカイ「やってみたいけど、できるかな？

1000人って気が遠くなる人数だし、厨房もすごい設備が必要でしょう」

メイリーン「手伝いがいるね。うちの従業員も2人なら連れていっていいよ。こちらはなんとかする」

キカイ「挑戦するか！」

アンジェリン「厨房の設備については今、専門家と打ち合わせていると思う。あと内緒だけど、キカイはボスの家族みたいなものだし、臨時ボーナスが出るかもね。これは

私からは約束はできないけど」

キカイ「やるー、手伝いを2人連れてすぐにでも行く」

アンジェリン「決まりっと」

○サンタアナ・STSC児童養護施設・ゲート

ライフルを携帯している強面のガードマン2人がいる。

テイトボーイ、リガヤ、母親、子供、ゲートでガードマンに止められている。

ガードマン「名前を教えて」

テイトボーイ「テイトボーイ、トンド墓地の支部長。子供を預けに来た」

ガードマン、電話している。電話を置いて、

ガードマン「カミールさんが迎えに来ます」

カミール、走ってくる。

テイトボーイ、大げさに手を振っている。

テイトボーイ「おっ！働いているなあ」

カミール、右手を挙げてから、ガードマンと話している。

ガードマン「テイトボーイ様とお連れの方、

どうぞ」

リガヤ「厳しい」

テイトボーイ「これぐらいやらないとな、子供の安全のためだから」

カミール「この子供はうちで預かるの？」

テイトボーイ「そのつもり、中を見てから決めるけど。こちらはビログの母親のリガヤ

さん」

リガヤ「息子がお世話になっています」

カミール「ビログは元気ですよ、少しやんちゃなところはあるけど。さあ行きましょう」

車がやってきて、ドンドンが降りている。

テイトボーイ「ちょっと待って、ドンドン理事長が来た」

カミール、すぐにガードマンと話して

いる。

ヴィルマ、赤ちゃんを抱きながら降りている。

運転手は車を駐車場に停めている。

ガードマン、敬礼している。

テイトボーイ「こんにちは、テイトボーイです。トンドの墓地の支部長です。ちょうど保護するかどうかの子供を連れてきたところですよ」

ドンドン「ご苦労様、君には世話になった」

テイトボーイ「あれが初めての仕事でした。

374

理事長が決心してくれたおかげで俺の人生ががらりと変わりました。もしかしてその赤ちゃんが・・・」

ヴィルマ「ヴィルマです。ええあの時の赤ちゃんです。初めましてと言いたいのですが、実は病院で一度お会いしています。どんな夫婦か見たくて、部屋を掃除していたところ、テイトボーイさんが来られて、その時、計画無痛分娩の話をしていましたね」

テイトボーイ、目をつぶって思い出そうとしている。

テイトボーイ「計画無痛分娩の話は覚えているけど・・・ヴィルマさんのことは・・・うん、思い出せない」

ヴィルマ、喜んでいる。

ヴィルマ「変装が完璧だった」

テイトボーイ「さすが！」

テイトボーイ、赤ちゃんの手を握っている。

テイトボーイ「わー握り返してくれた。大きくなっただなあ、感激です」

テイトボーイ、目頭を押さえている。

カミール「こら！ テイトボーイ、やくざなお兄さんがうるうるしてるんじゃないよ。

似合わない」

テイトボーイ「うるせー」

カミール、ゲートを見ている。

カミール「あれ、ボスがやってきた」

三枝、湯野、マイキー、メロディ、ベ

ビーシッター、タクシーから降りている。

三枝、みんなを見て驚いている。

ドンドン、湯野に駆け寄る。

ドンドン「湯野さん、お久しぶりです。リムの息子のドンドンです」

湯野「おー久しぶり、三枝から聞いたぞ。理事長になるんだって、それにしてもでかいことをやるもんだな。これだけ大がかりとはびっくりした。本気で取り組まないとな」
ドンドン「はい、それはもう覚悟しています。ところで今日は？」

湯野「三枝に頼まれて厨房を見に来た」

子供たち、退屈そうにしている。

三枝「ドンドンさん、俺たちは厨房に行きます」

カミール「さあ行くわよ。子供がいらいらしてるわ」

全員歩き出す。

○同・幼児部屋

リガヤ、母親、子供、テイトボーイ、カミール、ドンドン、ヴィルマ、入っていく。

ビログ、子供たち、スマホで遊んでいる。

エリ、スタッフたち、見ている。

ビログ、リガヤを見つけ、抱きついて
いる。

リガヤ「元気だった？」

ビログ「うん」

リガヤ「ここは楽しい？」

ビログ「うん、来月から学校に行くんだよ」

リガヤ「良かったねー」

リガヤ、子供を指さして、

リガヤ「この子覚えてる？」

ビログ「うん」

リガヤ「もしここに来たら仲良くしてくれ
る？」

ビログ「いいよ」

他の子供たちも子供の周りを囲んでいる。そのままベッドに連れて行き、スマホで遊んでいる。

母親「楽しそうだし、墓地にいるより安全だわ。預けます」

ティトボーイ「忘れていた。盗聴器を外さなきゃ」

母親、子供のズボンを脱がして、スタッフにはさみを借りて、盗聴器を取り出して、ティトボーイに渡している。カミール、母親と話している。

カミール「それじゃあ手続きをしますので事務所に行きましょうか」

母親、子供、カミール、出ていく。リガヤ、エリに話しかける。

リガヤ「スタッフは募集しているの？」

エリ「はい、まだまだ足りないのです」

リガヤ「私もここで働けないかな？」

エリ「1カ月は研修期間で適性がなければやめさせられます」

リガヤ「そうだよね。ブログの兄弟があと二人いてその子たちもここでお世話になるというのは甘えすぎですか？」

エリ「他の子供たちも平等に扱ってくれるなら、いいと思いますよ」

リガヤ「わかりました。よく考えてまた来ます」

テイトボーイ、ドンドンと話している。

テイトボーイ「今日は視察ですか？」

ドンドン「これからアンジェリンと申請書類の提出に行くんだが、時間があつたので寄つてみた。ヴィルマも見てみたいと言うし。

みんな張り切って働いているようだな」

テイトボーイ「俺たちにできることがあれば何でも言うてください。選挙の応援だって行きますよ」

ドンドン「うれしいことを言ってくれるじゃないか、その時は頼む」

○ トンド・墓地・ロビンの家

ロビン、盗聴器を発見する機械で部屋の隅々まで調べている。反応がないので部屋の外や、少年たちが集まっている広場も調べている。

ジミー、見ている。

ロビン「おかしいな、全く反応がない。もう取り外したのだろうか」

ジミー「ロビンが出て行った後に、母親が2人来て、嫌がる子供を無理やり連れていったけど」

ロビン「くそ！、多分その子供に盗聴器をつけてたんだろうな」

ジミー「そうだったか、まんまとやられた」
ロビン「そいつの家はわかるだろう！ 見て来い」

ジミー、走っていく。

○ケソン・社会福祉開発省（OSWD）・内

4階建て。古い。

ドンドン、カバンを持って、

アンジェリン、書類ケースを小脇に抱えてDSWDの敷地内を歩いている。

アンジェリン「緊張しています」

ドンドン「今日は提出するだけだ」

アンジェリン「何回も見直しましたから、書類は完璧だと思うのですが」

ドンドン「さあ行こう」

二人、建物内に入っていく。

○サンタアナ・SAVE THE STREET

ET CHILDREN (STSC) 本部

381

SAVE THE STREET C

HILDERENと書かれた大きな看板が取り付けられている。

パソコンや机、棚、ソファが置かれている。

理事長室は信頼感を示す雰囲気。観葉植物が置かれ、デスクと椅子は重厚感がある。ソファやラウンジチェアは柔らかさがある、壁にはSTSCの活動

写真。

財務部長室も落ち着いた雰囲気。

三枝、パパジー、理事長室を見ている。

ロメロ、テイトボーイ、新しいソファにふんぞり返っている。

ロメロ「サンタメサ支部に支部長室作ってもいいかな」

パパジー「10年早い、却下」

テイトボーイ「トンド墓地支部は？」

パパジー「意味ない」

三枝「財務部長室なんていらないと言ったの

だが、アンジェリンが資金を集めるんだから、それなりの部屋が必要と譲ろうとしない。結局押し切られてしまった」

パパジー、テイトボーイとロメロを横目で見て、にやりと笑い、

パパジー「アンジェリンはさすがだな。お前らみたいにかっこうしたいってやつとは大違い」

三枝、ソファに座る。

三枝「BABY BOXを設置したい。日本では赤ちゃんポストというのが。保育器を備え、温度管理をして、夜間に預けられても朝まで安全に過ごせるような設備だ」

パパジ「それって、さまざまな事情で育てることができなくなった赤ちゃんを誰にも気づかれずにそっと預ける箱ということ？」

三枝「そうだ！ 赤ちゃんを入れると自動でロックされ、外側からはもう開けられない」

テイトボーイ「それはいい。ボスはいいいこと考えるなあ」

383

パパジ「俺にまかせてくれるか？」

三枝「他の支部にも置きたいから4つ頼む」

パパジ「それは大変だ。一つ一つサイズが違う」

ロメロ「はしゃいでいる。

ロメロ「クラファンのサイト、どんどん良くなる。これならマスコミにも取り上げられそうだし、SNSでも話題になる。資金も集まってくるだろうな」

○ トンド・墓地・ロビンの家・内

ロビン、眉をしかめて椅子に座っている。

ジミー、戻ってくる。

ジミー「母親も子供もいない」

ロビン「チツ、やられたな。母親とガキにケジメをつけてやりたいが、今回は見逃してやる。警察を敵に回すことになるからな」

ジミー「俺がやってやろうか。未成年だから捕まらないし」

ロビン「あの母親とガキはネルソンに頼まれただけだろう。だがな、俺は決して許さない。

それまでなにもするな」

第9話

○サンタアナ・児童養護施設・厨房

湯野、業者に指示を出している。

業者は6人、大量調理を行うための設備、冷蔵庫、冷凍庫、皮むき機、スライサー、洗浄機、回転窯、フライヤー、食器洗浄機などを搬入している。

キカイ、スタッフ2名、三枝、アンジエリン、エリ、マイキー、感心しながら眺めている。

x x x

業者が搬入を終えて、湯野がキカイたちに話している。

湯野「キカイさんはパパジの奥さんの妹さんなんだ。パパジには世話になった」

キカイ「おやまあ、パパジも五つ星の料理長に感謝されるなんてすごい」

アンジェリン「湯野さんの作る料理って舌がとろけるほどおいしいの。世界一のシェフなんだよ」

湯野「アンジェリン！ さすがに褒めすぎ！
でもそこまで言われたら、いつかここでみ
なさんたちにまかないでも作ってやるか」
キカイ、アンジェリン、三枝、エリ、
手を叩いて喜んでいる。

三枝「またまたあ、簡単に約束しちゃってい
いのか？ 忙しいのに」

湯野「ははは、さあて設備の説明をするから
よく聞いて」

キカイ、スタッフ、アンジェリン、エ
リ、湯野のそばに集まっている。

○パヤタス・STS パヤタス支部・前
デレク、スタッフ2名、看板を取り付
けている。看板にはSAVE THE
STREET CHILDREN（S
TSC）PAY ATAS・BRANC
Hと書かれている。
机、パソコン、ソファなど設置されて
いる。

パパジ―やってくる。

パパジ―「おっ新しいスタッフか、よろしくな」

デレク「こちらはパパジ―、役職はなんだっけ？」

パパジ―「支部を取りまとめる本部長」

スタッフ2名、パパジ―に握手している。

スタッフ1「よろしく、S I R パパジ―」

デレク「おお、パパジ―にS I Rがつくのか、

この前までポン引きだったのに出世したな

あ」

パパジ―「いやー、まさに破格の出世だな、でも俺だけじゃない。お前だって支部長だろ？ デレク、今までみたいな甘っちょろい動きじゃ通用しない。他の支部に負けたら容赦なく降格させるぜ」

デレク「そうだよな。支部長になれたこのツキを無駄にしていたまるか。他の支部には絶対に負けない。それで何？ 心配で見に来

た？」

パパジー「BABY BOXを入り口横に作る。それでサイズを計りに来た。内容はこの紙に書いてあるからよく読んでくれ」

デレク、スタッフ、覗き込んでいる。
デレク、両手を大きく上げて、思い切り振り下ろしている。

デレク「あーこれはいい」

○ケソン・社会福祉開発省の近くのレストラ
ン、入口

リム、タン、ドンドン、三枝、ヴィル
マ、立ちながら話している。

ドンドン「タンさん、お忙しいのにわざわざ
お越しいただいて、さらに理事にまでなっ
ていただいてありがとうございます」

タン「三枝がNPOを立ち上げて、ドンドン
が理事長になると聞いたら、応援しないわ
けにはいかないだろう」

三枝、会釈している。

リム「タンがテレビ局の社長と懇意だと聞いて、頼んだ」

タン「一番仲の良かった同級生なんだ。まかせてくれ」

リム「俺も社会福祉開発省の局長は以前からつきあいがあったって、問い合わせたら感触は悪くなかったから、うまくいくと思う」

三枝「よろしくお願いします」

○ 同・内

リム、タン、三枝、ドン、ヴィルマ、社会福祉開発省の局長、テレビ局の社長、食事している。

タン「わざわざすまないな。検討してくれたか？」

テレビ局の社長「タンに頼まれたら断れない。それにこのNPOは内容を見れば応援したくなる。車で移動すると必ずといっていいほどストーリートチルドレンの姿を目にする。フィリピンはアセアンの中でもベトナムと

並んでまだ下位中所得国だ。政府は上位中所得国を目指すと言っているが、路上に子供たちが溢れている現状、できるわけがない。笑わせるなと言いたい。だからこそ我々はS T S Cに大いに期待する。テレビ局、系列のラジオ局、新聞社も含めて、全力で支援させてもらう」

ドンドン、右手を胸に当てている。
ドンドン「ありがとうございます」

テレビ局の社長「具体的にどういう支援がいいのかは関係部局と相談してから決めるが、まずは取材をさせてくれ。ニュースで扱って反応をみたい」

ドンドン「取材はいつでもOKです」
リム「社会福祉開発省はどんなんだ？」

社会福祉開発省の局長「社会福祉開発省も了解した。申請書類も完璧だし、ストーリートチルドレンを減らし、B A B Y B O Xのアイデアもいいと思う。S T S Cを正式なN P Oとして認めよう。養子の斡旋も大いに

やってくれ。ある程度実績ができれば政府からの支援もあるだろう。そしてドンドンさんが下院議員に当選するように願っている」

ドンドン「ありがとうございます」

リム、ドンドンと三枝に向かって

リム「実績はまず、目に見える形で示さなければならぬ。マニラに6万人もいるストリートチルドレンが1000人減ったところで、街中での変化を実感するのは難しい。

が、児童養護施設がストリートチルドレンで満杯になっていけば、支援者はその成果を直感的に理解できるし、支援の必要性を明確に感じるだろう。できるだけ早く1000人集めることだな。がんばれよ」

三枝「がんばります」

ドンドン、三枝、満面の笑み、テーブルの下で強く握手している。

○同・入り口

リム、三枝、歩きながら話している。

リム「また何かあったら、遠慮せずに言ってくれ。しばらくは違法な斡旋は控えめにな」

三枝「はい、そのつもりです。軌道に乗るまでは我慢します」

リム「セバスチャンが会いたいそうだ。電話してやれ、ゴルフかもな？」

三枝「落ち着いたらゴルフも付き合いますが、今はさすがに無理です」

○サンタメサ・STS サンタメサ支部・中

SAVE THE STREET C

HILDERN (STSC) SANT

AMESA BRANCH と書かれ

た看板が取り付けられている。備品も

置かれている。

ロメロ、パソコンでクラウドファンデ

ィングのサイトにBABY BOXや

施設の動画を加えている。

スタッフ2名、見ている。

パパジー、業者2名、やってくる。

ロメロ、顔をあげて、

ロメロ「今日は何？」

パパジー「BABYBOXなんだが、業者に
見てもらわないとうまくいかない。おー、
新しいスタッフか。本部長のパパジーだ。
よろしくな」

業者、図面を見ながらサイズを測って
いる。

スタッフたち、パパジーに握手をして
いる。

パパジー「今な、理事長とボスは社会福祉開
発省やテレビ局の社長と会って、支援を頼
んでいる」

ロメロ「ものすごいことになってるな、スラ
ムに住んでる俺たちが、関わってるなんて
信じられない」

パパジー「だよな」

ロメロ「クラウドファンディングで200万
ほど今集まってるんだけど、それならもっ

ともっと増えそう」

パパジー「施設を見てたら金なんかいくらあっても足りそうにない。桁が二つぐらい違う。がんばってくれ、支部長」

ロメロ「その呼ばれ方がいい、グツとくるなあ。けど桁二つっていうのは2億必要ってことか」

パパジー「だな、まあ金のこととはさておいて、ボスから伝言がある。フェイスブック、インスタにホームページ、TIKTOK、X、をスタートさせろ。加えてボランティア募集にスタッフ募集も入れてくれ」

ロメロ「まかせて、急いでやるけど、ボランティアについて詳しく教えて？」

パパジー「奉仕活動だから無償で交通費もない。ただ、養護施設での宿泊、食事、おやつは提供される。最低、月に1回以上3時間程度は活動してほしい」

イアン、中を伺っている。

パパジー「覗いている奴がいるな、イアンじ

やないか」

ロメロ「あいつここで働きたがっている」

パパジー「めんどくさいやつだな。あれから何も話さず、謝りもしないで、こそこそ嗅ぎまわる。あんなやつにかまっている暇はない」

ロメロ「俺もあいつに足を引っ張られるのはごめんだ。俺が支部長でいられる間は、イアンとは一切関わらない」

パパジー、イアンには目もくれず出ていく。

395

○マカテイ・ダスマリナスビレッジ・セバスチャンの家・リビング

セバスチャン、三枝、カラフルなドーナッツを食べ、マンゴシェイクを飲んでいる。

セバスチャン「リムから聞いたぞ、NPOを立ち上げるんだってな」

三枝「無謀かもしれませんが、どういうわけ

か、一気に話が進んで、もう後戻りはできなくなりました」

セバスチャン「その話の続きは後日するが、今日来てもらったのはクリスのことだ」

三枝「問題ありのようですね」

x x x

（フラッシュバック）

クリス、メイドが去ったのを見て、赤ちゃんに近づき、恐ろしい形相で引っぱたいている。赤ちゃん、火が付いたように泣き叫んでいる。

メイド、泣き声を聞き、慌てて部屋に入り、大声をあげ、人を呼んでいる。

x x x

セバスチャン「先日、クリスは家庭教師の仕事を終えて、預かっている赤ちゃんに会いに行った。その時の様子をメイドが見た。それですぐさまクリスと赤ちゃんを引き離

し、もう会わせないようにした」

三枝「虐待ですね」

セバスチャン「家庭教師の仕事は完璧だったから、俺はまったく気が付かなかった。彼女は養父母に育てられ、幸せだったと言っていたが、どうやら真逆で虐待されて育ったらしい。それで仕返しをしたかったんだろうな」

三枝「そうでしたか」

セバスチャン「それで俺が赤ちゃんを育てようかと思ったが、どうも気乗りがしない。返金しろなんて言わないから引き取ってくれないか？」

三枝「そういうことでしたら・・・わかりました」

○サンタアナ・STSC児童養護施設・乳児部屋

三枝、赤ちゃんを抱いて入ってくる。
カミール、エリ、掃除している。

カミール、三枝に気が付いて、

カミール「どうしたの？ その赤ちゃん」

カミール、赤ちゃんを三枝から受け取る。

三枝「未成年がレイプされて生まれた赤ちゃんなんだが、引き取り先で虐待されて戻ってきた」

カミール「あああ、ロメロが関わった件だね。私はあの時、一度も見なかったんだけど。この子、どれだけ不幸なのよ？」

三枝「新しい引き取り先を見つけるから、こ

こでしばらく預かっておいてくれ」

カミール「大切に大切にしながらあげる」

○ショッピングモール・スーパーマーケット

キカイ、スタッフ、調理用器具や食器類を買い集めている。

三枝、アイナ、アラ、ボウル・まな

板・包丁・皿・スプーンなどでは

いになったカートを押している。

三枝、キカイと並んで、

三枝「どう？　仕事は慣れた？」

キカイ「まだまだ1これからだよ。住み込み

半分、通い半分でいこうかなと考えてる。

週に1日は休みがほしいし」

三枝「そうだな」

アイナ、アラ、カートをはったらかし
にしてお菓子売り場に行き、両手いっ
ぱいにお菓子を抱えてカートに入れて
いる。

〽〽〽

三枝「アイナ、アラ、後で買ってあげるから
戻ってきて。このカートの商品は仕事に使
うものだから混ぜるとややこしい」

アラ、アツカンベーをしている。

キカイ「アイナ、アラ、返してきなさい！」

アイナ、行こうとする。

アラ、寝転がって、仰向けになり、四
肢をバタバタさせて泣き叫んでいる。

三枝、茫然と見ている。

三枝「まいったな。こんな時はどうする？」

キカイ「怒ってもあやしても泣き叫ぶだけ、少し離れて、落ち着くのを待ちましょう」

キカイ、三枝、スタッフ、離れたところからアラを見ている。

アイナ、お菓子を返している。

他の客が見ているが、キカイはまったく気にしない。

三枝、感心している。

アラ、しばらくバタバタしていたが、渋々立ち上がり、キカイと三枝を見ている。

キカイ、動かない。

アラ、ゆっくりと近づいてくる。

キカイ「落ち着いた？　バタバタしてもだめなものはダメだよ。後で買ってあげるから、さあレジに行こう」

○サンタアナ・STSC・児童養護施設・中

テレビ局が取材に来ている。カミール、エリ、キカイ、取材を受けてい

る。

ロメロ、スタッフ、2人の子供と母親を連れてくる。

ロメロ、驚いているが、マイクを向けられると、喜んで取材に応じている。

○サントアナ・STSC・本部・中

テレビ局が取材に来ている。

ドンドン、アンジェリン、インタビュー

に答えている。

ドンドン「理事長のドンドンです。ストーリー

トチルドレンを半減させます。そのため

に・・・」

三枝、後ろで見ている。

○トンド・STSCトンド墓地支部・中

テレビ局が取材に来ている。タイトボ

ーイ、子供二人と共に、取材を受けて

いる。

タイトボーイ「BABY BOXは何らかの

理由で育てられなくなった赤ちゃんを
・ ・ ・」

○アラバン・ナネットの家・前

豪邸。大きな庭があり、プールが見えるが、水は入っていない。
三枝、ベビーカーを押しながら門を通
っていく。

メイドが門を閉めている。

ナネット、玄関の前にいる。

○同・リビング

ナネット、三枝を招き入れる。

三枝「エドナさんから聞きました。3年前に
二人のお子さんと旦那さんを事故で亡くさ
れたそうですね。慰める言葉もあります
が、毎日どのようにお過ごしなのでしょう
か？」

ナネット「教会に毎日行きます。後は病院
へ、更年期障害で体調が悪いので」

メイド、マンゴアイスクリームとレモ
ネードを運んでくる。

三枝「なんとなく、今回は直接、ご覧いただ
いたほうがいいのではないかと思います、赤ち
やんを連れてきました。生後6カ月の男の
子です。彼は未成年の母親がレイプされて
生まれました。さらにおじいさんに殺され
そうになるという過酷な経験もしていま
す。その後、養子として一度は引き取られ
たのですが、そこで虐待を受け、再び保護
されることになりました。多くの困難を乗
り越えてきた子ですが、現在は健康に過ご
しています。養子として迎え入れ、愛情を
もって育ててみませか？」

ナネット、赤ちゃんいつくしむように
抱いている。

ナネット「もう私は子供は授かることはあり
ません。生きる張り合いもなくしてしまし
て、誰もいないのにこんなに広い家で、こ
れからの人生、どう生きていくかいくら考

えても答えは見つからず、一人で侘しく生きるだけならいっそ死んだほうがましとさえ思うことがあります。そんな折、病院でエドナさんと養子の話をしていて、軽い気持ちで一度会ってみたいと言ったのが、まさか本当に赤ちゃんを連れてきていただくとは思わず、驚きました。もしかすると毎日、教会に通い続けたおかげかもしれませんね」

三枝「この子を育てることで少しでも笑顔が取り戻せるように思います」

ナネット「未亡人である私には現行の制度では裁判所から養子縁組の許可を得ることは難しい状況です。今まで法律を犯したことなど一度もありませんが・・・この子を育ててみたい。いくらお支払いすれば？」

三枝「500万です」

ナネット「それくらいなら今、お支払いできます。お金は一生かかっても使いきれないほどあります」

ナネット、金庫を開け、500万を渡す。

三枝、受け取ったが、

三枝「すぐに決めていいのですか？　日を改めてもいいですよ」

ナネット「赤ちゃんを見た瞬間に決めていました。迷いは一切ありません」

三枝「わかりました。お預けします。この子を幸せにしてください」

○トンド・パパジと三枝の家・三枝の部屋

405

三枝、お金を分配している。

パパジ、テイトボーイ、ロメロ、デレク、アンジェリン、カミール、エリ、キカイ、踊っている。

三枝、配り終えて、両手を前後に大きく振っている。

三枝「踊るのをやめて聞いてくれ！」

全員、踊りをやめている。

三枝「違法な養子斡旋はこれをもって当分ス

トップする。再開するのはS T S Cが軌道に乗ってからだ。それで今回だけ、いつもの2倍支払う。なぜなら一度斡旋した子供を引き取って、別の女性に斡旋したため、300万の支払先がない」

全員、歓声をあげ、再び踊りだす。

三枝、再び両手を振っている。

三枝「待って待って、話の続きがある。S T S Cは給料が安いし、当分、臨時収入はない。

この金は大事に使え」

アンジェリン「わかった。踊ってもいい？」

三枝「まだだ、違法な養子斡旋に関わるものは俺を含めて、ここにいる9人とする。これ以上は増やさない。この9人は死ぬまで秘密を抱いて生きていくことになる。なお、理事長や理事はこの件については一切関わらない。問題が起きれば、責任は俺たちで取る。それでいいか？」

ロメロ「サンタメサ支部長の俺が代表して言うておく。。。いいぜ。。。！ イェーイ。さ

あ踊ろう」

三枝、やれやれといった表情。

アイナ、アラ、友達2人、飛び込んできて一緒に踊っている。とうとうメイリンまで飛び込んできて、三枝と踊っている。

○チャイナタウン・日本語教室・中

三枝、授業を終えて、日本語で話している。生徒8人聞いている。

三枝「今日の授業はこれで終わります。余談

407

ですが、サンタアナにストリートチルドレ
ンの数を半減させるNPOを立ち上げ、財
務部長として関わることになりました。な
お、日本語教室の先生はこれまで通り続
けますので、これからよろしく。以上」

生徒たち拍手している。

三枝、照れくさそうに出ていくが、エ
ドナを見て合図する。

○チャイナタウン・マクドナルド・中

三枝、エドナ、食べている。

エドナ「へー先生はやめないんだ。みんな喜んでいたね」

三枝「拍手されて少し照れくさかった」

エドナ「墓地に住んでる先生がNPOの財務部長！ 出世したのねー」

三枝「もう墓地には住んでいない」

エドナ「引越したの？ おめでとう」

三枝、封筒を渡す。

三枝「以前、紹介してくれたナネットさんに養子を斡旋した。これはそのお礼」

エドナ「またまた貰えるの？ どうやったらそんなにうまくまとめられるの？ 本当にありがたいけど」

三枝「でも違法な養子斡旋は当分お休み。NPOに全力で取り組まないといけないから。また再開するときには連絡するけどね。でもエドナさんは日本に行ってるかもな」
エドナ「そうなるかも、わかった。今まであ

りがとう」

エドナ、ハグをして三枝の頬にキスをする。

○サ
ン
タ
ア
ナ
・
S
T
S
C
児
童
養
護
施
設
・
ゲ
ー
ト

大型バス、小型トラック、乗用車がやってくる。

ガードマン、停車させて中を確かめ、行けという合図。

そのまま駐車場に向かう。

駐車場には三枝、カミール、エリ、アンジェリン、キカイ、リガヤ、スタッフ数名、ビログ、子供たちが待っている。

バスからセバスチャンとタンとキムが降りてくる。

大型バスとトラック、自動車には荷物が山積みされている。

三枝、駆け寄ってくる。

三枝「突然、荷物を持っていくから待ってろ
って、驚くじゃないですか？　それも3人
お揃いで」

セバスチャン「いやあすまさん、思い立っ
たらすぐに行動しないとな」

三枝「あいかわらず、せっかちですねー」

セバスチャン「バスに大型トラックに乗用
車、3台を寄贈する。好きに使ってくれ、
当然だが全部中古車だぞ。たたし整備はき
っちりやっているから当分は故障しない。
おもちゃやゲームも入れておいたぞ」

カミール、子供たち、大歓声！

セバスチャン、手を振っている。

キム、三枝の肩を叩き、

キム「ずっと前に約束していた賞味期限切れ
の日本食材を持ってきた。それだけでは失
礼なので、トラックには韓国インスタント
ラーメン、サムギョプサル、プルコギ、キ
ムチ、おでん、トツポギ、韓国のり、冷凍
庫には韓国アイスクリーム。それにチョコ

レートやチップスなどお菓子類も大量に持ってきた。ラーメンは1万食以上あるらしい。冷凍庫、冷蔵庫も寄付するぞ」

子供たちはトラックを見上げて、大喜びしている。

三枝「ありがとうございます。韓国製品は人気があるので子供たちも大喜びです。降ろしてもいいですか？」

キム「もちろん」

アンジェリンたち、次々に商品を運んでいく。

スタッフ、台車で冷凍庫、冷蔵庫を運んでいる。

ブログ、段ボールを開けている。

カミール、注意している。

カミール「ブログ！ 段ボールを開けちゃダメ。後で」

三枝、深々と頭を下げている。

三枝「賞味期限切れの日本製品はさすがに子

供たちには食べさせられないので、私と湯野さんで全部食べます」

キム「おなか壊すなよ。壊しても文句を言ってくるな。ようやく約束を果たせた」

タン、小切手を三枝に渡している。

タン「薬でも持ってこようか、病気になった時に無料で診察するかとか考えたが、さすがに無理があるので、俺は小切手を渡す。1000万は少ないかもしれないが、俺が生きている限り、毎年寄付をする。それでフィリピンからストリートチルドレンを消し去ってくれ。これは中国人の悲願だ」

三枝、タン・セバスチャン・キムに握手をしている。

三枝「皆さんの期待に全力で答えたいと思います。今日はドンドン理事長は不在ですが、改めてお礼に伺わせます」

○ トンド・STSC トンド支部・内

業者、BABY BOXを設置してい

る。

受け入れ口にはBABY BOXの文字。その下に注意書きがある。注意書きには（赤ちゃんを入れたらすぐに扉を閉めてください。閉めると外側からは開けることはできません。匿名で預けることができます。インターホンでスタッフと話せますが、不在の場合は伝えたいことをメモに書いてください）と書かれている。

三枝、テイトボーイ、パパジー、アンジェリン、外から人形を入れて、確認している。

三枝「いいじゃないか、パパジー、残りの3つも頼む」

ネルソンやってくる。

テイトボーイ「迷惑な奴がやってきやがった」

ネルソン「おう、日本人！ 久しぶりだな。

俺の忠告を聞いてNPOを立ち上げたんだ

ろ
」

x

x

x

（フラッシュバック）

ネルソン「物売りなんかやめて、日本人にしかできないことを考えろ。少しはスラムの役に立つようなことをな」

x

x

x

テイトボーイ「お前のアドバイスなんて屁みたいなものだろうが。それはそうと俺に借りを返せよな。お前が盗聴器でどじったことと忘れないぜ」

ネルソン「やいやい言うなって、ところで

な、日本人よ」

テイトボーイ「ボスのことを日本人って呼ぶな。ぶっとばすぞ！」

ネルソン「おー怖！。前にも言ったが、貧乏な日本人はオーバーステイでも入管に収容されないと言っただろ、ところが今のお前

はどう見たって金を持っている。きっちり
しないと入管の餌食にされるぞ！」
アンジェリン「えー、ボス、まだオーバース
テイなの？ いい加減にしなさいよ」
三枝「パスポートは1カ月前に申請したので
取りに行く。ビザはそろそろやらないとは
思っていた」
アンジェリン「仕事はしなくていいから、早
くやって」
ネルソン「いいこと教えてやろう、お前が直
接入管には行くな、下手したら強制送還さ
れてしまう。下院議員とか政治家の知り合
いがいるんだろう。そいつに任せるのが一
番だぜ。金にかかるが就労ビザを取って、
一件落着。簡単だ」

○同・前

ロビンとジミー、ゆっくり歩きなが
ら、中の様子を窺っている。

ジミー「多分、テイトボーイだ。盗聴器を付

けた子供を母親がどこかに連れて行っ
たときも見かけた。ネルソンともよく話
して、ビログの母親ともな」

ロビン「そういえばビログも。他に何
人か、子供の姿が見えない。あいつ
NP Oの支部長なんだろう！ ストリ
ートチルドレンを半減させるだ
と！ できもしない理想を掲げ
やがって。静かにさせてやらな
きゃな。きっちりと思い知
らせてやる」

○サンタメサ・STS Cサンタメサ支部。内

スタッフ、テレビを見ている。

テレビにはロメロが映っている。

ロメロ、体をひねりながら目を大きく開いて見ている。

ロメロ「いいタイミングで子供を連れて行
きたな。クーーっ、だけど、失敗した。テレ
ビに映るのがわかっていたら、もっと洒落
た服を着ていったのに」

○サンタアナ・STSC本部・内

アンジェリン、三枝、ドンドン、テレビを見ている。

スタッフが歓声をあげている。

ドンドンとアンジェリンがインタビュ―されていて、三枝はドンドンの横に立っている。

ドンドン、スタッフに聞いている。

ドンドン「緊張してたからなあ、アンジェリンは落ち着いているのに、俺は声が上ずっている」

スタッフ「いいと思いますよ、わかりやすく

説明してますから」

ドンドン、息を大きく吐いている。

○パサイ・日本大使館・前

三枝、アンジェリン、ゲートから出てくる。

アンジェリン「やっとパスポート取れたね」

三枝、パスポートを見ながら、

三枝「わざわざついてこなくてもよかったのに」

アンジェリン「ボスは自分のことになる、まったく無頓着だから、私が見張つとかないとね」

三枝「はいはい、監視のお役目ご苦労様」

○サンタアナ・STSC・児童養護施設・ゲート

デレク、スタッフ、5人の子供と二人の母親を連れている。

いかついガードマンに止められている。

デレク、びびりながら、

デレク「あのあの、パヤタス支部長のデレクです。ストリートチルドレンと母親を連れてきた」

ガードマン「IDを見せて」

デレク、IDを見せる。

ガードマン、電話している。

エリ、走りながら手を振っている。

エリ、ガードマンと話してから、全員を案内している。

エリ「次からはIDだけで簡単に通れるよ」

デレク「おっかないわー。ここのガードマン」

エリ「デレクは初めてだっけ」

デレク「あー、ここの様子がよくわからないから、まずは子供を連れてきて勉強しよう
と
思
っ
て」

エリ「わかった。手続きするからついてきて」

エリ

○同・事務所・内

エリ、デレク、母親と子供たち、入ってくる。

スタッフが仕事をしている。

エリ「座って」

デレクたち、座る。

エリ「この子たちは？」

x

x

x

(フラッシュバック)

子供たち、布で口を覆い、ゴミを漁っている。ハエが無数に飛び交っている。

x

x

x

デレク「5人共パヤタスでゴミを漁って生活している。不衛生だし、危険だし、母親たちを説得して連れてきた」

120

エリ、母親たちを見ながら、用紙を渡している。

エリ「預けますか？ 食事から学校まで何もかも無料です。質問がありますか？ なければこの用紙にすべて記入してください」
母親1「会えなくなるのですか？」

エリ「いつでも会えます。引き取るのも自由です。私たちは子供を働かせていることに強く反対しています。学校に行き、大人に

なれば社会の一員として活躍できるよう、必要な支援を行います」

母親たち、用紙に記入している。

デレク、感心している。

デレク「エリ！　いつのまにそんなしっかりしたことを言うようになったの？」

エリ「アンジェリンと相談して覚えたんだ」

母親、用紙を渡している。

母親2「5人共預けます。何日か後に見に来ていいですか？」

エリ「いつでもどうぞ」

エリ、立ち去ろうとするデレクを呼び止める。

エリ「産後鬱の母親の赤ちゃんはどうするの？　養子に出せる？」

デレク「どうにもできないんだ。母親の症状が悪化して精神病院に入院してしまった。薬物療法やカウンセリングで治療しているけど、退院するのはいつになるかわからない」

エリ「わかった。長い目で育てるよ」

デレク「ありがとう」

○ トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋

日本の食材が山積みされている。

アイナ、アラ、うまい棒を食べている。

三枝、食材を見上げながら、ため息をついている。テーブルの上には梅干しと日本茶がある。

アラ、そっと手を伸ばし、梅干しを口に入れ、ものすごい表情になっている。

三枝、アイナ、大笑いしている。

○ サンタアナ・STSC本部・財務部長室

三枝、ビリー、キコ、キコの父親、ドンナ、ラニー、アンジェリン、ソファに座っている。

ラニー、二つのベビーカーの赤ちゃん

を見ている。

三枝「ご無沙汰しています。今日はお揃いで
どうしたのですか？ 赤ちゃんは二人とも

元気そうですね」

ビリー「いやあ、テレビを見ていたら、三枝
さんが映っていて、NPOを設立したと知
って驚きました」

三枝「私はただ立っていただけです」

アンジェリン「私がしゃしゃりでてしまった
から、ボスが話せなかったの。すみませ
ん」

ラニー「三枝さんって金の亡者かと噂してい
たんですよ。違ったようですね」

ドンナ「三枝さんは私にとっては真っ白い羽
の生えた天使。あのお金だってこういうこ
とに使ってくれるならすごくうれしくて」

アンジェリン、大笑いしている。

アンジェリン「天使って？ おっさんだよ」

三枝、アンジェリンに笑いながら、し
かめっ面。

三枝「ぶーーーーー」

父親「それで少しでもお役に立てたらと思つて、今日は来た」

キコ、カバンから小切手を出して、机の上に置く。

キコ「少ないけど小切手5枚持ってきた。少しは役に立つかな」

三枝、深々とお辞儀をしている。

三枝「ありがたく頂戴します。助かります」

ドンナ「それで以前、話したと思うけど、レズビアン、ゲイ仲間が子供を欲しがっている。そろそろ紹介してもいい？」

三枝「何か月か待ってもらえますか？ 今は

STSCが始まったばかりで違法な養子幹旋はストップしています。落ち着いたら必ず連絡します」

ドンナ「わかりました。待っています」

○ヴァレンズエラ・リムの家・ダイニングルーム

三枝、リム、ドンドン、リンロン、肉

まんを食べ、中国茶を飲んでいる。

ヴィルマ、赤ちゃんをあやしている。

三枝「お恥ずかしい話なんです、実は私は
オーバーステイの状況にあり、それを解消
するためにお力添えをいただけないかとお
願いに参りました」

ドンドン「三枝さんが強制退去させられると
本当に困る。親父、なんとかなるだろう！
頼む」

リム、とぼけた顔で、

リム「ありや、えらく丁重な。なんとか
してやりたいが、俺にもできないことがあ
る」

ドンドン「嘘だろ！」

リム「あー嘘だ」

三枝、ずっこけている。

リム「まかせておけ。強制送還なんてさせな
い。うちのサンダル工場で働いてもらうこ
とにして3年の就労ビザを取ってやる。た

だし、金がかかるぞ！ 入管の担当者に賄
賂が必要で、多分200万くらいはかかる
かな。それでいいか？」

三枝、パスポートを渡している。

三枝「はい、今までほったらかしにしていた
私が悪い。それからお金なんです、S T
S Cにほとんど寄付してしまい、手持ちが
ありません。S T S Cから返却してもら
うわけにはいかなので、ドンドン理事
長！ 200万お借りできないでしょうか？」
ドンドン「わかった、いつでもいいから返
してくれたらいい」

三枝、深々と頭を下げている。

○サンタアナ・S T S C児童養護施設・厨房

湯野、マイキー、料理を作っている。

キカイ、手伝っている。

アンジェリン、にこしながら見て
いる。

アンジェリン「湯野さんの手つきを見ている

だけで惚れ惚れしてしまふ」

キカイ「世界一のシェフの包丁さばきを目の前で見れるなんて！」

アンジェリン「マイキーが羨ましい。いつでも食べられるんだよ。本当にラッキー」

マイキー、舌を出している。

三枝、やってくる。

三枝「本当にまかないをわざわざ作りにきたんだ。5つ星の料理長がすることか！」

湯野「アンジェリンさんが、いついつとうるさいので」

三枝「アンジェリン！ 湯野さんをこき使うんじゃないよ」

アンジェリン「へへへ」

アンジェリン、マイキー、皿やスプーンなどを用意している。

アンジェリン、マイキーに小声で、
「アンジェリン」ベッドにもぐりこんだ？ な

「なんとなく湯野さんと距離が縮まったように見えるのだけだ」

マイキー、アンジェリンを部屋の隅に連れていく。

x

x

x

（フラッシュバック）

マイキー、湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シートで顔を半分隠しながら、

マイキー「約束なんか破っていいよ。湯野さんの子供がほしい」

x

x

x

120

マイキー「湯野さんがお酒を飲んでいたから、私にも少し頂戴って、お酒は苦手なんだけど、無理して飲んで、その勢いでえいやーっと湯野さんのベッドに潜り込んだの。それで、約束なんか破っていいよ、湯野さんの子供を産んでみたいって囁いた」

アンジェリン、マイキーの肩を思い切り叩いている。

アンジェリン「わーお、やるもんだねー、ね

ーねー、それから？」

マイキー「秘密！」

アンジェリン「ちえっ」

第10話

○ トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋

アイナ、アラ、カレンダーを小脇に抱え、ドアを蹴飛ばして入ってくる。

三枝、パソコンの前に座っているが、驚いて顔をあげる。

アイナ、アラ、三枝の両側に座り、じつと三枝の顔を見ている。

三枝、パソコンを閉じて、

三枝「どうした」

アイナ、カレンダーを広げている。

カレンダーは12月。

アイナ「ボスー。あと10日でクリスマスだよ」

アラ「クリスマス、ジングルベル」

三枝「おお、そうだよな」

アイナ「プレゼントは？」

三枝「欲しいものがあるのか？」

アラ「ケーキ」

アイナ「アラ、それは違うの。ケーキはマミ

ーが買ってくれるでしょう」

アラ「ルービックキューブ」

アイナ「ベイブレード」

アラ「ねるねる」

アイナ「黒ひげ危機一髪」

三枝「ウワー、マニラにあるかな？ ネット

ショップ？ 探すわ」

アイナ、アラ「やったー」

○マカティ・タンの病院・院長室

タン、三枝、ドンドン、上院議員の秘書、ソファに座っている。

ドンドン「タンさん、先日はわざわざ施設までお越しいただいて、寄付をしていただき、本当にありがとうございました」

タン「期待しているからな」

タン、左手を秘書の膝に置いている。
タン「紹介する。彼は俺が選挙参謀をしている上院議員の秘書だ」

秘書、ドンドンと三枝に名刺を渡して

いる。

三枝、名刺を確認している。

秘書「名刺を貰えますか？」

ドンドン、片手で名刺を差し出している。

三枝、両手で名刺を差し出している。

タン「それでな、上院議員がフィリピンの大手財閥からの支援を取り付けている。毎年1億円をSTS Cに寄付するということだ」

三枝、ドンドン、顔を見合わせている。

三枝「1億円ですか？ 夢のようなお話です」

秘書「ただし、そのうちの1割を上院議員に還元してほしい」

ドンドン「1000万を使途不明金として処理し、上院議員に渡すということですか？」

秘書「そうだ」

三枝、顔を両手で覆って、ドンドン、指でこめかみを押さえながら、相談している。

三枝、厳しい表情で、

三枝「1億円は喉から手が出るほど欲しい。しかし、NPOの経理は何よりも透明性が求められます。交際費ですら厳しく制限されておられ、裏金や使途不明金などは一切認められません。他の支援者の信頼を損ないますし、将来的に政府からの助成金を受けける可能性も閉ざされてしまいます。NPOは一般企業とは異なり、公益性と信頼が全てです。せっかくタンさんにご尽力いただいたのですが、この話はお受けすることができないのです」

秘書、冷めた態度で、
秘書「そういうことでしたら、この話はなかったことに」

○同・通路

三枝、ドンドン、歩きながら話している。

三枝「私の判断は間違っていますか？ 素直に受けるべきだったかもしれません。ごまかす方法を考えてから返事をしてもらいたような・・・施設の改装費とか架空の工事をでっちあげるとか・・・1億円をどぶに捨てたような嫌な気持ちです」

ドンドン「俺が財閥を片っ端から当たってみる。脈があるということだろう。あんな話に乗せられてたまるか！」

タン、走ってくる。

タン「ぬか喜びさせてしまったな。上院議員も金が必要だから許してくれ！ ドンドン！ 下院議員に当選したら、直接、財閥に会いに行け！ その時は俺がお膳立てしてやるから」

三枝、ほっとしている。

ドンドン「よろしく願います」

タン「それからな、三枝！ クリスマス明け

にカンルーバンゴルフクラブに行かない
か！ リムも湯野もセバスチャンもキムも
来るぞ」

三枝、にっこり笑って、

三枝「行きます」

○ トンド・S T S C トンド支部・内

テイトボーイ、スタッフ、働いてい
る。

テイトボーイのスマホに着信。

テイトボーイ「おおお、ベルか、どうし

た？」

テイトボーイ「なに！ 妊娠したのか？ 今

どこにいる？」

○ トンド・道路上

ベル、段ボールを敷いて横になってい
る。

ラップ、缶を振って、歩行者を見上げ
ている。

テイトボーイ、あきれた表情でやってくる。

テイトボーイ「おまえら、クリスマスがもうすぐだというのに、またホームレスに後戻りかよ。あの金は全部使っちゃったってことだよな」

ベル、大儀そうに起き上がる。

ベル「楽しかったなあ」

x

x

x

(フラッシュバック)

ベル、ラップ、ダバオ行の長距離バスにお土産をたくさん持って、乗り込んでいる。

ベル、ラップ、海でTシャツのまま遊んでいる。

ラップ、カラオケボックスで歌っている。

ベル、新品のアイフォンの箱を開けている。

ベル、ラップ、友人たち、ジョリビー
でコーラを飲み、ハンバーガーとフレ
ンチフライを食べている。

x

x

x

ベル「ミランダナオにも行ったし、ラップの故
郷にも里帰りした。友達にいっぱいごちそ
うしたし、毎日カラオケで歌って、そう
だ、海にも行った。アイフォンの最新のや
つも買ったし、でもお金はなくなっちゃっ
て、ここに帰ってきた。それから毎日必死
にセックスして、ようやく妊娠したんだ
よ。また赤ちゃん、買ってくれるでしょ」
テイトボーイ「うんうん、多分いけるはずだ
が。それにしてもまたホームレスとは」
ラップ「妊娠3カ月くらいなんだ。病院に入
れないかな」
テイトボーイ「うーん、まあ相談してみるけ
ど、いくらなんでも入院は早すぎると思う
が」

ベル、両手を合わせている。

ベル「テイトボーイ！　お願い！」

ラップ、踊りながらラップを奏でている。

ラップ「Y O！　豪華な病院　ドキドキのチ

ェックイン　バックにドンと300万　ア

イフォン片手に　カラオケ三昧　M O N E

Y　B A B Y　H O M E L E S S　豪華な

病院　夢物語　イエーイイエーイ」

テイトボーイ、舌を出して空を見上げ

て呟く。

テイトボーイ「お前、うまいな」

○サンタアナ・S T S C本部・理事長室

三枝、ドンドン、テイトボーイ、ソフ

アに座って話している。

テイトボーイ「ホームレス夫婦が妊娠3カ月

です。一応報告しておきます」

ドンドン「一応って？　どういうこと？　乗

り気じゃないみたいだな」

テイトボーイ「あいつらと話しているとムカ
ムカして。実は金をすべて使い果たしてホ
ームレスに後戻り。入院させろだの。また
300万もらえるだろうとか、言いたい放
題で」

ドンドン「ふー、まあ、なんとも」

三枝「さあて、どうするかな。要望を聞いて
もいいし、突き放してもいいし、半年ほど
無視するのもありだし、理事長が決めてく
ださい」

テイトボーイ「俺もそう思います」

ドンドン「テイトボーイ、知らせてくれてあ
りがとう。ヴィルマと親父に相談するわ。
俺の気持ちは食べ物に困らないように、少
しだけ援助して、半年たってから考えるの
がいいかな」

テイトボーイ、うんうんと頷いてい
る。

○ トンド・墓地・内

テイトボーイ、歩いている。

椅子に腰掛けて、外を眺めていたおば

あさんが話しかける。

隣の墓の後ろに隠れているジミーがナ

イフを抜き、身構えている。

おばあさんが椅子から立ち上がろうと

して、少しよろける。テイトボーイが

おばあさんの体を支えた瞬間、ジミー

が右手にナイフを握り締め、そのまま

まっすぐにテイトボーイの背中を突き

刺す。

テイとボーイ、驚きの表情で振り返る

が、バツタリ倒れこむ。

ジミー「けけけ、ざまーみろ。お前にとっち

ゃー最高のクリスマスプレゼントだろ」

おばあさんの悲鳴が響き渡る。

ジミー、笑いながら、ゆっくりと歩い

ていく。

50mほど離れたところにいたロビ

ン、両手を大きく上げている。

人があつというまに集まって、テイトボーイを取り囲んでいる。

野次馬 1 「テイトボーイが刺された」

野次馬 2 「ナイフは抜くなよ」

おばあさん、必死に叫んでる。

おばあさん「刺したのはジミー」

救急車を呼ぶ声が聞こえている。

○サンタアナ・STSC・児童養護施設・厨房

パパジー、鍋の中を見ている。

キカイ、スタッフ、調理している。

パパジーのスマホに着信。

パパジー、スマホを見て、首をかしげ

ている。

パパジー「ネルソン？」

パパジー、嫌そうにスマホに話している。

パパジー「何か用か？ 忙しい」

ネルソンのただならぬ声が漏れ聞こえ

てくる。

キカイ、何事かと手を止めている。

パパジ―「ちよつと待て！ 落ち着いて話

せ。なに―、テイトボーイが刺された？

どういうことだ―

キカイ、火を消して、パパジ―のそば

に駆け寄る。

キカイ―「スピ―カーにして―

パパジ―、スピ―カーにしている。

ネルソン―「テイトボーイが墓地で少年に背中を刺された。先ほど、救急車で病院に運ば

れた。容体は不明―

パパジ―「病院はどこ？―

ネルソン―「まだわからない。わかり次第、知らせる―

パパジ―「頼む。それで犯人は捕まったのか？―

ネルソン―「今から捕まえに行く。少年ギャング団のジミーという餓鬼だ―

パパジ―、キカイ、焦りながら、あち

こち連絡している。

○ トンド・墓地・ロビンの家

ネルソン、警官2名、家の中に入って
いく。

ロビン、ジミー、少年たちと話してい
る。

ネルソン「ジミー、殺人未遂容疑で逮捕す
る」

少年たち、心配そうに見ている。

ジミー「心配するな。俺は未成年だから大丈
夫だ」

少年1、ジミーに向かって、
少年1「ボス、本当に大丈夫かな」

ネルソン「お前たちのボスはロビンだろう
が」

ロビン「俺はボスじゃない。ジミーがボス
だ」

ネルソン「ロビンも教唆罪及び児童福祉法違
反容疑で逮捕する」

警官、ロビンとジミーに手錠をかけている。

ロビン、少年たちに目配せしている。

ロビン「どうせすぐに帰れる。わははは」

○ トンド・病院・テイトボーイがいる大部屋

テイトボーイ、寝ている。

三枝、パパジー、キカイ、アンジェリン、ベッドの横でテイトボーイを見て

いる。

ロメロ、カミール、エリ、デレク、スタッフ、勢いよく入ってくる。

デレク「容体は？」

アンジェリン、パパジー、キカイ、三枝、沈痛な表情で少しの間、何も答え

ない。

エリ、テイトボーイのそばに行き、心配そうに見ている。

エリ「死んではいない。生きている」

アンジェリン、キカイ、我慢できずに

笑いだす。

ロメロ「なんで笑ってるんだよ」

アンジェリン「はははは、だって・・・肩甲

骨のあたりをグサツと刺されたの。病院に

運ばれてきたときはナイフが突き刺さった

まま。でもねー、ど、ど、ど、どういうわけ

か内臓にまったく損傷がないの、悪運が強

いというか、笑ってはいけないのだけど、

医者が笑ってるんだよ。例えて言うなら、

スペアリブの薄い肉と骨の間に、きれいに

ナイフが刺さったようなものだって」

ロメロ「スペアリブって？　わかるようなわ

からないような、でも痛いだろう」

キカイ「激痛だろうね」

デレク「そんなことあるのか？　テイトボー

イはまだ寝てるけど」

パパジー「麻酔でね。一応手術はしたけど、

開いて内臓が損傷ないか確認して、縫合し

た。まあ何日かは入院するけどね。おそら

くすぐに復帰する」

ロメロ「わはー、よかったー」

パパジー「正直、ラッキーだった。殺人未遂でジミー。ロ빈は教唆罪で逮捕された」

エリ「その人達が犯人なの？ もっと詳しく

教えて」

パパジー「刺したやつはジミー。墓地の少年

ギャング団のNO2。ボスはロビン。ジミ

ーは未成年らしい。テイトボーイは少年ギ

ャング団を解体して、施設に収容しようと

考えてた。それで盗聴マイクを仕掛けた

り、メンバーの何人かを引き抜いて施設に

送り込んでいたんだ」

エリ「テイトボーイはその恨みで刺されたっ

てこと？」

パパジー「多分な。取り調べていくうちにわ

かってくるだろう」

テイトボーイ、薄目を開けているが、

目が泳いでいる。

カミール、気が付いて、テイトボーイ

の顔を覗き込んでいる。

カミール「目が覚めたみたい」

三枝、ベッドのそばに立っている。

テイトボーイ、力のない声で三枝に話
す。

テイトボーイ「ボス、すみません、あんな餓
鬼にやられるなんて俺も衰えたな。以前な
ら気配を察して機敏に動けた」

三枝「死んだと思ったぞ。もう少しズレてい
たら、お陀仏だった」

テイトボーイ、驚いた表情で起き上が
ろうとする。

三枝、テイトボーイを押さえつけてい
る。

三枝「おいおい、起きるのはダメだ」

テイトボーイ、素直に従っている。

テイトボーイ「もしかしてたいしたことない
のか？　グサツと刺されたとき、もうだめ
かと思ったら、意識が飛んで、そのあとは
何も覚えていない」

パパジー「あーたいしたことない」

テイトボーイ、みんなを見回している。

テイトボーイ「たいしたことないんだっただなぜ大勢で見舞いに来ている？　昔、喧嘩して大怪我したときは、見舞いなんて誰も来なかったのに」

カミール「やくぎの兄さんでも真面目に働いてるから、みんな心配する」

ドンドン、ヴィルマ、入ってくる。

テイトボーイ、再び起き上がろうとする。

テイトボーイ「理事長まで来ちゃった」

カミール、テイトボーイを押さえつけている。

三枝「理事長！　心配には及びません。テイトボーイは不死身です」

ドンドン「ナイフで背中を刺されたんだろ」
パパジー「それも深々と。ところがすつとこどっこい、ピンピンしている」

ドンドン「俄かに信じられないけど・・・」

○パヤタス・STSC・パヤタス支部

マリア、デレク、ソファに座り、話している。テーブルの上に小切手が置かれている。

デレク「どうしたの？」

マリア「昨日結婚したの」

デレク「それはそれは、おめでとう」

マリア「ありがとう・・・ずっと考えていた。

このお金どうしようかなって。教会に寄付しようと思ったけれど。私は信仰心があるから、踏ん切りがつかなくて」

デレク「貯金しとけばいいじゃない」

マリア「それもそうだけど。やはり子供を売ったというのは一生ついてまわる。このお金を持っているだけで不幸になる」

デレク「なんとなくはわかるけど」

マリア「それでデレクたちがNPOを作ったと聞いて、フェイスブック見たのよ。そし

たらここに寄付するのが一番いいって思ったの。だから小切手持ってきた。あなたたちチップを30万払った残り270万がある。使って？ これで子供を売った罪が消えるとは思わないけど」

デレク「でっかいクリスマスプレゼントだな。みんな喜ぶ。マリアの新しい生活に幸あれ。メリークリスマス」

○カローカン・ジュニアハイスクール・内
ジョバイ、新しい制服を着て、友人と話している。

ジョバイ「家を出て、学生寮に住んでいるの。1年以上休んでいたからね」

友人「何があったの？」

ジョバイ「今は話したくないけど、とっても嫌なことがあった。でもジーザスが私を助けてくれたの」

友人「ふーん、よくわからないけど。元気そうだからいいか。明日、クリスマスパーティー

イーがあるの。それで W H I T E E L E
P H A N T があるから、プレゼントを買い
に行かない？ 500円って決められてい
る」

ジョバイ「うん、行く」

○ トンド・パパジーと三枝の家・前

クリスマスソングが大音量で流れてい
る。

メイリーン、パパジー、スタッフ、電
飾を飾り付け、大きなパロールを看板の
下に取り付けている。

アイナ、アラ、クリスマスソングを口
ずさみながら、シャボン玉で遊んでい
る。

○ トンド・病院・テイトボーイがいる大部屋

リンゴ、バナナ、マンゴ、ぶどうが机
の上に置かれている。

聖人のカードが立てかけられ、ロザリ

オが吊るされている。

現金の入った封筒が置かれている。

エリ、マンゴを切っている。

テイトボーイのスタッフ、立っ

る。

ネルソン、見舞いに来ている。

テイトボーイ、横になっているが、目

は開いている。

ネルソン「たいしたことなくてよかったな」

テイトボーイ「あー、それで、ジミーは？」

ネルソン「ジミーは起訴できる。1年半前に

逮捕したときに14歳と主張していたが、

今回も14歳と主張している。出生証明書

がないから正確な年齢はわからないが、1

年半経って同じ年齢というのはありえな

い。問題はロビンの関与だ。彼がジミーに

刺せと命令したことを証明しなくてはなら

ない。ジミーが罪を逃れられないとなる

と、ロビンを裏切って自白してくれそうに

感じる。ジミーの証言があればロビンの教

唆は明らかだ。盗聴データもあるから立証できるだろうし、なんとかなるだろう」

エリ、マンゴを皿にのせて、配っている。

ネルソン「それから、お前に借りを返す。少年ギャング団のメンバー50人を警察が預かっている。家族を呼んで警官が対応している。家族が納得してくればそのままS T S Cの施設に渡すつもりだ」

エリ、マンゴを配るのを止めて、
エリ「うわー。もちろん彼ら全員を受け入れるけど。ただし少年とはいえ、悪の道に深く染まっているから、更生させるのは大変。私たちだけでは到底無理。専門家がすぐに必要なわ」

○サンタアナ・S T S C本部・内

三枝、アンジェリン、パパジー、エリ、カミール、ソファに座り、話している。

エリ「少年ギャング団の少年たちがもうすぐ

やってくる。私たちだけではノウハウもなく、管理できない。更生させる専門家を至急呼んでほしい」

アンジェリン「以前勤めていたNPOにふさわしい人たちがいる。まずは講師として来てもらい、少年ギャングたちにどう接するか指導してもらいます。現場での具体的な対応方法に助言・指導を受けられます」

三枝「よろしく頼む」

エリ、大きく息を吐いている。

カミール「ふーよかった」

○サンタアナ・STSC児童養護施設・内

翌日

アンジェリン、マイキー、話している。

アンジェリン「ボランティアは交通費も出ないのに来てくれてありがとう」

マイキー「時間があるし、メロディはベビーシッターが見てくれている。湯野さんを紹介してくれたせめてものお礼」

ネルソン、警官、子供たち15人と母親たちを連れてくる。

アンジェリン、心配そうに見ている。

講師、指示を出している。

カミール、エリ、スタッフ、子供を座らせて名前、性別、年齢など聞いている。

リガヤ、母親と子供たちと話している。

リガヤ「知ってる子供ばかり、頑張って更生させてやる」

ネルソン、リガヤに気がついて、

ネルソン「盗聴器の時は世話になったな。こ

こで働いてるのか」

リガヤ「はい、ギャング団をいつも見ていたから少しは私でも役に立てると思う」

ネルソン「焦らずにやることだな」

ネルソン、カミールを見て、

ネルソン「第一陣だ。次から次へと放り込むからな」

カミール「まかせて、どんどん連れてきて」

○サンタメサ・STS C サンタメサ支部・内
スタッフ、掃除している。

ロメロ、BABY BOXを見ながら、
スタッフに話している。

ロメロ「クリスマス休暇だけど、赤ちゃんが
入るかもしれないので、俺が毎日、見に来
る。お前たちはストリートチルドレンを探
してこい。トンド支部は50人。パヤタス
支部も何人か入れている。まだ二人しか施
設に入れてないんじや話にならないぞ。全
員クビになる」

456

○サンタアナ・STS C 児童養護施設・幼児
部屋（夜）

手作りの装飾が飾られている。壁には
大きな紙に手書きでMERRY CH
RISTMAS。

テーブルにはケーキ、フライドチキン、
スパゲティ、韓国のインスタントラー
メン、アイスクリーム、アイステイナ

どが並べられている。
その横にはラッピングされたプレゼン
トがいくつもある。
カミール、エリ、キカイ、スタッフた
ち、ビログ、子供たち、クリスマスソ
ングを歌っている。
配達人が大きな荷物を抱えて入ってく
る。

エリ、配送伝票を見ている。

エリ「キムさんからだ」

キカイ、カミール、エリ、うれしそう
に段ボールを開けている。

子供たち、スタッフたち、覗き込んで
いる。

中にはカルビ10kg、トッコク餅入
りスープ、ビビンバ、ハイチュウなど
韓国のお菓子も入っている。

カミール「まるで韓国のクリスマスみたい」

エリ、子供たちに向かって、

エリ「キムさんにお礼のテキストをみんなで

書いて送るよ」

○ ヴァレンズエラ・リムの家・ダイニング
ルーム（夜）

部屋の中に点々とリンゴが置かれてい
る。

部屋の隅にはパイナップルツリーがあ
り、その前にはプレゼントが置かれて
いる。

テーブルには北京ダック、火鍋、点心、
派手な色の大きなケーキがある。

リム、リンロン、ドンドン、ヴィルマ、
赤ちゃん、長男、マリリン、子供二人、
長女、テーブルを囲んでいる。

メイドたち、ホットワインとアップル
ジュースを注いでいる。

リム、マリリンに話している。

リム「ずいぶん前に、あなたに代理母になっ
てくれなんて、失礼なことを言ったことを
謝りたい。ずっと謝りたかったけど、なか

なか会えなくて言う機会がなかった。今日はクリスマスなので祝う前に心からの謝罪をする」

リム、両手を胸の前で合わせている。マリリン「私も感情的になってしまい、怒りすぎました。今はもう気にしていません。ドンドンさんやヴィルマさんのことを思っ
て言ったことだとよくわかっています。お二人が幸せそうなので本当に良かった」

ドンドン「いいクリスマスだな」

リンロン、赤ちゃんを抱きながら、

リンロン「メリークリスマス」

○ トンド・道路上（夜）

ベル、段ボールの上に寝転がりながら、ラップに文句を言っている。

ラップ、少し離れて、ぼーっとベルを見ている。

ベル「どうしてタイトボーイは来てくれないの？ あーあークリスマスは病院で過ごし

たかった」

ラップ「テイトボーイもクリスマスで忙しいはずだ。今頃、おいしいものでも食べて、酒飲んで酔っぱらってるだろう」

ベル、缶を振っている。

ベル「ぼーっとしてないで少しは稼いでこいよ。誰も通らないから、1円も入ってない。食べなくては元気な子供は生まれないよ」

ラップ、渋々立ち上がる。

ラップ「行ってくる。あー惨めだな」

460

○タギッグ・フォートボニファシオ陸軍基地・

ミラーの家・リビング（夜）

アドベントリースに4本のろうそくが立っている。玄関に靴下が置かれている。

その横に大きなクリスマスツリー。テーブルにはガチョウの丸焼き、サワークラウト、ヴァニラプディング、レークーヘン（ジンジャーブレッド）、

ワインが並べられている。

ミラー、シオニ、少女、メイドが食卓を囲んでいる。

シオニ、少女を見つめている。

シオニ「この子のおかげで病院に行くこともなくなった。ようやく泣かなくなったので、兄弟がいないう寂しさが和らいできたのかなと思います」

ミラー。少女を抱きしめている。

ミラー「さあ、食べようか」

シオニ「メリークリスマス」

○オルティガス・キコの家・リビング・夜

テーブルの上にはビール、ジン、ウィスキー。ブランデー、カジキ、カツオ、ラブラプ（魚）エビ、イカ、などシーフード料理が置かれている。
クリスマスソングが流れている。
キコ、ビリー、ドンナ、ラニー、友人のゲイカップル、レズビアンカップル

が8人、ベビーシッター、思い思いに酒を飲んでいる。

ベビーシッター、赤ちゃんを抱いている。
る。

ドンナ、赤ちゃんを抱いている。

ドンナ「うちの子のほうがどうみたってかわいいよね」

キコ、赤ちゃんに手を振りながら、

キコ「そんなわけないだろう、うちの子のほ

うが可愛いに決まっている」

ラニー、手を叩いている。

ラニー「はいはいはい、どちらもかわいい。

そんなことで喧嘩しないでよ」

ビリー「そうだそうだ、さあ飲もうぜ」

友人たち、赤ちゃんを見比べている。

友人1「俺も赤ちゃんが欲しいな」

ドンナ「紹介してあげる。私たち、寄付もしたし、便宜を図ってくれと思う。でも何か月か待ってと言われているの」

キコ、赤ちゃんを抱きながら、酒をラ

ツパ飲みしている。

キコ「メリークリスマス」

W○アラバン・ナネットの家・リビング

ナネット、友人、メイド、話している。

ベビーシッター、大きなクリスマスツ

リーを飾り付けている。

赤ちゃん、ベッドで気持ちよさそうに

寝ている。

友人、赤ちゃんのための靴下などベビ

ー用品をカバンから出している。

メイド、コーヒーを運んでいる。

ナネット「今までごめんなさい。何度も連絡

してくれたのに断ってばかりで」

友人「ううん、元気になってよかった。クリ

スマスだからショッピングモールは閉まっ

ているけど、ホテルのレストランなら大丈

夫。おいしいものでも食べにいけない？」

ナネット「行こう。クリスマスだものね。も

う一人友達呼んでいい？」

友人、大きく頷いている。

○マカティ・レガスピレツジ・湯野のマン
ション自宅・リビング・（夜）

玄関にクリスマスツリーが置かれている。
る。

メロディの枕の横にプレゼントが二つ
置かれている。

テーブルの上には大皿に海鮮ちらし、
鯛のお頭つき、栗きんとんなどのお節
料理、ケンタッキーのチキン、いちご
のクリスマスケーキが並べられている。

メロディ、湯野の膝に座って料理を指
さしている。

マイキー、日本酒をグラスに注いでい
る。

ベビーシッター、メイド、ジュース、
ビールを運んでいる。

アンジェリン、大きなバックパックを
背負い、バッグを持ちながらやってくる。

る。

湯野「待ってたよ、いいタイミング」

アンジェリン、にこにこしながら、メロディにプレゼントを渡している。

アンジェリン「メロディ、メリークリスマス」

メロディ、すぐに開けている。

メロディ「お姉さん、メリークリスマス。ありがとう」

アンジェリン、湯野にバックパックを渡している。

湯野「何？」

アンジェリン「これはボスから。キムさんから大量に賞味期限切れの日本食材をもらって、食べきれないから助けてほしい。クリスマスプレゼントではないって」

湯野、中を見ている。

湯野「レトルトカレーとか缶詰とか問題なさそうなものを選んでるな。ありがとう」

アンジェリン「クリスマスは家族でお祝いするのにお邪魔だよ」

マイキー「いいのいいの、湯野さんも、アンジェリンが来るからって、張り切って作ってくれる」

アンジェリン、お節料理を指さしている。

アンジェリン「うれしいー。それにしてもこの綺麗な料理は何？ 見たことないものがいっぱい並んでる」

湯野「日本はクリスマスの日にはケーキとケントッキーだけなんだ。それだとさびしいので海鮮ちらしとお正月に食べる料理を作った」

アンジェリン「それにしてもこの人数でこの料理は多すぎない？」

湯野「アンジェリンさんはテイクアウト大好きだろう。初めて俺の店に来た時にたくさん持ち帰りをしたのを見たぞ」

アンジェリン「うわー覚えてるんですか？ 恥ずかしい。ということではこれを持ち帰らせてもいいの？」

湯野「この料理を三枝に持って行ってほしい。
きっと長い間、食べていない料理だから、
喜ぶと思う」

アンジェリン「わかりました」

メイド、アンジェリンのグラスに日本
酒を注いでいく。

湯野「それじゃあ、メリークリスマス、乾杯」
全員「メリークリスマス」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス
チャンの家・リビング（夜）

467

巨大なクリスマスツリーが飾られてい
る。その下にはプレゼントが30個以
上ある。

テーブルには大きな豚の丸焼きが2匹。
何種類ものフィリピン料理、どぎつい
色のケーキは8個、飲み物などは各種
揃っている。

セバスチャンを含めて大人30人、子
供が15人が集まっている。

メイド、運転手、ベビーシッターなどが20人いる。

全員、飲み物を持っている。

孫がセバスチャンに話しかける。

孫「おじいさん、クリスマスは辞めてしまったけど、新しい家庭教師は来るの？」

セバスチャン「探してるからもう少し待って」

孫「きれいでやさしいお姉さんがいいな？」

セバスチャン、孫のおでこをつついて

いる。グラスを高く上げて、

セバスチャン「メリークリスマス」

全員「メリークリスマス」

○サンタメサ・STSCサンタメサ支部・中

（夜）

ロメロ、赤い顔をしながらカギを開けて、ライトのスイッチを入れる。中に入り、ベビーボックスを覗く。

赤ちゃんが入っている。

ロメロN「ウワー、びっくりした。本当に入

っている」

ロメロ、ベイビーボックスの中を隅々まで調べている。

ロメロ「メモも何もない。どうする？ カミールはいないし、施設に持っていくか？ それともボスの家？ パパジもいるよな。よし、ボスの家に赤ちゃん持っていこう。いやいや、怒られるかな、クリスマスなのに、えいやーままよ」

○ジプニー・内（夜）

ロメロ、ジプニーの助手席に赤ちゃんを抱いて座り、外を見ている。人がたくさん外に出ている。子供たちはおもちゃのラッパを吹いている。爆竹が大きな音を立てている。打ち上げ花火が空高く上がっている。道路に置かれた仕掛け花火が派手に炎をまき散らしている。空中を花火がヒューっと音を立てて飛んでいる。

赤ちゃんが泣きだしている。

ロメロ、赤ちゃんが火の粉を被らないように体で守っている。

○トンド・パパジーと三枝の家（夜）

アイナ、アラ、おもちゃのラッパを吹いている。

近所の子供たち、クリスマスソングを歌い、家の前に整列している。

メイリーン、小銭を子供たちに渡している。

三枝、パパジー、タイトボーイ、デレク、メイリーン、キカイ、店の前に机と椅子を並べてビールを飲んでいる。

看板の下のパロルの電飾が点滅している。

机には直径10cmの丸いエダムチーズボール、クリスマスハム、メリークリスマスと書かれたケーキ、カルボナーラ、ローカルなお菓子、チキンの丸

焼きが置かれている。

その横にラッピングされたプレゼントが6個積まれている。

花火、爆竹は段ボールに入っている。

爆竹、花火が飛び交っている。

デレク、大きな仕掛け花火を道路の上に

置き、点火している。

メイリオン、耳を塞ぎながら、テイト

ボーイに話しかける。

メイリオン「ビールなんか飲んで大丈夫？

医者は飲んでもいいって言ったの？ 退院

471

の許可は出たの？ まだ傷は治ってないで
しょう」

テイトボーイ「まだ痛いよ。でもクリスマス

に病院で独りぼちは耐えられない。さす

がに誰も見舞いに来てくれないし、先生に

無理言って退院させてもらった」

キカイ「じっとしてなさいよ。動くと傷口が

開く。爆竹なんて触ったらダメ」

三枝、アイナとアラを呼んでいる。

アイナ、アラ、ラッパを吹きながらやってくる。

三枝、プレゼントを渡している。

三枝「ルービックキューブ、ねるねる、ベイブレードはあったけど、いくら探しても黒ひげ危機一髪が見つからない。日本ならどこにでもあるのになあ。それでラブブとクロミのグッズにした。ごめん」

アイナ、アラ、三枝に抱きついている。

アイナ、アラ「ありがとう」

ロメロ、赤ちゃんを大事そうに抱えながら、ジプニーから降りて歩いてくる。

デレク、ロメロを見て驚いている。

デレク「おい！　ロメロ！　何を抱いてる？」

三枝、ティトボーイ、パパジー、キカイ、メイリーン、笑いながら見ている。

アイナ、アラ、ロメロに駆け寄る。

アイナ「メリークリスマス、おいしいものいっぱいあるよ」

ロメロ、お金をアイナとアラに渡している。

ロメロ「アイナ、アラ、ごめん、急に来るところになって、プレゼントを用意していないけど、ハイ、1000円あげる。メリークリスマス」

アイナ、アラ、ロメロの手の甲をおでこにつけて軽く会釈している。

ロメロ「わーお、MANOPをしてくれた」

ロメロ、三枝の横に座り、赤ちゃんを見せている。

ロメロ「さっき、ベビーボックスを見たら赤ちゃんが入ってた」

三枝「ええっ、クリスマスの日にか！」

パパジ「それってジーザスの生まれ変わりかもな、俺たちにとっては縁起がいい」

ロメロ「カミールはサンタアナだし、俺だけでは何かあったら困ると思って、ここか施設かどちらに行こうか迷ったのだけど、こちらのほうが楽しいかなと思って」

三枝「女の子か？　メモとかなにかないのか？」

ロメロ「女の子。メモも手紙も何もない」

キカイ「私が預かる。明朝、サンタアナに行くから届けてあげる」

ロメロ「ラッキー、ここにきてよかった。クリスマスなのに何をしてると怒られるかと思った」

パパジ「笑いながら、指さしている。

パパジ「おうおう、もうひとり来たぞ」

全員、見ている。

アンジェリン、風呂敷包みを慎重に抱えながら、トライシクルから降りている。

キカイ「なにか大事そうに持っているわよ。

まさか赤ちゃんじゃないよね」

アイナ、アラ、すぐさま駆け寄って、

M A N O P O をしている。

アンジェリン、微笑みながら、お金を

渡している。

アイナ、アラ、お互いを見つめて笑っている。

アンジェリン、三枝に風呂敷を渡す。

アンジェリン「はい！　湯野さんからボスにクリスマスプレゼント」

三枝「はあー、湯野さんから？　なんだろう？」

三枝、風呂敷をほどいて中を見ている。

三枝、微動だにしない。

テイトボーイ「ボス、どうした？」

三枝、涙ぐんでいる。

キカイ、中を覗いて、

キカイ「何？　どうしたの？　料理じやな

い！　泣くようなもの？」

三枝「これはな、1年に一度だけ、新年に食べる料理なんだ。長い間食べていなかった」

三枝、湯野に電話している。

三枝「湯野さん、お節料理ありがとう。感激しています」

アンジェリン、三枝のスマホを奪い、話している。

アンジェリン「アンジェリンです。三枝さん
嬉しさのあまり泣いたよー」

三枝、アンジェリンからスマホを奪い
返す。

三枝「メリークリスマス」

三枝、電話を切る。

アンジェリン「料理ってすごいよね。ボスが
泣いてるなんて初めて見た」

デレク、料理を見て、

デレク「少し食べていいかな？ 泣くほどお
いしいのだろう？」

三枝、お節料理をテーブルに並べてい
る。

三枝「みんなで食べよう」

メイリン、コップにビールを注いで
全員に配っている。

メイリン「テイトボーイは少しだけだよ。

アンジェリンも飲もう。デレクもロメロ
も！ 飲もう！」

全員「メリークリスマス」

○ トンド・墓地・S T S C トンド支部

翌日。

三枝、ネルソン、パパジー、テイトボ
ーイ、ソファに座り、昨日の残り物を
食べている。

母親が二人、子供を連れて入ってくる。

ネルソン「決心がついたか、サンタアナの施
設を見てきたのだろう」

母親「よろしくお願いします」

テイトボーイ「この責任者は俺だからいつ
でも相談にのるよ。明日の朝、もう一度来
てくれるか、何人か一緒に行くことになっ
ている。みんなでサンタアナに行こう」

母親、子供、帰っていく。

テイトボーイ「ネルソンがここまでやってく
れるとは思ひもなかった」

ネルソン「借りは返すと約束しただろうが」

パパジー「今回は見直した」

ネルソン「お前らに褒められたってうれしく
ねえよ」

三枝、3人の顔をまじまじと見ている。

x x x

(フラッシュバック)

ネルソン「物売りなんかやめて、日本人にしかできないことを考えろ、少しはスラムの役に立つようなことをな」

x x x

パパジー「時間はあるからゆっくり考えてみて、死んだと思えばなんだってできる」

x x x

三枝「テイトボーイは刺されるし、アンジェリンやパパジーは転職したし、メイリーンはうまくいっていたお店をやめて、引っ越しすることになるし、俺がやってきたことはどうなのかな？」

テイトボーイ「刺されたことなんかなんとも思っていないぜ」

パパジー「俺たちが望んだことだ。ボスのお
かげでみんな下流階級から抜け出そうかし
ている。ボスのやってきたことは間違っ
ていない」

三枝「少しはスラムの役にたてたのかな」

ネルソン「あー俺のおかげだな。犯罪者にし
てはよく頑張ったと思うよ」

テイトボーイ「ボス！ まだまだたいしたこ
とはやってないだろう。感傷に耽ってどう
する。これからだろうが」

479

○ラグナ・カンルーバンゴルフクラブ・レス
トラン・入口（朝）

リム、三枝にパスポートを渡してい
る。

リム「3年の就労ビザとIDも取れた」
三枝「ありがとうございます。これで心置き
なく仕事に打ち込めます」

○同・内

三枝、リム、セバスチャン、タン、湯野、キム、友人2名、朝食を食べている。

三枝「ようやくゴルフができる」

リム「待ってたぞ、ハンデなしで夕食を賭けよう」

三枝「望むところです」

リム「練習はしてるのか？」

三枝「イントラムロスの練習場で200球ばかり」

リム「よし、手加減しないからな」

セバスチャン「俺も賭けに参加させろ」

リム「最後までパットを打つならな、OKはないぞ」

セバスチャン「よし、時間はかかるがやるか」

タン「三枝はここが一番好きなんだろ」

三枝「カンルーバンはフィリピン感満載で。

最高のロケーションです。もう少しメンテがよければ文句なしなんですが」

キム「さあ、スタート時間だぞ、行くぞ」
全員立ち上がる。

○同・通路

タン、三枝、歩きながら話している。
タン「上院議員が謝意を示してきた。° S T
S Cを心から応援したいそうだ。それで裏
金の話は聞かなかったことにしてくれと。
だから1億の寄付を財閥から直接受け取っ
てくれ。多分、財閥からなにか言われたの
だろう」

三枝、深々と頭を下げて、タンの手を
握っている。

三枝「もう感謝するしかありません。これで
S T S Cはやっていけそうです」

○同・1番ホール

リム、セバスチャン、タン、湯野。キ
ム、友人2名、キャディ8人、見てい
る。

三枝、にこにこしながら、ドライバー
をかつ飛ばす。

全員「ナイスショット」

STSC 立ち上げにイベントは？

リムに Z P O n お資料を送る
ドンドンの子供の洗礼式

アンジェリン書類が完璧

○ トンド・墓地

ネルソンとパプジーと三枝語る
来るたびに、子供が増え

ホーリーウィーク

人はいくらかでも集められる

ネルソンとの会話差し込み

バドミントン

への人の子持ちの家族、父親はタクシーの運転手、補導歴あり13歳の男子、親が扱いかねている。

洗礼式

田舎から連れて来る、田舎はもっと貧乏、危険！

483

外国からつれてくる

サラブレッドのように子供を産む牧場を作る

ネットでぼぢゅう

ロメロをおもしろくしろ陽気な馬鹿キャラが必要、誘拐してくる刑務所OK。刑務所内で女囚に産ませる

暗号資産

キャッチボールしよう！」

三枝「まだ暑いから夕方しよう」

アイナ、アラ「やったー」

それに俺は子供な

んて大嫌いだ。欲しくもない。やさしくする
とすぐつけあがるし

○ トンド・墓地

x x x

(フラッシュバック)

ゴミの山で働く少年たち。

x x x